

交替劇

A-02班 研究報告書

No. 1

文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010~2014

狩猟採集民の調査に基づく ヒトの学習行動の実証的研究



寺嶋秀明

2011.3.31

交替劇

ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：
学習能力の進化に基づく実証的研究

A-02班 研究報告書

No. 1



文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010～2014

「交替劇」（ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）
（領域番号 1201）

研究項目 A-02「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の実証的研究」
研究報告書 No.1

2011 年 3 月 31 日発行

[編集・発行]

A-02 班研究代表者 寺嶋秀明

〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518

神戸学院大学人文学部

Tel. (078) 974-1551（大学代表）

[印刷・製本]

協和印刷株式会社

〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13

Tel. (075) 312-4010

目次

まえがき

研究報告

ヒトの学習行動——狩猟採集民・子ども・遊び	寺嶋 秀明	1
心の理論と言語獲得の問題をめぐって	小山 正	7
日本の子どもたちの創造性 ——コラージュ表現を通して——	山上 榮子	13
アボリジニの子どもの適応にかかわる調査報告（2010 年度）.....	窪田 幸子	21
セントラル・カラハリ・サンの日中活動と子どもの遊び	今村 薫	27
学習の三つの顔 ——カナダ・イヌイトの学習をめぐる諸問題——	大村 敬一	35
Socialization via singing and dancing activities among the San of North-Central Namibia	高田 明	43
霊長類の遊びと人類の進化	早木 仁成	49
バカ・ピグミーの狩猟採集活動における子どもの役割	林 耕次	57
Ways of knowing and ways of learning : A sketch of proposed research at Yuendumu, central Australia	Yasmine Musharbash	63

研究会報告

第 1 回	69
第 2 回	71
第 3 回	75

その他報告

The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers (Montpellier, FRANCE ; September 22–24, 2010) （『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議』 フランス・モンペリエ 2010 年 9 月 22–24 日） 報告書	77
---	----

まえがき

文部科学省科学研究費補助金（新学術領域）（2010～2014）による「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究」（略称「交替劇」）がスタートして半年たちました。その研究項目の一つ「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の特性の実証的研究」（A02）の研究成果について報告します。

「交替劇」は、現代人（ホモ・サピエンス）の進化のもっとも新しい部分、すなわち、アフリカからヨーロッパに進出したサピエンスが、その先住者であったネアンデルタールと置き換わっていった過程を言い表したものです。ネアンデルタール人はおよそ 60 万～35 万年前、ヨーロッパに出現しました。高度な石器制作技術をもち、大型のほ乳動物を狩猟し、ヨーロッパに広く分布していました。しかし、約 4 万～3 万年前に急速に分布域を狭め、人類史の舞台から消えていきました。いったい何があったのでしょうか。また、何がそのような現象を引き起こしたのでしょうか。

「交替劇」プロジェクトは、そのようなサピエンスとネアンデルタールとの入れ替わりを、両者の学習能力差の比較によって明らかにしようとする学際的研究プロジェクトです。総括班のもとに 6 つの研究項目が設けられ、学際的観点から研究を発展させます。このプロジェクトの特徴は、さまざまな研究分野が「学習能力の進化」という点に焦点をしばって協働することでしょう。サピエンスとネアンデルタールとの交替については、今日までさまざまな見解や仮説が提唱されています。それらはいずれも一理ある仮説ですが、もっとも肝心な部分が解明されていません。それがサピエンスとネアンデルタールの「学習能力」の違いです。

第四期氷河期後期の大きく変化する自然環境への適応のためには、生業のための道具、さまざまな生業活動、それを支える社会組織、社会関係、コミュニケーション、認知能力、など生活全般におよぶ大きな変化が求められたはずです。それは形質的な進化ならびに文化的進化を引き起こしました。それらすべての根底にあるのが「学習」という能力です。学習は高度な生物のみならず、ごく原初な生物でももっている能力であり、すべての生物の生活を成り立たせているものです。霊長類はその能力を高度に発展させ、進化的繁栄を築いてきましたが、ヒトは最大限その能力を高めたはずです。

現代人の学習能力の特徴はなにか、それを探求するのが研究項目 A02 班の任務です。文化進化のためには、柔軟で豊かな「創造性」による新発見・新発明（個体学習）と、それを保存し同胞や子孫に間違いなく伝える強力な「文化伝達」（社会学習）が必要だったはずです。どのようにヒトは発明し、学習するのでしょうか。

発達心理学などでは乳幼児の発達や学習について多くの研究がされてきました。ただし、自然の中で生きている子供たちがどのように学ぶか、どのように創造性を発達させていくのか、まだ本格的には調べられていません。さらに青年期から大人にかけてもヒトは重要な学習をします。ヒトの学習能力と学習行動の本格的な研究は、これからの課題です。

A02 はこの 5 年間に、狩猟採集民の子どもの観察を中心に、さまざまな方面からヒトの学習行動の調査をおこない、また関連科学の成果を取り入れながら、ヒトの学習行動の進化の理論的考察を進めます。その中で、ネアンデルタールとサピエンスの相違も自ずと明らかになると考えています。

（文責 神戸学院大学 寺嶋秀明）

ヒトの学習行動 ——狩猟採集民・子ども・遊び

寺 嶋 秀 明

(神戸学院大学人文学部)

はじめに

「交替劇」研究項目 A 02 班の研究課題は「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の特性の実証的研究」である。現存する狩猟採集民社会において、子どもの行動観察、とくに遊びの観察や各種のテストなどをおして、現代人（ホモ・サピエンス）の学習の特性を実証的に明らかにしようとするものである。「交替劇」プロジェクトの要点である「社会学習」と「個体学習」のプロセスを実証的に把握することが最終的な目標となる。具体的には、①狩猟採集民の子どもはどのような環境のもとでどのように発達・成長するのか、②日々の活動、とくに遊びの中で、学習や教示がどのようにおこなわれているか、③個体学習の成果としての創造性はどのような状況の下で、どのように生まれ、どのように仲間に継承されるか、といった諸点の実証的解明が課題となる。

さらに、上記のフィールドワークや実験による実証的研究に加え、文化・社会人類学、発達・臨床心理学、霊長類学、考古学、認知科学などの諸科学の学際的協働によって、ヒト以前の霊長類からヒトへの進化を視野に入れた理論研究をおこなう。ネアンデルタールの学習行動についての直接的な証拠を得ることはもちろん不可能であるが、ヒト以前の霊長類、とくにヒトにもっとも近縁である類人猿などの学習行動と現代人の学習行動を精密かつ論理的に比較研究することによって、ネアンデルタールの学習行動の可能性を推測することができる。そしてそれを考古学や他の関連領域のデータと突き合わせ、全体的にネアンデルタールからホモ・サピエンスへの交替劇の原動力となった学習能力の相違を考察することになる。

1. 「狩猟採集民」「子ども」「遊び」

本研究のキーワードとして「狩猟採集民」「子ども」「遊び」の三つをあげることができる。まず、その三点

について簡単に説明をしたい。

(1) 「狩猟採集民」

およそ1万数千年以前には、地球上のすべてのヒトが狩猟採集民であった。ネアンデルタールの盛衰やホモ・サピエンスの進出、そして両者の「交替劇」も狩猟採集生活という舞台の上で演じられた出来事である。「交替劇」を左右した学習は狩猟採集生活の中でおこなわれたものだ。したがって、現生人の学習様式の特性に関しても、同じ狩猟採集生活という環境のもとで一度、しっかりと把握する必要がある。

狩猟採集民への関心は19世紀半ばの人類学・民族学の誕生時にまで遡る。その当時、人類学の目的は過去の人類の姿の復元であり、文化的発達の度合いがもっとも低いとされてきた狩猟採集民は「未開」というラベルをはられるとともに、人類の過去の姿を映し出す鏡として珍重されたのである（Ingold 1999；Kuper 1988）。しかし、20世紀後半過ぎから、狩猟採集社会の独自の価値が追求され、かれらの研究が時代を超越した人間性の理解に大きく貢献することがわかってきた（Lee and DeVore 1968, Lee and Daly 1999）。

現在、かつてのような本格的な狩猟採集を営んでいる人々はほとんどいなくなってしまった。およそ半世紀前までは、生活のほとんどを狩猟採集に依存して暮らしていた人々が、少数ながらも地球のあちこちに残っていたが、ここ数十年の間にさまざまな要因から彼らの生活に大きな変化が生じた。狩猟採集以外の生業にたずさわようになった人々も多い。ただし、そのような「狩猟採集以後（post-hunting & gathering）」の生活を送るようになった人々も、完全に「非-狩猟採集民」になったわけではない。「狩猟採集以後」の生活にも随所に「狩猟採集民的スタイル」が見られる。人々は、農耕や牧畜にたずさわりながらも、時期をみては野山や川そして海に繰り出し、先祖伝来の狩猟採集をおこなっている（もちろん、使用道具や生業としての重要度などには時代の変化が顕著であるが）。また、生業面のみならず、精神的な

部分ではとくに狩猟採集民的生き方が健在である (Barnard 2002; 丸山 2010)。肉をはじめとする食糧や日々の生活物資のシェアリングなどの社会慣習はいまだにほとんどの狩猟採集民において根強く残っている。個人の自立と平等主義は、まだ十分に彼らの世界のバックボーンとして機能している (Myers, 1986; 寺嶋 2009)。彼らの狩猟採集生活についての情報は、「交替劇」におけるホモ・サピエンスの行動の特性を把握する上でかけがえのない資料となるはずである。なお本稿では、生業的には現在狩猟採集活動を主としなくなってきた人々も含めて、簡略化して「狩猟採集民」という言葉で呼ぶことにする。

もちろん現在人類学者が把握しているような狩猟採集民の姿はかつて、地球上がすべて狩猟採集民であった時代の狩猟採集民と同じと言うことはできない。彼らのまわりには農耕民や牧畜民などの異なった生活様式を持った人々がいて、日々の経済的取引や社会的な接触がある。また、行政や国家権力との関係も彼らの生活に無視できない影響を与えている。彼らからの情報は、われわれにとってかけがえのない資料であるが、現生の狩猟採集民を「生きた化石」のように考えることは厳に慎まなければならない。この問題点に関しては、これまでの狩猟採集民研究の成果の蓄積に立って、考古学や古環境学、古生態学などの諸学の知見も加えて慎重な比較研究を進めてゆく必要がある。その点に十分な注意を怠らなければ、現生の狩猟採集民の研究は、人間社会の進化の理解に大きな貢献をするものであることは間違いない。

(2) 「子ども」

ヒトは成長以後もさまざまな学習能力を保持するが、学習の主体が子どもであることは言を俟たないだろう。成長と学習はコインの裏表の関係にある。成長が学習を促し、学習が成長をもたらす。ヒトという種がもつ豊かな学習能力がいかに発揮されるのが子ども時代である。狩猟採集民では、農耕民、牧畜民などの場合と比べると、そのような子ども時代が圧倒的に長いことが特徴となっている。ここで言う「子ども時代」とは、日常的に他の大人と同様に狩猟採集に従事し、生産活動に関わるようになる以前のステージである。

ここで、狩猟採集民における子どもの成長と社会関係の広がりについて大まかな説明をしておく。上記のように、狩猟採集民では他の生業と比べると一般に成熟が遅い。それは身体的なものというよりも、社会的な要因によるものである。まず離乳の時期が3~4歳と遅く、4歳あたりまで母親の乳房にしがみついている子どもも少なくない。その理由は、狩猟採集民では、強制的に離乳さ

せることはほとんどないからである。母親は子どもが自然に離乳するまで、子どもの好きなようにさせる。離乳後は、子どもは急速に母親から離れ、同年齢の仲間のほかに年長の者たちも含んだ多年齢の子ども集団へ日常生活の焦点を移していく。

子ども集団においては、その活動の大半が「遊び」と称される行動に費やされる。子どもどうして親たちがおこなっている生業の真似をしてみたり、ごっこ遊びや狩猟採集にちなんだゲームなど、多種多様な遊びに明け暮れる。およそ十歳以上になると、男子は大人たちがおこなう狩猟、女子は採集活動に参加し、サブシステムに実質的な貢献をすることも可能である。しかし、それはあくまで子どもの意志によるもので、親が強制してさせるものではない。親たちは仕事における子どもたちの手伝いはほとんど期待していない。子どもは仲間と狩猟採集「ごっこ」をしていてもよいし、また親たちとともに本物の狩猟採集活動に同行してもかまわない。あるいは彼らが「遊び」を選択しても、親はいっさい文句を言わない。こういった非拘束的な状態が十代の後半まで続く。ただし、思春期を過ぎると実質的な生業活動の比重が高まってくるし、それがそのまま自立した大人へのステップとなるのである。

子ども時代の長さとその間の学習の重要性は狩猟採集民のみならず、ヒトの一般的特報としても早くから指摘されているものである。チンパンジーやゴリラなどの高等霊長類はヒトほどではないが、寿命の延びと対応して成熟までの期間がたいへん長くなっている。子ども時代の延長と未成熟期間の増大、その間における母親をはじめとする他個体への依存とさまざまな学習機会の増加は、霊長類全体の行動の進化をもたらしていると考えてよいだろう。一般に生物は、遺伝的に拘束された行動と後天的に学習した行動をとるが、霊長類の場合には、後者の比重が格段に強くなり、高等霊長類やヒトではそれが極まっているのである。

(3) 「遊び」

狩猟採集民の子どもの活動のほとんどは「遊び」であると言ってよい。亀井 (2010) はカメルーン南部に住むバカ・ピグミーの集落において1年間に85種類、合計269件の遊びを観察した。亀井はそれらを、①「生業にかかわる遊び」、②「歌・踊り・音を楽しむ遊び」、③「身体とその動きを楽しむ遊び」、④「衣食住にかかわる遊び」、⑤「(自動車など) 近代的事物を用いた遊び」、⑥「(サッカーなど) ルールのある遊び」、⑦「その他」という、七つのカテゴリーに分類している。昔からの伝統的な遊びの外にも、自動車のおもちゃを用いた遊びや

サッカーなど、現代の事物が取り入れられた遊びもある。子どもたちは、自分たちの身の回りのありとあらゆるものを利用しながら、遊びに明け暮れているのである。

子どもたちの遊び集団は多様な年齢の子どもを含むが、バカ・ビグミーのところでは4歳程度の幼児から15～16歳あたりの思春期の青年までがそういった集団を形成している。遊びの中で、子どもはさまざまな知識や技術を身につけていく。遊びは子どもたちに学習の実践的な場を提供する。子どもの遊び集団は、レイヴとウェンガー（1993）の言う「実践のための共同体」である。ここでは知識や技能の伝授といっても教師と生徒がいるわけではない。ともに遊ぶ仲間がいるだけであり、遊びながらそのときに応じて必要な知識や技能が自然と学習される仕組みになっている。ただし、遊びが単に大人へなるための一ステップとして捉えるだけでは、遊びと子どもとの関係を十分に理解したとは言えないだろう。この点については以下に述べる。

2. 人類学と「子ども」の研究

以上のように、「狩猟採集社会」「子ども」「遊び」は、われわれの研究の中心をなすものであるが、われわれの研究はそれにとどまるわけではない。農耕や牧畜社会、あるいは現代の都市社会、産業社会の子どもの研究も必要である。子どもだけにかぎらず、子どもを取り巻く大人たちや社会のあり方も問題になる。遊びも、遊び以外の様々な行動との関係の上で把握しなければならない。人類学においては、人間の理解はホリスティックな観点からなされなければならないとされる。われわれの研究においてもそのようなホリスティックな視点を保ち続ける必要がある。

さらに一つ留意しておかなければならない点がある。それは社会における子どもの位置づけとその研究の方向性である。20世紀に入り、エドワード・タイラーやルイス・ヘンリー・モルガンなどに代表される19世紀の進化主義人類学が衰退した後、マリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンによる機能・構造主義的人类学が擡頭し、現在にまで至る人類学の主流の一つをなすことになった。それは、社会をさまざまな制度からなる構造体としてとらえ、個々の文化現象をその構造の維持という機能において総合的に理解しようという学問的立場であった。

そのような社会の構造の担い手は一人前の大人たちである。したがって、人類学者の追求する構造化された社会は、大人たちの世界であった。そのような立場から

は、子どもについては、将来一人前の大人になって社会を存続させる役割を担う存在である。そして、子ども時代は、当該社会のさまざまな制度を学ぶ期間という位置づけがなされたのは自然の流れであった。端的に言えば、子どもは「未熟な大人」、あるいは一人前になるための人生の一ステップを生きる者でしかなかったのである。したがって、子どもについての研究は、文化・社会人類学のなかではけっして大きく注目される分野ではなかった（Hirschfeld 2002）。

子どもから大人へと成長するプロセス、あるいは成長させるプロセスは「社会化（socialization）」ということばで呼ばれてきた。子どもを当該社会の一人前の成員への過程にある者としてとらえることは、ごく自然のように見えるのである。しかし、「未熟な大人」という子ども観は子どもの理解について大きな妨げとなる。子どもを大人の視点からしか見ないという誤りを犯すことになるからである。子どもの自立性や、それに基づいた行動の理解などは等閑視されてしまいかねない。子どもが単に大人に指導される存在ではないことは、じつは多くの民族誌が語るところである。

遊びについても、「子どもは遊びながら大人になる」という一般的な言い回しがあるが、そこでは遊びが単に手段として見られている恐れがある。子どもが遊びを通してさまざまなことを学び、成長することは間違いないが、問題は中身である。あくまで子どもの目線で遊びを研究することが必要である。子どもは子どもなりに自立した主体と考え、子ども時代をそれ自体の価値から見るという視点である。それによって初めて、遊びの中における子どものさまざまな創発性、自主性などが見えてくるだろう。子どもを単に大人予備軍とするのでは、子ども研究の展望は開けない。

3. 学習と教育に関する人類学的研究

学習（learning）と教育（teaching）は現代では一体のものとして論じられるのが普通であるが、もともとはかなり異なるコンセプトである。学習という行為は、哺乳類や鳥類は言うにおよばず、系統的にごく原始的な動物にも見られる行動である。学習の様態は動物種においてさまざまであるが、一般に進化の系統にそってより高度な内容をもつにいたると言ってよいだろう。一方、教育という行為の方は、ヒト以外のほとんどの動物には見られない。学習は個体単位でなされる行動であるが、教育は「教える者」と「教わる者」がいてはじめて成り立つ相互行為である。その意味で教育は社会的行為であり、それもヒトにおいてはじめて出現したもののようにあ

る。

社会学習 (social learning) は、他者の行動から学ぶという学習プロセスを指す。人にもっとも近い動物であるチンパンジーでは、他者の行為の目的・結果を模倣し、その方法に関しては個体的な試行錯誤で習得するエミュレーション学習 (emulation learning) と呼ばれる学習行動が発達している (プレマック 2005)。エミュレーション学習では、個人の技術的革新などが他の個体に継承されることはない。ただし、エミュレーション学習そのものは、多くの場合きわめて効率のよい学習方法であるとされる (トマセロ 2006)。

一方、人の場合にはエミュレーション学習も行うが、模倣学習 (imitation learning) が発達している。これは、行為の目的や結果はもちろん、手本となる者の方法・動作などを、その内容にかかわらず逐一、生真面目に模倣するものだ。これを「真の」模倣学習と呼ぶ場合もある。模倣学習は、人間社会の特徴である文化の世代間継承を確実に遂行するのに有効であるばかりではなく、学習者に新しい行動や思考の足場 (scaffold) を提供するものである。模倣学習は文化の発展的継承には欠かせないものだ。したがって、人間社会の要諦をなす学習方法であると認知心理学者のトマセロ (2006) は主張する。

さらに人の場合には個体による学習のみならず、他者からの教示や手助けが重要な手段として加わる。教えることは通常、個体が独自におこなう学習よりも、はるかに手早く効率的に文化の継承を可能にする。さまざまな知識や技術が人から人へ、さまざまなチャネル (親から子、年長者から年少者、教師から生徒、など) を経て伝えられていく。教えることそのものは、どの人間社会でもあるものと考えられるが、近代化以降の社会では学校という制度が教えることの中心となってきた。学校では「教えること」および「教えられること」が一定の様式に則って、一定のゴールを目指して強制的におこなわれる。

しかし、ここで不思議なことがある。多くの民族誌が示すところによると、近代化以前の社会では、教えるという行動が見られないことである。たしかに、狩猟採集社会では、社会学習はもっぱら個人が見よう見まねで習得するものであり、大人があれこれ教えることはめったにない。狩猟採集社会に限らず、農耕社会でも牧畜社会でも人類学が一般に対象としてきた社会のほとんどにおいては教育は表には出てこない。

教えることがきわめて有効な文化継承手段であることは間違いないだろう。発達心理学者のジャージェリーとシブラ (Gergely and Csibra 2005) は、ヒトにはもともと

と「教えること・教えられること (pedagogy) への生物学的適応がある」と主張している。すなわち教示はヒトという生物に遺伝的に備わった行動だと言うのである。道具の使用、とくに明確な使い方が不明の道具の使用において教示は重要であったと彼らは強調する。それは人類の進化には不可欠であったはずである。

これらの対立する見方に対して、現状では結論は出せない。教えること・教わることについて、もっと綿密な調査が必要である。ジャージェリーとシブラの研究対象は、近代化された社会の子ども、その中でもとくに新生児というかなり限定的なものであり、人類学が対象とするさまざまな社会ではどうなっているのか、こらからの調査に待たなければならない。また、仮に教示がヒトの生得的な性質であるとしても、成長に従ってそれがどのように実際に展開されていくのか調べていく必要もある。

「教える」ということの意味そのものをもっと掘り下げていく必要がある。プレマックら (Premack & Premack 1994) は、チンパンジーには教示がないと断言するが、教示行動についての彼らが用いている基準は厳格すぎるもので、比較研究にはふさわしくない。一方、文化・社会人類学者も彼らの調査対象とする人々が「教えない」と述べるときには、やはり近代社会の教育を念頭に置いているのかもしれない。中央アフリカ共和国のアカ・ピグミーにおいて、長年子どもの研究を続けてきた人類学者のバリー・ヒューレット (Hewlett et al. nd.) は、子どもがまだ小さいときには、日常的な親子の関わりの中でごく自然な教示「natural pedagogy」が見られることを明らかにしている。

4. 狩猟採集民における社会的価値と学習

「自立 (autonomy)」「平等主義 (egalitarianism)」「シェアリング (sharing)」は、多くの研究者によって狩猟採集社会の特性として取り上げられるものである。これらは相互に深く関連し合い、狩猟採集民の社会環境を形成しているが、同時に人々の学習行動にも大きな影響を与えているはずである。

狩猟採集社会では「強制」というものがないと、南米の狩猟採集民社会を研究したピエール・クラストル (1987) は言う。「強制」がないことは個々人の「自立」の尊重を意味する。人々は他人に命令することも、その反対に命令されることも嫌う。これは大人どうしの関係において顕著であるが (北村 1996)、親と子どもの間にも同じように作用する。親子の間でも権威的な行動はほとんど見られない。上記のように、離乳でさえも母親

の一存で強行することはなく、子どもの意思が尊重されるのである。

前述のごとく、文化発展の重要なファクターの一つが「創造性」である。創造性がどのように生み出されるかは発達心理学のテーマの一つであり、研究がいろいろとおこなわれてきた。しかし、そのほとんどは実験室的環境における研究であり、一般社会の日常的环境においてそれがどのように涵養され、発揮されているのかという文化・社会人類学的文脈での研究はほとんどない。さまざまな狩猟採集社会の創造性の現れ方に関する調査を進めるとともに、狩猟採集社会における自立性の重視がどのように創造性の発達に寄与しているのか、研究を進める必要がある。

狩猟採集民におけるシェアリングの慣行は古くから人々の注目を集めてきた。実際、食物から日常の生活用具までさまざまな品物がシェアリングの対象になるが、とくに肉をはじめとする食物のシェアリングは社会生活に大きな意味を持っている。狩猟採集民は通常、数家族～十数家族からなるバンドという小集団で暮らしているが、獣肉などの貴重な食物は、バンド内のほとんどすべての家族・人々に分配される。シェアリングを拒否することは強い非難の対象となる。シェアリングは多くの社会的価値の中でももっとも重要視されているものである。

シェアリングは、一般には食物や資源などの有形物に関しておこなわれる行為だが、それだけに限らず、知識、技能といった無形物もシェアリングされる。民族によっては、儀式などに関して秘匿的に保持・継承される知識もあるが、生活上の知識・技能は基本的には誰に対してもオープンであり、誰かに独占されるものではない。この問題は、先ほど述べた教示の問題とも関連するが、ここではこれ以上は立ち入らない。今後、具体的な資料を蓄積した上で、様々な角度から比較分析する必要がある。

5. これからの課題

たぐいまれな学習能力がホモ・サピエンスの最終的進化の原動力になったことは間違いない。ただし、その実態に関しては、これまでの民族誌的研究の蓄積は限定的であり、また理論的な研究もほとんどない。これから取り組まなければならない課題は多い。まず何よりも、狩猟採集民の学習の実態に関する実証的データを速やかに収集する必要がある。かつての狩猟採集社会は21世紀に入って急速に変容しつつある。ヒトの狩猟採集生活に関しては、彼らがいまだに貴重な情報源たりうることは

確かであるが、今のうちに調査・研究を進めることは急務である。

20世紀後半は、認知科学という分野の大きな発達があった。ヒトや類人猿などの高等霊長類を対象にした認知能力全般に関して、進化的な問題意識をもった様々な研究がおこなわれた。脳や身体感覚に関するハード的な機能、心や表象能力などのソフト的な機能の探求がおこなわれた。それらの中には、学習の問題に関わるものが少なくない。「共同注視」「他者と自己の同一視」「心の理論」「共感」、そして言語など記号を用いたコミュニケーション能力に関する研究などである。それらの諸研究と人類学的な研究との重ね合わせが試みられる必要がある。

認知心理学者の佐伯胖（2007）は、発達を個人の能力に焦点化して捉えることを批判し、さまざまな関係性の中で生ずる現象として、関係論的に研究しなければならないと強調している。個人の中に溜め込まれる能力が発達するのではなく、個人が他者との間にもつ関係性、個人が他者と関わる世界が発達するのである。学習能力という点に関しても同じような見方が成り立つだろう。学習は単に能力の問題なのではなく、個人とそれを取り巻く他者との関わり、自然環境ならびに社会的・文化的環境との関わりの全体が問題にされなければならないのである。学習はまさに文化と自然とが合体した現象であり、人類学と心理学、その他関連諸学との緊密なコラボレーションが求められる問題領域である。

学習は現代社会においても大きな課題となっている。現代の日本社会における教育論争のあり方を見ても学習・教育問題の迷走ぶりが顕著である。極端な早期教育や詰め込み教育、受験競争、学歴社会の問題点が指摘されながらも、うまく是正される兆しはない。ヒトという動物はなにをどう学習するべくできているのか、どのようにすればもっとも理想的な学習が可能なのか。われわれは今一度、ヒトにおける学習 learning の根本的な特性を見つめ直し、全人格的な発達と社会の進歩に寄与する学習・教育理論を打ち立てる必要があるだろう。「交替劇」における本研究の最終的使命もそこに求められる。

文献

- Barnard, A. 2002 Foraging : Mode of production or mode of thought. Paper presented at International Conference on Hunting and Gathering Societies, Edinburgh, Scotland.
- Hirschfeld, L. A. 2002 Why anthropologists do not like children? *American Anthropologist* 104 : 611–627.
- Hewlett, B., Fouts, H. N., Boyette, A. H., Hewlett, B. L. (nd.) Social learning among Congo Basin hunter-gatherers.
- Ingold, T. 1999 On the social relations of the hunter-gatherer band.

- In : Lee, R. B. and Daly, R. (eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*. pp.399–410, Cambridge Up.
- Csibra, G. and Gergely, G. Social learning and social cognition : The case for pedagogy. In : Munakata, Y. and Johnson, M. H. (eds.) *Processes of Change in Brain and Cognitive Development : Attention and Performance*, pp.249–274.
- Kuper, A. 1988 *The Invention of Primitive Society : Transformations of an Illusion*. London : Routledge.
- Lee, R. B. and Daly, R. (eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*. pp.399–410, Cambridge Up.
- Lee, R. B. and De Vore, I. 1968 *Man the Hunter*, Aldine.
- Myers, F. 1986 *Pintupi Country, Pintupi Self : Sentiment, Place and Politics amon Western Desert Aborigines*. California Up.
- Premack, A. and Premack, D. 1994 Why animals have neither culture nore history? In : Ingold, T. (ed.) *Companion Encyclopedia of Anthropology : Humanity, Culture and Social Life*. pp.350–365, London : Routledge.
- 亀井伸孝 2010『森の小さな〈ハンター〉たち』京都大学学術出版会。
- 北村光二 1996「『平等主義社会』というノスタルジア—ブッシュマンは平等主義者じゃない」『アフリカ研究』48 : 19–34。
- クラストル, P. 1987『国家に抗する社会』書肆風の薔薇。
- 佐伯胖 2007「人間発達の軸としての『共感』」佐伯胖編『共感—育ち合う保育の中で』ミネルヴァ書房。
- 寺嶋秀明 2009「『今ここのバンド』から『はるかなバンド』まで」河合香吏編『集団—人類学的研究』京都大学学術出版会。
- トマセロ, M. 2006『言語と認知の発達』勁草書房。
- プレマック, D. & プレマック, A. 2005『心の発生と進化—チンパンジー, 赤ちゃん, ヒト』鈴木光太郎訳, 新曜社。
- 丸山淳子 2010『変化を生き抜くブッシュマン』世界思想社。
- レイヴ, J & ウェンガー, E. 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書。

心の理論と言語獲得の問題をめぐって

小 山 正

(神戸学院大学人文学部)

1. はじめに

ヒトの祖先や他の霊長類は、社会的問題に対処するために特別な社会的知能を進化させたのではないかと考えられ、その過程で「原言語」が発達してきたことが指摘されている（児玉・野澤，2009）。ホモ・ネアンデルターレンシスは、原言語を持っていたが、汎用的な言語の性質は伴っていなかったという。原言語が社会的知能と共に進化し、われわれの言語のように音声的コミュニケーションが汎用的な役割を持つようになったともいわれている（児玉・野澤，2009）。このことは、個体発生的に現代の言語獲得研究が提示していることと一致する。新人はネアンデルタール人に比し、喉頭の構造が異なることにより言語を扱いやすいという説もあり、旧人と新人との学習能力差を考えるにおいて言語発達の問題は注目される。

新人とネアンデルタール人は、一時期には共存し、狩猟採集をめぐって争ったとも考えられている。一方、新人は、旧人に比して言語やコミュニケーション能力が発達し、新人の集団が大きくなったといわれる。旧人ネアンデルタール人は、新しい環境に適応しえなかったのは、なぜだったのか、学習能力差を考えるうえでは興味深い問題である。

そこで考えられるのが、新人はネアンデルタール人に比べて、他者をよりよく認識することができたのではないかという問題である。他者認識によって、他者と意図を共有し、役割や共同体のルールを認めることができる。すなわち、他者理解や共感の能力である。そこには、抽象化の能力を必要とする（長谷川，2002）。そして、このような他者認識によって個人の能力を超えた共同体の文化を発展させていったといえる。ネアンデルタール人はそれができなかったのだろうか。そこで注目されているのが、「心の理論」(Theory of Mind: ToM) の発達である (Tomasello, 1999)。他者の意図や信念を理解し、理論化することが学習能力や社会的知能の発達基

盤として注目される。

「心の理論」の発達には言語発達関わっている。神土 (2000) は、定型発達の子どもの縦断的観察資料を基に他者理解と言語獲得との関連性を問題にするなかで、「他者の発話を模倣していくなかで、共通の表現形式を、また他者の思考を他者のことばから理解することによって、共通の思考体系を培い始めていることがわかる。そこに自－他の分化がみられることによって、他者と対等な立場での、決して受け身でない互いの世界を共有するための会話というものがみられ始めているのである」と述べている。

旧人ネアンデルタールと新人サピエンスとの間にみられる学習能力の差を考えるにあたって神土 (2000) が述べているような定型発達の子どもの発達過程にみられることばを通しての他者理解の過程を明らかにしていくことは重要なテーマである。

2. 「心の理論」の発達

「心の理論」とは、他者の心的状態について考え、彼らがどのように考えるのかの理論を形成する能力である (Harris & Butterworth, 2002)。1970 年代後半におけるチンパンジーが心の理論を持っているのかどうかという検証から、今日においても発達心理学の数多くの研究が行われているテーマである。心の理論の発達は漸進的に進み、概ね表 1 に示すような発達過程が示されている。新人は「心の理論」を持っていたと考えられるが、表 1 のどのレベルであったのかは興味深い問題である。

おそらく、神土 (2000) が指摘しているように、他者の行為の模倣行為を通して他者の意図の理解や他者との共有関係の楽しさ、気持ちを共有したいということに複雑な感情の発達が関わっていると考えられる。

一方、Nelson (2005) は、心の理論の発達を考えるにあたって、図 1 に示すような個々の子どもの時期に理論があつて継次的に心の理論の発達がなされていくのではないとしている。また、心の理論の発達には、愛着、ふ

表1 「心の理論」の発達過程

生後9—12か月	他者の関心・視線に追随する。 対象への共同注意。
生後18か月—2歳	ふり遊び。 他者の視線と行動との身体的関係を理解する。 目的行動の理解。 対象に向けられた内的状態を考えることによって心的状態語を理解する（欲求の理解）。
3歳	他者には自分たちと異なる世界の理解の仕方があることがわかる。 想像的な対象は現実の対象と異なることを理解する。 人の行為はその人の欲求、意図、考えによって決定されていることを理解する。 知覚的活動（見る、話されるといったこと）は、認知と結びついていることを理解する。 「思い出す」「いま」「考える」といったことばが自発的発話に出現する。
4—5歳	世の中での表象として内的状態を概念化する（欲求や信念の理解）。 異なる知覚的視点によって人には異なる解釈が起こることがわかる。見ることや聞くことは人の認知に関係していることや、認知と信念による現実の行動の生じ方（信念によって人はある行動を行うということ）に関する情報へのアクセスの仕方がわかる。
6—8歳	人が「知っている」とか「記憶する」、「忘れる」、「推測する」といった状況の適切な判断をする。
8—10歳	うそを隠すことやうそをあばくことの方略を理解する。

（Westby, C., 1999 より筆者が作成したもの。小山・神土, 2004 より）

り、実行機能、メタ表象能力が先行する能力として考えられ、図2に示すような間主観性や自己、想像、実行機能、会話などの発達があって心の理論の発達につながるとしているが、直接的な因果関係を示すことは実証されていないと Nelson（2005）は指摘している。その点については今後検討を必要とする。しかし、自閉症スペクトラムの子どもにおいては心の理論の発達に困難さがあり（Frith, 2003；小山・神土, 2004）、その背景には、自己感や想像、実行機能における問題が影響しているからである。Nelson（2005）は、先の神土（2000）同様、複雑な言語の獲得が心の理論や社会認知機能の発達に大きな影響を与えているとしている。また、共同体のメンバーに子どもがなるには、心の言語（language of minds）を学習しなければならないと Nelson はいう。この指摘は、まさに心の理論と言語発達との関連性を指摘しているものといえるし、新人がどのように獲得していったかの問題が浮かび上がってくる。

Nelson（2005）は、心の共同性（Community of Mind : CoM）という概念を提示している。それは先ににあげた新人にみられたと考えられる役割や共同体のルールを認識することと重なる。ToM とは別に CoM と言語獲得との関連性をみていくことが必要である。

Nelson（2005）は心の共同性（Community of Mind : CoM）と言語獲得との関連性を図3のように考えている。乳児期初期から人の子どもは社会的経験、会話、語



図1 理論の見方（Nelson, 2005 より）

（間主観性）+（自己）+（想像）+
（実行機能）+（会話）

→ ToM

図2 包括的な発達の見方（Nelson, 2005 より）

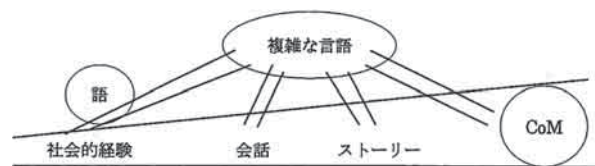


図3 心の共同性への経路（Nelson, 2005 より）

りを受け CoM を獲得していく。言語の意味には CoM が当然関わり、語や社会的経験、話しを聴くことやそのストーリーの質が CoM や複雑な言語に関連していると思われるし、そこには個々の認知能力がかなり影響を与えていると考えられる。狩猟採集民においては、大人は指導しないといわれているが（寺嶋, 2010）、会話や観察学習などを通して、狩猟採集民は CoM を形成していると考えられる。個々の子どもにみられる認知能力における variation が CoM の形成や複雑な言語の獲得といかに関連しているかを明らかにしていくことが今後の課題であるといえる。

Astington & Baird（2005）は、言語の多面的特性として表2に示すような内容を考えている。人の言語は個人内での表象システムと個人間でのコミュニケーションシステムとして用いられる（Astington & Baird, 2005）。個人内での表象能力は、小山（2009）は象徴化能力としてとらえている。それは思考につながる。表2では、Astington & Baird（2005）は、言語の機能と構造レベルでとらえており、個人的能力としての言語の構造をコミュニケーションにおいて使用する能力としての語用能力と社会的文脈、そのプロセスでの意味論の発達と心の理論の発達との関連性を検討していくことが必要である。語用能力は、子どもの知識にない概念のパーツに対する事実を提供する図3にもある会話の成立にとって欠かせないのである。言語発達が著しい時期にある子どもの語の意味の学習は、大人の語りを聴くことによってなされていく（Nelson, 2005）。

ToM と CoM の形成、および子ども個人内での思考が連関して新たな文化が創造されていく契機となるのではないかと考えられる。そこに言語の役割がひとつあるように思われる。今後、この点についてはさらに検討し

表2 言語の多面的特性

言語				
機能		Structure		
表象 (言語的思考)	コミュニケーション (談話)		全般的言語	
	語用論 (個体能力)	言語的環境 (社会的文脈)		心的状態語 特殊動詞
			意味論 (心的状態、 語彙を表示 する)	統語論 (心的動詞の文 的補語)

(Astington & Baird, 2005 より)

ていきたい。

3. 前言語的コミュニケーション行動の高次化の背景にある象徴化の共有

言語は相互のコミュニケーション活動を効果的により調整されたものにするために形成される。「コミュニケーションから言語へ」ということがよくいわれる。

発達というのはプロセスである。言語の獲得に至るまでのプロセスをとらえることに関して、Kaye (1982) は、その著書、*The Mental and Social Life of Babies* (邦訳『親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするのか』鯨岡峻他訳 1993) のなかで、コミュニケーションがどのように発達してシンボルを用いる発達へ至るかという問題について、コミュニケーション、相互主観性、身振り、表象、模倣、社会化、自己意識の発達に注目している。

筆者(小山, 2009)は、初期の言語獲得のプロセスを「象徴機能」の発達と、コミュニケーションから言語というとりえ方から、「前言語的コミュニケーション行動の高次化」について明らかにしてきた(小山, 2009)。高次化という点に関して、小山は、伝達手段となる行為の協約化、慣用化、および複合化といった観点から前言語的コミュニケーション行動の発達をとらえてきた。コミュニケーション行動の高次化には子どもの認知発達と他者との象徴化の共有が関わっていることを明らかにしてきた(小山, 2009)。

近年の発達心理学は、生後間もない新生児の頃から、人間の赤ちゃんが有能であること事実を提示してきた。そのことから、言語獲得の〈領域固有性〉を示すと考えている研究者も少なくない(Karmiloff-Smith, 1992)。その一例としてよく紹介される新生児期の表情模倣、共鳴動作(co-action)のような、新生児、乳児の有能性に関する事実の集積を目のあたりにして、人間の赤ちゃんが言語獲得に関連のある情報にきわめて早期から注意を向け、偏好を持っているために言語獲得が進むという面は否定できない。また、Bruner (1982) が言語獲得との関連で注目した乳児の持つ初期の認知的能力である、目標

志向性、目的-手段のレディネス、相互交渉性、体系性、抽象性といった能力は誕生後間もなくからヒトの子どもは活用しているように思われる。しかし、獲得されていく言語の内容、その豊かさとなると、本稿第2節でもふれたように、子どもと彼らの環境との相互作用に依るところが大きいのではないかと思われる。

4. 想像性と象徴機能の発達とその基盤

言語はシンボルである。発達に遅れのみられる子どもの言語獲得の支援からは、前言語的コミュニケーション行動の高次化のプロセスにおいては、象徴機能の発達の背景にみられる子どもの対物認知の認識能力の発達を考えさせられる(小山, 2008)。図4は子どもと物との世界と子どもと人との世界の統合化という観点から、言語獲得初期の発達で注目すべきものとの関連をまとめたものである。

原言語から社会的言語への移行期には、観察学習、模倣、模倣を超えた同一視のうえに、縮小模倣や慣用的な動作による象徴化がみられる。大人の行為の観察学習からその行為を完全に模倣するのではなくて、子ども自身の表現による縮小模倣や協約性を子どもが感じる慣用的動作を行うことによって表象化することが原言語から社会的言語への移行期には現代の子どもにおいてはみられる。図5は、筆者が観察した定型発達の子ども(女兒)の象徴遊びにおける他者の行為のふりである。このような行為を通して人の行為の象徴化とその表現が生まれ、それは他者認識にもつながっていく。

一方、物との関係では、原言語と対応するのは物の慣用的操作である。旧人にみられる石器の使用は物の慣用的操作の心性を示しているものと思われる。しかし、現代の子どもでは、遊びというものが意識化されて、社会的言語を獲得し始め、言語による概括化が始まるのである。遊びの意識がみられてくると、生活経験の遊び化や象徴化がいつそう進展し、それとともに遊びの計画性がみられ始めてくる。このような過程で象徴機能は洗練されていく。図6は先に紹介した子どもの現実経験の再現遊びである。生活経験の遊び化の一例といえる。

狩猟採集民においては、遊びが「学習の場」とであるといわれている(寺嶋, 2010)。社会的言語が組織的に獲得される時期には、わが国のような社会の子どもにおいては、生活経験の遊び化のなかで象徴化能力やプランニング、みだての柔軟性といったことが学習され、それは創造性と想像性を育むことにつながっている。狩猟採集民の子どもにおいても模倣を通してどのような学習がなされているのか、また、そこにみられる発達スタイル・

がり、そこでの学習・認識が言語の発達と関連している
と考える。旧人と新人との学習能力の差についてもまず
そのあたりにあたりから検討していく必要があるのでは
ないかと考える。

文献

- Astington, J. W., & Baird, J. A. (Eds.), 2005 *Why language matters for theory of mind*. New York, Oxford University Press.
- Bruner, J. 1982 *Child's Talk: Learning to Use Language*. Oxford, Oxford University Press.
- Frith, U. 2003 *Autism: Explaining the enigma. Second edition*. Oxford, Blackwell. (富田真紀・清水康夫・鈴木玲子訳 2009 自閉症の謎を解き明かす 東京書籍)
- 長谷川真理子 (編) 2002 ヒト、この不思議な生き物はどこから来たのか ウエッジ
- Harris, M. & Butterworth, G. 2002 *Developmental Psychology: A Student's Handbook*. Hove, Psychology Press.
- 神土陽子 2000 子どもの心の理解とことばの発達 小山 正 (編) 2000 ことばが育つ条件—言語獲得期にある子どもの発達— 86-99. 培風館
- Karmiloff-Smith, A. 1992 *Beyond Modularity: Developmental Perspective on Cognitive Science*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kaye, K. 1982 *The Mental and Social Life of Babies: How Parents Create Persons*. Chicago, The University of Chicago Press.
- 児玉一宏・野澤 元 2009 言語習得と用法基盤モデル 講座 認知言語学のフロンティア 6 研究社
- 小山 正 (編) 2008 言語獲得期の発達 ナカニシヤ出版.
- 小山 正 2009 言語獲得期にある子どもの象徴機能の発達とその支援 風間書房
- 小山 正・神土陽子 (編) 2004 自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達 ナカニシヤ出版
- 松沢哲郎 2002 進化の隣人—ヒトとチンパンジー 岩波書店.
- 松沢哲郎 2010 人間とは何かを考える 発達 121: 104-112.
- Nelson, K. 2005 Language Pathways into the Community of Minds. In J. W. Astington & J. A. Baird (Eds.), *Why language matters for theory of mind*. New York, Oxford University Press.
- 寺嶋秀明 2010 学習・遊び・狩猟採集民 赤澤 威 (編) 2010 ネアンデルタールとサビエンス交替劇の真相: 学習能力の進化に基づく実証的研究 第1回研究大会抄録 38.
- Tomasello, M. 1999 *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多 啓訳 2006 心とことばの起源を探る—文化と認知 勁草書房.)
- Westby, C. 1999 Assessment of pragmatic competence in children with psychiatric disorders. In D. Rogers-Adkinson & P. Griffith (Eds.) *Communication Disorders and Children with Psychiatric and Behavioral Disorders*. San-Diego, CA: Singular Publishing.

日本の子どもたちの創造性

——コラージュ表現を通して——

山 上 榮 子

(神戸学院大学人文学部)

I はじめに

文化人類学におけるテスト調査の手法は、半世紀前非常に盛んでした。日本においても藤岡が、日本の村々やカラコルム、ネパールの原住民やアフリカ・サバンナの狩猟採集民に対して、ロールシャッハ法やバウムテストなどの心理テストを用いて調査をしています。そこでは、それぞれの文化を反映したモータルパーソナリティを明らかにし、パーソナリティの進化が示されています。しかし、現在では倫理的問題や、近代化社会で開発され標準化された技法を用いて非近代化社会の人々を査定することへの感度の違いなどからあまり実施されていないようです。確かに、文化人類学のオーソドックスな研究法は面接と自然観察で、テスト調査より侵入性が少ないかもしれません。しかし、文化人類学的手法によって得た資料も、「素朴な取り扱いと解釈をするときは、大いに誤解を生む可能性」を含み、「面接や観察の結果によってテスト結果をチェックするのではなく、テスト結果によって、われわれの（面接と観察の）誤りやすさを警告する測度を提供しうる」（藤岡、1966）ことがあります。

本研究では、現地の人々に寄り添えるような技法を用いたいと考えました。したがって、藤岡らの「テスト調査」に限定せず、子どもの発達を含む様々な心理面が反映される技法を用いようと思います。具体的には、簡便な心理テストであるベンダーゲシュタルト・テスト及びハンドテストと、アート活動であるコラージュ制作です。それらは比較的易しく、なじみのある材料を使うために、子どもにとっては遊びのような課題です。とりわけ、本論で取り上げるコラージュ制作は遊びです。コラージュを作るためにはまず、描画と同じように1枚の紙が与えられます。その紙に何かを描くのではなく、材料として与えられた絵や写真の中から好きなように選んで切って貼るのです。まず、目の前にある絵や写真を眺める、そして心に留まったものを選び、はさみで切り、の

りで貼る行為はまさに遊びです。このように、遊びのような自由さを保証しながらも、一定の枠組みから子どもたちの活動を観察することは、視点が定まり特徴を見つけやすいのです。また、コラージュ作品という目に見える形で残ったものは、実施時以降の考察にとっても便利です。このコラージュ制作を狩猟採集民の子どもたちに実施する前に、まず、日本の子どもたちにしてもらいました。コラージュという表現媒体を通して、子どもたちがどのような創造性を発揮したかを本論では検討します。

II コラージュについて

1) コラージュとは

コラージュは、1912年 P. Picasso による「藤張りの椅子のある静物」で始まった視覚芸術領域の一技法です。そこでは、本物の縄と模造布が貼られることで、それまでにない独特の絵画世界が展開しました。さらに Picasso は、新聞紙、壁紙、楽譜などさまざまな紙を切って貼るパピエ・コレ（貼り紙）を発展させました。この手法はさまざまに進化発展しており、J. Svankmajer（くまがいマキ 2001）の触覚コラージュでは、石、人骨、羽毛、昆虫、枯れ枝などが用いられ、触覚に訴えかけるものです。また、「箱の旅人」（金井、2005）と呼ばれる J. Cornell は、小さな木製の箱の中に、写真や玩具、ガラス玉、機械の部品、枯れた花などを納め、「完璧に充足した世界」を築き上げました。この Cornell は、便器まで芸術に仕上げた M. Duchamp と同様に、どんな物でも注目され心がこめられることにより、芸術になりうることを追求しました。このような3次元で表現するコラージュもありますが、基本は2次元のものです。例えば絵本作家の中にも、コラージュを用いた人は何人かいます。「はらぺこあおむし」で有名な E. Carle（1976）や、「いやだいやだ」のせなけいこ（1969）など、コラージュや切り絵で独創的な世界を生み出し、子どもたちを魅了しているのです。また、ファブリック芸術家としての C. Stevenson（1998）は、包み紙、写真、

ジグソーパズルの小片、布、などを用いて、「ありふれたものからすばらしいものへの変容 Transforming the ordinary into the extraordinary」を具現化させています。このようにコラージュは、本来の目的を超えた所に成立します。衣服のための布地やボタン、雑誌を構成する一葉の写真、宣伝のための広告ちらしなどは、その役割を超えます。つまり、これらの「ありふれたもの」は本来の姿を超え、ハサミと糊を媒体にしてリ・サイクルされ（再び円環となって）、動き始めるのです。この「ありふれたものからすばらしいものへの変容」こそ、メタ芸術としてのコラージュの特徴を示しているのではないのでしょうか。そして、すでに存在するものの中から何かを選び出し、組み合わせを工夫することにより、全く新しい世界が築かれるためには、制作者の創造性や適応性が大きく関与することになります。

2) コラージュ査定のためのコラージュ解釈仮説

コラージュは、美術家や絵本作家のような専門家だけが用いる表現技法ではありません。描画や造形が保育や教育の現場で、また、心の問題を抱える医療、福祉、矯正などの現場で、自己表現の方法として用いられているように、コラージュもさまざまな人々が試みています。とりわけ、森谷（1987）が箱庭療法からヒントを得て、コラージュ療法としてコラージュを再発見して以来、広く普及しています。しかし、制作された作品をどう理解しどう読み取るのかについては、確立された方法はありませんでした。そこで、山上（2010）は、客観的指標を用いるコラージュ解釈仮説を提案しました。当仮説を用いてコラージュ表現をスコア化して見るができるため、数量化による比較検討がしやすいものと思われます。ここでは、簡潔に説明し、日本の子どもたちのコラージュを読み解く手立てとします。

コラージュ解釈仮説は、作品の内容や制作方法をスコアリングすることによる量的分析を基本枠とし、その他の特徴を捉える質的分析とから成ります。本論では、量的分析を中心に説明します。スコアリングの定義に従ってコラージュ作品を査定していくのですが、第一に、コラージュ表現の内容に注目します。貼られたものに、人間が登場しているか、また登場しているのなら、どんな人間なのかを、以下の内容カテゴリーの定義に沿って当てはめます。非人称的・対物反応も同様に定義に沿ってチェックしていきます。切片数は数えないで、1つであれば1、なければ0と得点化します。つぎに、切り方や、貼り方、空間の使い方などについて、様式カテゴリーの定義を見ながら検討し、当てはまることがあれば、1を、なければ0と得点をつけます。

表1 コラージュ・スコアリングカテゴリーの定義

*内容カテゴリー	(α は信頼性係数)
①【対人】($\alpha = .903$)	・[友好]: 二人以上（ひとりと動物も可）の肯定的な関係性が見られる。 ・[子ども]: 子どもであればどんな姿でもよい。 ・[存在]: 友好・子ども・主張・情動の各カテゴリーに入らない人物、立っている等。 ・[主張]: スポーツ・演劇、収穫物を見せる、指示や指揮する人。 ・[情動]: 怒り、恐怖、泣くなど否定的感情や性的衝動を示す人。 ・[動物]: すべての動物。
②【環境】($\alpha = .653$)	・[敵意]: ナイフ・ピストルなどの凶器、戦車。 ・[食物]: 食材、調理された食物、飲み物。 ・[物体]: 乗り物、花、建築物、家具など ・[風景]: 遠近感のある景色も含む。 ・[抽象]: 模様、図案、○やハート型
*様式カテゴリー	
①【表出】($\alpha = .900$)	・[切片 30]: 切片数が 30 以上。 ・[重ね貼り]: 1 枚の上にさらに貼る。 ・[くりぬき]: 輪郭線にそってくりぬく。 ・[創出]: 元の写真を無視して切り、何かを創りだす。いわゆる切り絵。
②【葛藤】($\alpha = .826$)	・[べた貼り]: 用紙全面を 1 枚の写真が覆う。 ・[分割]: 顔の一部や手先、また物体の切断など対象の更なる分割。 ・[はみだし]: 用紙から切片がはみだす。 ・[文字挿入]: キャプションや説明の文字。
③【後退】($\alpha = .858$)	・[余白大]: 余白部 1/3 以上や不自然な空白 ・[矩形]: 切片の形がすべて長方形か正方形。

つぎに、カテゴリーの意味や解釈の要点を簡略に述べます。表現内容は、意識化された制作意図に直接つながっていることが多いものです。実際、男の子は「車（の写真）が欲しい」と言ったり、大人も「鳥（の写真）はありませんか？」と制作の見守り手に尋ねることもあります。そのため、内容カテゴリーである【対人】（[友好] + [子ども] + [存在] + [主張] + [情動] + [動物]）：【環境】（[敵意] + [食物] + [物体] + [風景] + [抽象]）の値は被験者の興味や関心、エネルギーの注がれる向きが人間なのか非対人世界なのかを反映すると考えます。【対人】反応の下位カテゴリー（[友好] 以下全部で 6 カテゴリー）は、対人関係のさまざまな在り方を反映します。非対人的な課題、遂行、活動の指標である【環境】反応も、下位カテゴリーにより、関心の方向性が異なると仮定します。様式カテゴリーは、切り方や貼り方についてのカテゴリーです。切って貼る行為はあまり意識しないでなされるため、課題解決場面への対処法が反映すると考えられます。そのため、様式カテゴリーの比であ

る【表出】（[切片 30]+[重ね貼り]+[くりぬき]+[創出]）：【葛藤】（[べた貼り]+[分割]+[はみだし]+[文字挿入]）：【後退】（[余白大]+[矩形]）を体験型と考えたいと思います。なお、それぞれのカテゴリーの意味については、収集した子どものデータに関係するものだけを取り上げて説明します。

Ⅲ 対象と方法

*対象

1) 保育園児 3歳～6歳児 25名（男子18名、女子7名）

九州のA市の私立B保育園に通う子どもたち

2) 小学1年生 6歳～7歳児 84名（男子50名、女子34名）

関西のC市の市立D小学校に通う子どもたち

3) 小学3年生 8～9歳児 75名（男子42名、女子33名）

関西のC市の市立D小学校に通う子どもたち

*方法

B保育園では、多目的室で、1つのテーブルに2～3人ずつの子どもたちが交替で座り、一人当たり20～60分かけて制作しました。D小学校では、教室または図書室において、数人ずつのグループに分かれて、30～60分かけて制作しました。子どもたちのコラージュ制作風景を写真で示します（図1）。材料は、8つ切り画用紙、のり、はさみ、雑誌「のりもの」「いきもの」「たべもの」「くらし」などの本をバラしてチラシ状にしたものを各テーブルの上に並べました。どのグループにも同じ材料を提供し、写真素材の統制は行いましたが、1年生の1クラスだけは、自然素材の葉も加えています。その意図するところは、素材であるグラビア雑誌の写真や宣

伝用のちらしは、近代化社会の文化の産物そのもので、狩猟採集民の子どもにとってはなじみのないものかもしれません。したがって、自然と共に生きる狩猟採集民の子どもには、生活環境に適った素材（例えば葉、花、枝、草、石など）を付け加えることが必要になってくると考え、その時と同じ素材を、試みに1クラスに準備しました。

Ⅳ 結果

カテゴリーを用いての量的結果は表2～6で示しています。そのうち、特徴的なことを列挙します。

1) 日本の子ども全般の特徴

*【対人】：【環境】=1.80:1.12（保育園）、1.50:1.04（小学1年生）、1.41:1.27（小学3年生）です。どの群も、【対人】カテゴリーが【環境】カテゴリーよりもわずかに多く出現しています。

*保育園、小学1年生、小学3年生の3群に共通しているのは、「動物」の出現率が際立って高いことであり、3群すべてで90%以上の子どもが「動物」を用いました。

*切り方・貼り方などの様式カテゴリーについては、3群共に50%以上の子どもたちが「くりぬき」を行っています。

*全く切れない「べた貼り」はいませんでした。

2) 発達年齢による違い

*【後退】カテゴリーについて、0.44（保育園）、0.19（小学1年生）、0.08（小学3年生）であり、年齢が上がるにつれて後退カテゴリーは少なくなっています。空白部分が大きく、自然素材の紅葉を貼った保育園児のコラージュを提示します（図2）。

*台紙からコラージュがはみだす「はみだし」表現は、



図1



図2

保育園児に多く、保育園児では56%、小学1年生は29%、小学3年生は32%の子どもがはみだしています。

3) 性差の見られたカテゴリー

＊「恐竜」の出現は子ども184名中、男子55名/110名、女子3名/74名であり、男子の方が出現率が高く、この差は有意な値を示しました。 $(\chi^2=43.265, p<.001)$

＊「子ども」の出現は184名中、男子は5% (5名/110名)、女子13.5% (10名/74名)であり、女子の方が出現率が高く、この差は有意な値を示しました。 $(\chi^2=4.752, p<.05)$

＊「友好」の出現は184名中、男子は2% (2名/110名)、女子は14.9% (11名/74名)であり、女子の方が出現率が高く、この差は有意な値を示しました。 $(\chi^2=11.468, p<.001)$

V 考察

1) 子どもはなぜ「子ども」ではなく「動物」を選ぶのでしょうか？

コラージュ制作をするために、さまざまな絵や写真が用意されています。その中から、子どもはなぜ子ども自身である「子ども」の写真をあまり選ばず、「動物」を選ぶのでしょうか。実際、素材「子ども」は1割前後の制作者（子ども）が選ぶのに対して、素材「動物」は9割以上の制作者（子ども）が選んでいます。その理由のひとつとして、4,5歳から8歳までの子どもは、自己の対象化がまだなされていないということが考えられます。つまり、選ばれる対象としての「子ども」がまだ心の中に定着していないのです。自分というのはこういうものだという自己概念がまだできていないのかもしれませんが。一方、「動物」は、「可愛いペット」、あるいは「大きなゾウさん」や「真っ白でふわふわのうさぎ」というように、対象化されています。ここで言う対象とは「衝動が目標とするもの」「心が向かう他者」という、フロイトの定義を当てはめて考えています。したがって、一般的には対象は他者ですが、制作者である子どもたちは同時に、自分の感情を「動物」に投影しています。「大きな母親ペンギンに抱かれる子どもペンギン」（図3）は、母親に守って欲しいという保護欲求かもしれませんが。「ぴよんぴよんうさちゃん」と切り取った「ウサギ」を動かして遊びながら貼られた「戯れるウサギ」（図4）は、兄弟や友達と遊ぶ自分の姿かもしれません。

このように、他者でありながら、まるで自分であるかのような体験をしてしまう対象を、コフート（1966）は自己対象と呼び、成熟した自己愛を築いていくための過



図3 小学1年生男子 無題



図4 小学3年生女子「動物がいっぱい」

渡り現象として必要なことを示しました。（自体愛から自己愛へ、そして対象愛へという道筋を自己愛の発達としたフロイトに対して、コフートはフロイト路線を認めつつ、もう1本のルートである未熟な自己愛から成熟した自己愛も欠くことのできない愛のルートだと主張しました。）コラージュ制作をした子どもたちは、素材「動物」に自己対象を見出したのかもしれませんが。ここに、健全な自己愛を育んでいる子どもたちの姿が見えます。また、自己対象は遊びや創造性の原点である移行対象とも類似の概念です。健全な自己愛が保証されているからこそ、遊び、創造性を発揮できると思われます。

2) 男子はなぜ「恐竜」を好むのか？

「恐竜」出現率は男子に有意に高く、実際、小学1年生の女子4名（34名中）を除いて、保育園でも小学3年生でも女子は全く「恐竜」を選ばませんでした。男子にこうも「恐竜」が人気なのは何故でしょうか。集団でコラージュ制作をしているため、他の子の影響があったことも考えられます。実際、ある男子は「恐竜」を見つけると、「わあ、すごい！」と他の子にも注意を促しました。貼ることを勧める男子すらいました。このよう



図5 小学3年生男子「えさをとる恐竜」

に、集団でのコラージュ制作には個人の意図という私的な理由とともに、周囲の影響という公的な理由が伴います。とりわけ、サリバンのいうチャムシップ⁽¹⁾がとても重要な意味を占める小学生にとって、他の男子の誘いはなかなか無視しがたい行動動機となります。しかし、それにしても、貼るか貼らないかの最終決断は本人ですから、本人自身の内的理由もあるはずです。そこで、男子に「恐竜ってどんな感じ？」と恐竜イメージを尋ねました。「大きい！」「強い！」「かっこいい！」など、口々に出てきます。しかし、「大きい」のは「ゾウ」も大きいですし、「強い」のは「ライオン」も強いですし、「かっこいい」のは「おとうさん」や「ロボット」も「かっこいい」かもしれません。それにもかかわらず、「恐竜」を選んだのは、野獣や父親を超えたパワーを「恐竜」(図5)に見たからかもしれません。とりわけ、「ロボット」のような、近未来を制するかもしれない物を選ばず、原始的な「恐竜」を選んでいるのは、魔術的な力は太古にありという直観が男子にはたらいっていたのかもしれない。あるいは、万能感的な自己感覚を得るためには、メカニク的な物でなく大地に根ざした、それでいて現実を超えた物が必要なのかもしれません。いずれにしても、強いものを取り入れ、強いものに同一視したい男子の心が反映しています。

一方女子は、「仲良くしている人たち」や、「子ども(または動物)の世話をしている人」などの〔友好〕カテゴリーと、〔子ども〕の出現が高く、快い対人関係や養育関係等を取り入れている様子が窺え、ジェンダー形成が既にこの年齢で始まっていることが推測されます。

3) 発達のな問題

保育園児の3歳～5,6歳児は、ピアジェの発達段階でいえば、感覚運動期は過ぎて前操作期に入るところであり、小学1年生の6歳も前操作期の段階です。それに対



図6 小学3年生男子 無題

して小学3年生の8～9歳児は、具体的操作期に入っています。この違いが、コラージュ表現にも表れています。つまり、内容カテゴリーの中では、「風景」の出現率が年齢と共に高くなっていきます。この「風景」(図6)は、目の前にある「物体」「食物」「動物」などとは異なり、空、海、山、町などのいずれかが含まれる景色です。この景色を見る時、対象との距離が少し遠くなります。つまり、客観化、対象化しようとする動きが出てきているのです。また、切り方や貼り方などの様式カテゴリーから見ると、「創出」が年齢と共に増えています。この「創出」は、与えられた絵や写真をそのまま用いるのではなく、切り絵を作ることを指します。ここでは、自分なりの工夫が必要であり、まさに、積極的な創造力が高まっているのです。

小学生は、フロイトのリビドー発達段階で言えば潜伏期であり、学校という社会に出ることにより、子どもは社会化されていきます。元来内向的だった子どもも、学校場面で友達と関わることから外向機能を働かさざるをえなくなりますし、自分の欲求を抑圧して、他者と折り合いをつけるということも身につけていきます。これらの現実妥協的な姿勢はコラージュ表現にも現れ、画面を空白のまま残してしまう割合が少なくなります。自己を統制しながら、生産性につながるような創造的な遊びに発展しているようです。

VI おわりに

保育園児、小学1年生、小学3年生が制作したコラージュ表現から、子どもたちの創造性を検討しました。3歳児の2名はそばにいた保育士に切るのを手伝ってもらいましたが、その他の子どもたちは自分でハサミで切り、のりで貼りました。道具を用いることの巧拙はあるもの

の、子どもたちは自分自身の内的イメージを外在化しようとする意志や意欲が強いことが、観察されました。そして、知的側面については、全体を見渡せる範囲や対象

表2 内容下位カテゴリーの出現頻度および出現率

	保育園 (n=25)		1年 (n=84)		3年 (n=75)	
	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %
友好	0.12 (0.32)	12	0.05 (0.21)	4.8	0.08 (0.27)	8
子ども	0.16 (0.37)	16	0.07 (0.26)	7.1	0.07 (0.25)	6.67
対 存在	0.28 (0.45)	28	0.29 (0.45)	28.6	0.15 (0.35)	14.67
人 主張	0.32 (0.47)	32	0.17 (0.37)	16.7	0.15 (0.35)	14.67
情動	0.00 (0.47)	0	0.01 (0.11)	1.2	0.04 (0.20)	4
動物	0.92 (0.27)	92	0.91 (0.28)	91.7	0.93 (0.25)	93.33
敵意	0.04 (0.20)	4	0.00 (0.00)	0	0.01 (0.00)	1.33
環 食物	0.36 (0.48)	36	0.37 (0.49)	37.0	0.45 (0.50)	45.3
境 物体	0.60 (0.49)	60	0.57 (0.50)	57.1	0.58 (0.49)	58.67
風景	0.12 (0.32)	12	0.10 (0.30)	9.5	0.23 (0.42)	22.67
抽象	0.00 (0.00)	0	0.01 (0.11)	1.2	0.00 (0.00)	0

表3 様式下位カテゴリー

	保育園 (n=25)		1年 (n=84)		3年 (n=75)	
	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %
切片 30	0.00 (0.00)	0	0.04 (0.19)	3.6	0.05 (0.22)	5.33
重ね貼り	0.60 (0.50)	60	0.58 (0.50)	58.3	0.49 (0.50)	48
くりぬき	0.56 (0.51)	48	0.67 (0.47)	66.7	0.55 (0.50)	56
創出	0.00 (0.00)	0	0.02 (0.15)	2.4	0.01 (0.11)	6.67
べた貼り	0.00 (0.00)	0	0.00 (0.00)	0	0.01 (0.11)	1.33
分割	0.06 (0.24)	4	0.06 (0.24)	6	0.04 (0.20)	4
はみ出し	0.50 (0.51)	56	0.29 (0.46)	28.6	0.32 (0.47)	32
文字挿入	0.17 (0.38)	32	0.46 (0.50)	46.4	0.64 (0.48)	64
余白大	0.39 (0.50)	44	0.19 (0.40)	19	0.07 (0.25)	6.67
矩形	0.00 (0.00)	0	0.02 (0.15)	2.4	0.01 (0.11)	1.33

の客体化・距離化などは年齢に依存していましたが、人（生き物）や物への関心は年齢にかかわらず持っているようでした。ただし、人間そのものをコラージュ作品の内容として選ぶ子どもは少なく、多くの子どもが動物に親和性を見出しています。コラージュ制作の中で、動物を自己対象として用いて遊べたことは、子どもの持つ限りの適応性、可能性を示しています。また、ジェンダーを意識した内容が選ばれており、アート活動という創造的行為にも社会化の影響があることが示唆されました。

表4 内容カテゴリー

	保育園 (n=25)		1年 (n=84)		3年 (n=75)	
	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %
対人	1.80 (1.16)	0:0	1.50 (1.02)	0:4.8	1.41 (0.91)	0:2.7
		1:56.0		1:66.7		1:72.0
		2:24.0		2:9.5		2:16.0
		3:8.0		3:13.1		3:2.7
		4:8.0		4:4.8		4:5.3
		5:4.0		5:1.2		5:1.3
環境	1.12 (0.93)	6:0	1.04 (0.92)	6:0	1.27 (0.86)	6:0
		0:32.0		0:35.7		0:20
		1:28.0		1:29.8		1:38.7
		2:36		2:29.8		2:34.7
		3:4.0		3:4.8		3:6.7
		4:0		4:0		4:0
		5:0		5:0		5:0

表5 様式カテゴリー

	保育園 (n=25)		1年 (n=84)		3年 (n=75)	
	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %	平均 (SD)	出現率 %
表出	1.80 (0.70)	0:20.0	1.30 (0.69)	0:10.7	1.16 (0.85)	0:24.0
		1:52.0		1:51.2		1:41.3
		2:28.0		2:35.7		2:29.3
		3:0		3:2.4		3:5.3
		4:0		4:0		4:0
葛藤	1.12 (0.80)	0:40.0	0.79 (0.76)	0:40.5	0.99 (0.68)	0:22.7
		1:36.0		1:41.7		1:57.3
		2:24.0		2:16.7		2:18.7
		3:0		3:1.2		3:1.30
		4:0		4:0		4:0
後退	1.12 (0.50)	0:56.0	0.19 (0.40)	0:81.0	0.08 (0.27)	0:92.0
		1:44.0		1:19.0		1:8.0
		2:0		2:0		2:0

表6 切片数と余白率

	保育園 (n=25)		1年 (n=84)		3年 (n=75)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
切片数	10.56	5.53	14.62	6.82	14.79	7.72
余白率	41.40	24.52	20.64	20.64	27.27	17.50

注

(1) 思春期までの同年齢で同性の友達関係。

文献

Carle, E. (1976) : The very hungry caterpillar. New York : The World Publishing Co. もりひさし訳 (1976) : はらぺこあおむし 偕成社
 藤岡喜愛 (1966) 狩猟採集民ワティンディガのパーソナリティ——パーソナリティの進化序論 人文学報 京都大学人文科学研究所紀要第 23 号 p 1-66.
 金井美恵子 (2005) : 切りぬき美術館—スクラップ・ギャラリー— 平凡社
 Kohut, H. (1966) : Forms and transformations of narcissism. The search for the self. Vol 1. 伊藤監訳 (1987) : 自己愛の形態と

変容 コフト入門 岩崎学術出版社
 くまがいマキ (2001) : シュヴァングマイエルの博物館 : 触覚芸術・オブジェ・コラージュ集 国書刊行会
 森谷寛之 (1988) : 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 精神神経誌, 90 巻 5 号, 450.
 森谷寛之 (1990) : 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用—砂遊び・箱庭・コラージュ 日本芸術療法学会誌, 21 巻 1 号, 27-37.
 せなけいこ (1969) : いやだいやだ 福音館書店
 Stevenson C. (1998) : The art of handmade paper and collage. Bothell : Martingale & Company.
 山上榮子 (2010) : コラージュ解釈仮説の試み (その 1) —スコアリング・カテゴリーの提案 コラージュ療法学研究 第 1 巻第 1 号 3-16

アボリジニの子どもの適応にかかわる 調査報告（2010 年度）

窪 田 幸 子

（神戸大学大学院国際文化学研究科）

1 はじめに

本年度は研究の第 1 年度に当たり、まず研究の方向性を決めることに焦点を絞った。本稿では予備的な文献調査とこれまでの研究にもとづき、オーストラリアの先住民、アボリジニの子どもたちの現在についての調査研究を行なおうとするに先立ち、アボリジニと子どもたちのおかれている状況について、簡単な歴史的経緯を含めて整理しておくこととしたい。そのうえで、最後に、今後の研究計画を述べることにしたい。

オーストラリア・アボリジニは、1788 年にはじまる入植によって大きくその生活を変えてきた。約 5 万年前とされるオーストラリア大陸への移動以来、大陸全体に広がって狩猟採集生活を送ってきた彼らは、イギリスからの入植が進むにつれ、入植者に土地を奪われ、生活の基盤を失い、植民地に依存する生活を余儀なくされた。混血もすすみ、暴力と病気によってアボリジニは人口を大きく減らした（Broome 1982）。入植開始時には 600 部族に分かれた 30 万人と推定される人口は、1900 年ごろまでに 6 万人にまで減少している（小山 1988）。暴力的な入植が長く続いたわけだが、20 世紀になるころから次第に、彼らの保護が図られるようになった。1960 年代になってようやく、彼らの権利回復が考慮されるようになっていった。1957 年に国民投票が行なわれ、他の国民と同じ扱いを受けることが決められた。それ以降継続して、彼らの生活を改善するための様々な政策がとられるようになってきている。

現在オーストラリア・アボリジニは、52 万人の人口があり、オーストラリア人口全体の 2.5 パーセントを占める。アボリジニの現状は多様である。その約 8 割は、urban Aboriginies とよばれ、都市または都市的な環境に暮らしている。彼らの多くは、混血し、伝統的な生活の知識や言語を失い、都市的な環境の中で、主流社会の人々と変わらない生活を送るようになってきている。その一方で、北部や中央砂漠などの、いわゆる辺境には、暮らす

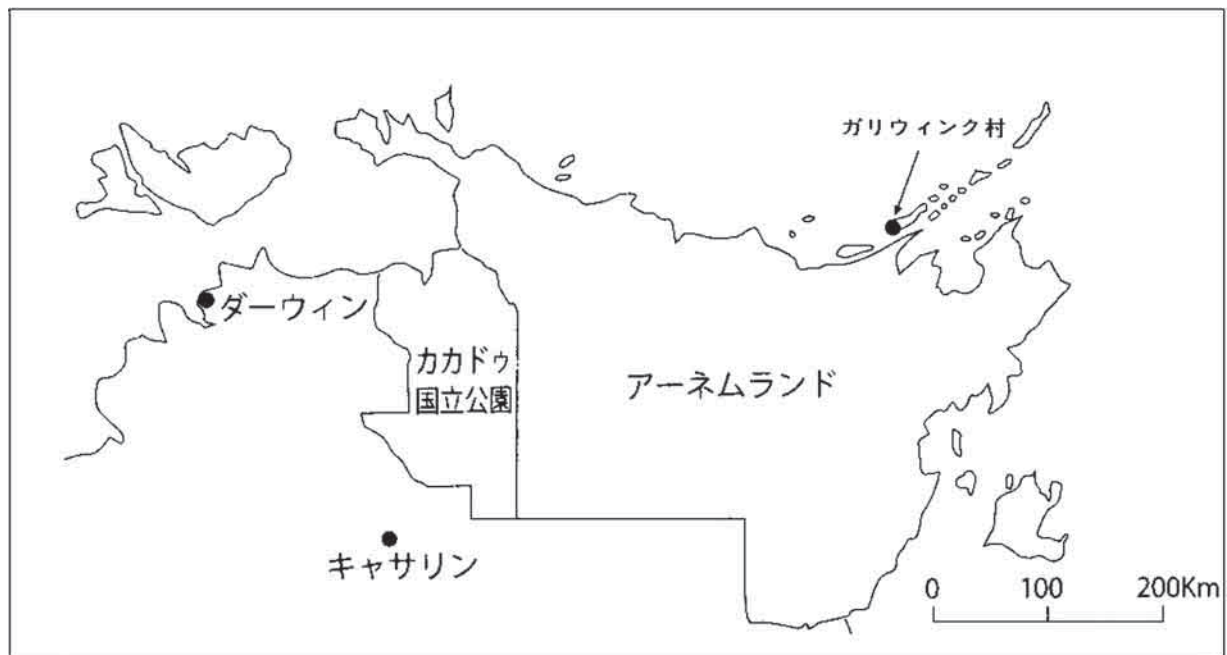
remote Aboriginies もいる（<http://www.abs.gov.au/>）。彼らは、言語、神話、儀礼、そして狩猟採集など、相対的に「伝統的」な生活用式を維持している。

筆者が 1986 年から調査を行っているのは、辺境にあたる大陸北部のアーネムランド（Arnhem Land）とよばれる地域である。熱帯であるこの地域への入植は遅れ、20 世紀に入ってから本格的に始まった。1900 年代まで、この地域では、季節的な移動を伴う狩猟採集の生活が営まれていた。このころになると、南部のアボリジニ社会は植民地の社会問題となっていた。文化の崩壊した南部のアボリジニは救いようがないが、北部のまだ手つかずの「伝統的な」アボリジニを救おうとする動きが始まったのである（Harris 1990）。

調査地は、アーネムランドの北東海岸部に位置するヨルング（Yolung）とよばれる人々の地域である（次頁地図）。伝道師たちは、家族とともにヨルングの地域にやってきて、村を作り、それまで季節的な移動をする狩猟採集生活をしていた人々を定住させていった。村には、教会、病院、食堂、学校などが作られるとともに、自立自営を目指して、プランテーションや漁業会社、製材所なども導入していった（McKenzie 1980）。こうした村で、ヨルングの人びとは伝道師たちの指導と教育をうけて、定住生活に移行した。

1960 年代に、アボリジニをとりまく状況は大きく変化する。土地権の訴え、選挙権や市民権獲得の運動など、権利回復運動が都市を中心に展開されるようになった。すでに述べたようにこのような流れの中で、1967 年には国民投票によって、他の国民と同等の扱いが法律的に決定された（Broome 1982）。このことによって、遠隔地のアボリジニの生活も大きく変化した。それまでは、アボリジニは二級市民であり、伝道師たちが保護官として、アボリジニの生活全般に責任を持っていた。それがこの変化によって、アボリジニ自身が市民として自分たちの村の運営を行なっていくことになったのである（Broome ibid.）。

調査地の村には、基本的な都市的インフラはほとんど



すべて整っている。町役場、学校、病院、商店、建築会社、自動車整備工場などがあり、上下水道、電気、テレビ、電話、インターネットなども使えるようになってい

る。人々は近代的な設備の整った家に暮らし、4WDの車に乗り、散弾銃を使って狩りを行う。モーターボートを使っ

ての漁もおこなう。都会とは小型軽飛行機で連絡されている。彼らは、このような村の施設で働き、給与を得るか、社会福祉の補助金を受け取っている。このように彼らは、貨幣経済のもと近代的な設備を利用しつつ、伝統的要素も重視する生活を行っているのである。

2 ヨルング社会

調査地のヨルング社会ではこのように、1940年代から大きな変化が続いてきたといつてよい。特に、1970年代以降は、多く工業製品と現金経済が彼らの生活に大きな影響を与えるようになってきている。ミッションの時代から、子どもたちは学校教育を受けるようになり、オーストラリア社会で暮らしていくために、必要な知識を得るようになった。近年になって高校教育まで村で受けられるようになり、学校の設備も充実してきた。そして、子どもたちの世界にもテレビやコンピューター、携帯電話など文明の機器が大量に入り込むようになった。しかし、その一方で、子どもを取り巻く世界には、昔からの連続性もみられる。以下、彼らの生活を見ていくことにしよう。

1) 親族組織の王国

アボリジニ社会は、人類学の世界で非常に有名である。人類学にとって婚姻規則や出自のルールは基本的な調査項目で、長い間大きな関心が払われてきた。アボリジニの場合、もともと600あった部族がそれぞれに多様な親族の規則を持っていたといわれ、「親族組織の王国」と呼ばれていたのである。レヴィ＝ストロースは、アボリジニのデータを用いて、有名な『親族の基本構造』を著した。そのなかで、ヨルング社会の親族組織は「ムルンギン」として、中でももっとも複雑な婚姻規則を持つ部族として取り上げられている（レヴィ＝ストロース 2001）。

ヨルングが親族を中心とし、密接な親族関係によって人々がつながった日常を生活していることには変わりはない。ヨルングの親族組織は、すべての人を類別的親族として、親族に取り込む。つまり、彼らは、血族と姻族が入り組んだ親族の網の目のなかで暮らしている。婚姻は、男性からみて、母方祖母の男兄弟の娘の娘にあたる女性と結ばれることを優先する、いわゆる母方第二交叉イトコ婚である。この婚姻規則にのっとり、特定の父系出自集団（クラン）間での一般交換が理想形である。ヨルングは妻の数が多い一夫多妻婚をすることで有名だったが、現在は妻の数は減ってきているが、母と呼べる人、父と呼べる人が多数いることにはかわりはない。

子どもたちは自分の本当の母親だけでなく、母の姉妹、母の母とその姉妹など、多数の女性たちにかこまれて育つ。父とその兄弟、父の姉妹、母の兄弟も重要な親族であり、子どもたちの成長に重要な役割を果たす。このような拡大的な親族が子どもたちをつねにみまもるの

である。

2) 狩猟採集の生活

彼らは、現在では四輪駆動のトラックにのり、ライフルを使って狩猟を行なう。モーターボートで海に出て、ウミガメを槍でとらえ、網や釣り糸をつかって魚をとる。女性たちは、鉄のハンマーや鉄棒を使って、貝やカメ、卵などをとる。狩猟採集では、男性は男性たちで出かけ、女性は女性同士で出かけることが多い。彼らの現在の食生活の大部分は、スーパーマーケットで購入する食料によっているが、それでも野生の食料は、何よりも歓迎される。特に週末は、多くの人が狩猟に出かけるのである。狩猟採集は、彼らの非常に細かで、豊かな地域についての自然の知識に基づいている。ヨルングは、貨幣経済の恩恵をうけつつも、慣習的なこれまでの経済も維持し続けているといえる。

幼い子どもたちは、母親や女性たちに伴われて、一緒に採集に出かける。浜辺やブッシュは子どもにとって大変に楽しい遊び場であることがひとつの理由であるが、もうひとつは、採集されたものは多くの場合、その場でそのまま消費されることを子どもたちもよく知っているからである。一緒に行くことによって、彼らが大好きな、カキなどの貝類や蜂蜜、卵などを十分に食べることができる。子どもたち自身もまた、女性たちの採集を側で見ると、野生食料の獲得方法を習得していく。ブッシュを歩いていると、子どもたちはしばしば姿を消し、しばらくたって走って追いついてくる。そんな時、彼らは必ずといっていいほど、木の実などの季節の食糧を手に入れている。貝を採りに行っても、女性たちのそばでねだるだけではなく、自分たちで石を調達し、貝を割り、食べる。狩猟採集は、子どもたちにとって楽しい遊びの時間であり、食糧をえる時間であり、自然についての知識を得る時間でもあることがわかる。

3) 儀礼と神話

彼らの社会生活の基礎は父系出自集団、クランである。それぞれのクランは、神話を共有し、儀礼で踊り、絵画に描く。精霊の痕跡がクランの聖地であり、その周りがクランの土地になる。クランは方言単位でもあり、神話の単位であり、そして同じクラン同士は婚姻を結ぶことができない外婚単位でもある。儀礼は、彼らの社会の中心的な知識であり、基本的に男性の知識であるとされる。女性は儀礼にかかわるが中心的な役割は果たさない。

子どもたちは、幼いころから儀礼に参加する。子どもたちの自発的な踊りへの参加は歓迎される。しかし、強

制されることはない。男子は、成人儀礼をおえると儀礼への参加はより積極的になる。そして、自己のクランの神話と儀礼の内容を学び、身に着けてゆくことになる。男子は、こうして儀礼にかかわることが増えるにつれ、母親や女性のもとから離れ、自己の出身クランの男性たちとの関係が増加し、クランの男性としての責任と役割を身に着けてゆくことになる。

3 ヨルングの子どもたち

1) 乳幼児からこどもへ

1980年代の初めに、ハミルトンは、子育てについて中央アーネムランドで徹底的な調査を行っている(Hamilton 1983)。その本での子どもとのかかわり方は多くの場合、ヨルングと共通していた。以下、彼女の研究に言及しつつ、ヨルングの子どもたちの現在を整理してみよう。

新生児の間、子どもは母親と密接な関係にある。少し子どもが大きくなると、母親だけではなく、家族のメンバーが、赤ん坊に関心をもち、赤ん坊は、すべての人々の愛情のもとに育つ。実際のところ、赤ん坊が一人で寝かされている場面に出会うことはめったになく、常に誰かが抱いていたり、そばであやしていたりする。赤ん坊は常に人々の中心にあり、荒っぽい扱いではあるが、愛情をこめて抱きしめられたり、キスされたりし続ける。ヨルングの密接な親族関係のもと、拡大家族の大人と年長の子どもたちに囲まれて、子どもは成長してゆく。

子どもは、泣けば常に母乳が与えられる。時間を決めて、決まった量をのませるというようなことはなく、離乳食も子どもの要求に従って、大人がたべているものをかみ碎いて与える。離乳を急がされることもなく、トイレや、就寝についても特に大人がこだわって教育するような場面は、皆無といってよい。子どもは常に抱かれ、泣けば誰かが慰める。少し大きくなってからも、子どもは徹底的に甘やかされる。ぐずれば、ほとんどのことはかなえられ、叱っても泣けばすぐに抱きしめられる。そのような圧倒的な「あまやかし」のもとに子どもは育ってゆく。その結果、子どもは非常に我儘に育つ。

2) 年齢集団

このように我儘で、自己中心的になる子どもたちの、いわゆる「しつけ」はどこで行われるのだろうか。ヨルング社会では、子どもたちの遊び集団である年齢集団の役割が大きい。このこともまたハミルトンによっても指摘されている。子どもたちは、動けるようになるとすぐに、5〜7歳ぐらいの幅の年齢集団のメンバーになって

ゆく。年長のお兄さん、お姉さんたちとの遊びグループであるが、彼らは一族のなかにあり、そのほとんどが兄弟姉妹であり、従妹である。ある一定の年齢までは、男女複合の集団で子どもたちは遊びながら、多様なことを学んでいく。子どもたちの活動範囲は、年齢集団に入ること次第に広がり、母や女性親族たちの範疇から、子どもたちだけの活動へと年齢とともに離れてゆく。

衣食や様々な行動、トイレ、睡眠など、非常に基礎的な行動はこの集団の中で身に着けてゆく。それはあくまでも、年長の子どもたちを「真似する」ことによって身に着けてゆく。年齢集団の関係は、一生続く。特に同性のグループは形をかえつつ、そのつながりは密接なものである。

3) 成人儀礼と結婚

アボリジニの子どもたちの子ども期は短いものであったといえる。男子は、大体10歳から13歳ぐらいで、最初の成人儀礼をうけ「大人」となり、その後少なくとも数年のうちに、若者グループに完全にはいることになり、女性たちとの生活から離れていった。女子の場合は、結婚生活が12,13歳で始まるのが普通であった。生まれたときに既に決まっている婚姻規則にのっとり、ふつうはずっと年上の相手との結婚である。したがって、アボリジニの子ども期は男女とも、12,13歳で終わるものであったといえる。

男子の場合、この儀礼が教育の場として大きな役割を占めていた。そこでは、クランのメンバーとして必要な役割と知識の習得が必要になり、それまでのような「子ども」としての行動は許されなくなり、責任も増える。

女子の場合、結婚式のないこの地では、結婚は婚約者の家に移動することで示された。よく見知っている相手と家族とはいえ、そこからは、子どもではなく妻となっていくなくてはならない。それに伴う責任と仕事が義理の母や家族から伝えられることになった。

現在では、特に女子は婚姻の時期が遅くなり、必ずしも子ども期が早く終わるとは言えない。また、男子も学校教育によって儀礼の役割が縮小してきているようにも見える。しかし、現在も行われる成人儀礼によってアボリジニの男子の立場は大きく変わることは間違いない。彼らは、クランの中での役割を得、儀礼の踊りや楽器、絵画などに積極的に参加するようになってゆく。この過程で彼らは大人になってゆく。その一方で、儀礼に積極的にかかわるほど、学校教育から離れるという問題がある。調査地の場合、高等教育に進む割合は女子が圧倒的に高いことにも、このような社会的事情が影響を与えている。

4) アボリジニの子育てとその意味

アボリジニの子どもたちは、生まれてからしばらくの間に、徹底的に甘やかされる。それによって、先にも述べたように、手の付けられない我儘な子どもになるのだが、それは同時に、自分は徹底的に受け入れられているという安心感をもつことにつながっているといえるだろう。

その安心感に基づいて、子どもたちは、大声で、泣き声をはりあげ、我儘をいう。それは、決してとがめられることなく、奨励されているとさえいえる。我儘というのは、ある意味での「自己主張」である。ヨルング社会は、自分が何を求めている、何を求めているのかをはっきり表明することが求められる社会である。子どもの時から自分の必要を知り、それを外に対してはっきりと述べるのが、奨励されているといえるだろう。

その後、我儘は、子どもたち同士の年齢集団とその後の儀礼の中で、ある程度自然に調整される。集団の中では、「年長者を真似する」という行動が、繰り返される。そのことによって、彼らの我儘さは緩和され、同時に、必要な基本的行動も身に着けることになってゆく。そこでの学びは、決してそこから「教える」「指示する」形での教育ではなく、子どもたち自らが「他者の行動を見て覚える」つまり、「見習う」という形の主体的な学びである。そして、成人儀礼を終えて儀礼にはいり、クランの男性としての行動が教育されてゆくことになる。

このような圧倒的な安心感を与え、自己主張と主体的な学びを積極的に促すような子どもの育て方は、彼らの子ども期が非常に短かったことにも理由があると思われる。ヨルングの伝統的な生活では、前述したように男女とも大体 10 歳から 13 歳ぐらいのころに、子ども期が終わる。そして、そこからは大人の責任を少しずつ担わされることになってゆく。儀礼集団や日常生活の中でもまた、子どもたちは、若い大人として、他者を見習いながら主体的に必要なことを身に着けてゆくのである。

1940 年代からヨルング地域では、キリスト教伝道団によって教育がはじめられた。そして、1967 年に彼らの扱いが平等に向かうようになってからは特に、主流社会と同様に、北部準州の教育制度のもとで教育が行われるようになってきた。村の学校は年々設備の充実がはかられ、現在では体育館も備え、高等教育までが村で受けられるようになった。しかし、学校教育へのアボリジニの適応は芳しくなく、出席率の低さ、途中退学の多さは、1970 年代から継続してアボリジニの大きな社会問題となっている。二言語教育が長く行われてきたが、そのことは彼らの教育レベルの伸長にはつながっていない。その一方で彼らの文化が失われてしまうのではない

かという危惧は常にある。

多くの難しい問題を抱える彼らであるが、日常生活の中の子どもたちを見ていると、学びの形は健在であることがわかる。狩猟採集に出かけた時の子ども同士での遊びは、顕著にそのことを示している。こうした見習う形での学びは、儀礼での踊り、絵画などにもみられるものである。今後多方面で、子どもたちの行動を考えていきたい。

4 今後の調査に向けて

このような状況にあるアボリジニの子どもたちの適応について、ガリウィンクを中心に、共同調査者の Musharbash 氏の調査地である中央砂漠の状況との比較も視野に入れながら調査を行う予定である。今年度は、中央砂漠を予備的に訪れ、研究計画の相談を行った。Musharbash 氏が長年調査を行ってきている、中央砂漠のアボリジニのコミュニティは、基本的にはアーネムランドと似通った状況にある（Musharbash 2008）。しかし、その経験してきた歴史的経緯は大きく異なり、現在の状況もその結果として異なる。もっとも異なると思われるのは、白人との関係性のあり方である。中央砂漠地域では、北部よりも早く、牧場などが作られ、アボリジニはそこでの労働を経験した。開拓期のキリスト教ミッションの影響も少なく、Musharbash 氏が調査するイエンデムというコミュニティも、政府によってアボリジニを半ば強制的に定住させる目的で建設された。コミュニティには、異なる部族が複数混住し、その部族間での争いも多い。アルコールの問題は、アーネムランドよりもより顕著で、深刻にみえる。2008 年からは、緊急措置とよばれる特別措置がアボリジニのコミュニティにとられるようになっていたが、その影響も中央砂漠に大きいように思われる。そしてもちろん、自然生態環境は、中央砂漠が圧倒的に厳しい。

このような歴史的にも社会的にも大きく異なる二つの地域を取り上げ、それぞれにおけるアボリジニの子どもの社会的インターアクションを調査する予定をしている。具体的には、学校、幼稚園、ディケアなどの施設で、アボリジニの教員、子ども、白人の子どもの間での関係性のあり方を、観察によって記録する。コミュニティに定住して以降、作られた組織的な環境で、アボリジニの子どもがどのように他者とかわり、その在り方は白人の子どもとどのように異なるのかを観察、記録することができると思われる。それと同時に並行する形で、アボリジニの家庭、親族関係内での活動、子ども間、対大人間での行動、対応などを観察記録する。本論で述べ

てきたような大人との関係のあり方や変化がみられるであろうし、子ども同士の年齢集団の活動の中で、どのような適応があるのかをより組織的に観察する予定である。そして、このような家庭と学校などの組織的な環境での行動を比較して考察する。また、将来的には、Musharbash 氏と窪田は互いの調査地を訪問し、調査を行い、それぞれの知見を共有し、地域的環境的差異についても、考察を行い、見解を得たいと考えている。

引用文献

Broome, R. 1982 *Aboriginal Australians – Black Response to White Dominance 1788–1980*. George Allen & Unwin, Sydney, NSW.
Hamilton, A. 1981 *Nature and Nurture – Aboriginal Child-Rearing in North-Central Arnhem Land*. Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra.

Harris, J 1990 *One Blood – 200 Years of Aboriginal Encounter with Christianity: A Story of Hope*. An Albatross Book, Sutherland, NSW.

McKenzie, M. 1976 *Mission to Arnhem Land*. Rigby, Adelaide.

Musharbash, Y. 2008 *Yeundumu Everyday – Contemporary Life in Remote Aboriginal Australia*. Aboriginal Studies Press, Canberra, ACT.

レヴィ=ストロース, C.

2001『親族の基本構造』福井和美訳, 青弓社。

窪田幸子

2005『アボリジニ社会のジェンダー人類学 先住民・女性・社会変化』世界思想社。

付記 本論は、科学研究費補助金（新学術領域）「領域略称名：交替劇」（領域番号：2101）の研究成果である。

セントラル・カラハリ・サンの 日中活動と子どもの遊び

今 村 薫

(名古屋学院大学経済学部)

はじめに

狩猟採集民の子どもは、よく遊ぶ。私が1988年より調査をおこなっているサンの子どもたちは朝目覚めてから眠りに就くまで一日中、かなり気ままに子どもたちだけで遊んでいる印象がある。近隣の農牧民であるカラハリやツワナの子どもが、水汲み、家事、放牧などを手伝うことを期待され、頻繁に大人に呼びつけられて仕事をさせられているのとは大違いである。

しかし、大人たちから放任されているかのように見えるサンの子どもたちも、女の子は10歳を過ぎるころから、男の子も15歳前後には、大人に交じって採集や狩猟に出かけるようになる。彼ら彼女らは、いつの間にか生きていくために必要な技術を習得しているのである。

大人が子どもに積極的に教えている場面はほとんど見かけられない。子どもは大人のしていることを「見て」覚えるのだろう。そして、覚えた技術を、子どもだけの遊びの中で、完成させていくのではないだろうか。いわば、「遊び」という広い原野の中に、「技術の習得」が埋め込まれているようなものなのである。

この報告書では、狩猟採集民セントラル・カラハリ・サンの社会における子どもの学習の実態を描き出すことを目的に、子どもたちが行う手伝いや遊びを、できるだけ多くの具体例を挙げて説明する。そして、まず、彼らの遊びの特徴を提示する。次に、彼らが遊びながら、どのようにして技術的なことも身につけていくのか、その学習課程について考察する。

また、これらの子どもの行動を検討する前に、大人と子どもの日常活動がどのように相互に関係するのかを明らかにするため、大人の日中活動の内容と、それぞれに費やす時間の分析結果を示したい。

1. 調査地の概要と方法

1-1 調査地の概要

南部アフリカ、ボツワナ共和国、ハンシー県のカデ集落において調査をおこなった。カデには、グイとガナの2つの言語集団のサンが住んでいた。グイ語とガナ語は方言程度の違いしかなく、お互いの言葉を理解できる。したがって、グイとガナの両方を合わせて、セントラル・カラハリ・サンという一まとまりの言語グループに分けられる。

彼らは、1970年代まで、カラハリ砂漠を遊動しながら伝統的な狩猟採集生活を送っていたが、1979年に政府によってカデに井戸が設置されると井戸のまわりに定住するようになった。

カデには、井戸だけでなく、学校、診療所、法廷（集会所）などが次々と建設され、人口が800人を超える定住村になっていった。カデには、グイとガナといった狩猟採集民だけでなく、農牧民であるカラハリも住んでいた。

私が集中的に調査をおこなった1990年代は、グイとガナは政府から配給されたトウモロコシ粉を主食としつつも、狩猟と採集も盛んにおこない、伝統的な生活様式をよく残していた。

居住形態も、移動生活を送っていたころの形式をそのまま残しており、10世帯ほどが集まって一つの「キャンプ」を形成する。一つの世帯（一組の夫婦と未婚の子どもたちからなる）が一軒の小屋を建て、その小屋が丸く円を描いて建てられていた。定住したといってもキャンプ地は数年に一回移動し、また、キャンプのメンバーは頻繁に入れ替わった。（調査地のサンの生活全般については、今村（2010）を参照されたい）

1-2 日中活動の記録

日中活動の量的データを1990年7月から1991年2月までのおよそ8か月間、カデ地区内において収集した。

調査対象はキャンプ T の居住者で、12 世帯に総数 33 人が住んでいた。そのうちわけは、既婚男性 6 人、既婚女性 10 人、未婚男性（推定年齢 18 歳以上の未婚男性）3 人、未婚女性（初潮以降の未婚女性）0 人、男の子 10 人、女の子 4 人である。

キャンプ内での日中活動を調べるために、7:00 から 19:00 までの 12 時間にわたって 30 分おきに、対象キャンプの成人男性 4 人、成人女性 7 人全員の行動を記録した。同時に、単独か集団でいるかも記録した。データをとる日は、雨季と乾季の季節が偏らないように選定し、7 回（7 日間）調査をおこなった。

活動内容は、休憩、工芸品製作、食事、調理、睡眠（昼寝）、水汲み、ヤギ管理、狩猟、採集、訪問、その他の 11 項目に分類した。「その他」には、小屋の掃除、灰捨て、小屋の修理などのキャンプ内での作業が含まれる。休憩、工芸品製作、食事、調理、睡眠（昼寝）はキャンプ内での活動であり、水汲み、狩猟、採集、訪問はキャンプ外での活動である。ヤギ管理には、「朝にヤギ囲いからヤギを出す」キャンプ内での活動と、「ヤギ探しと、夕方の乳しほり」というキャンプ外での活動がある。彼らのヤギ飼育では、日中にヤギの群れに牧童をつけるということはおこなわない。

1-3 子どもの活動

大人の日中活動について、子どもがどの程度まで参加したり手伝ったりするかを記載した。

また、子どもたちだけで行う活動や、遊びについても観察し記録した。1990 年から 1991 年の筆者の観察記録

に、1996 年から 1997 年時点での秋山（2004）の記載を加えた。

2. 結果

2-1. 大人の日中活動

日中の活動記録によると、男性は、7:00 から 19:00 までの日中の時間の 77.3% を、女性は 86.9% をグループで過ごしていた（表 1）。彼らは 1 人でいることがほとんどないといってよい。

男女とも日中の 3 分の 1（4 時間あまり）は休憩に費やしたが、そのほとんどは他人とのおしゃべりやシラミとりで過ごしていた。また、男女とも食事に費やす時間が 1 時間 40 分強と長い。食事でも家族や客などの他の人々とともにし、睡眠（昼寝）でさえも、一人ではなく誰かとともにいる状態でおこなわれた（写真 1）（写真 2）。

休憩と食事の次に多いのは、女性では調理、男性では工芸品製作に費やす時間である。ともに 1 時間 30 分前後である。これらは、単独でおこなうこともある。

水汲みは女性あるいは子どもの仕事だが、男性もすることがある。男女とも一人で水汲みに行く方が多かった。

狩猟は、「集団」と「単独」が半々であった。罨猟は一人で行く場合が多く、犬槍猟や騎馬猟はグループでおこなう。

訪問は、男性は単独でおこなうほうが多く、女性は集団でおこなうほうが多かった。

表 1 大人の日中活動

	男性			女性		
	集団	単独	合計 (%)	集団	単独	合計 (%)
休憩	4 h 00 m	06 m	4 h 06 m (34.4)	3 h 51 m	12 m	4 h 03 m (33.7)
工芸品製作	1 16	18	1 34 (11.7)	26	4	30 (4.2)
食事	1 43	0	1 43 (15.1)	1 41	1	1 42 (14.3)
調理	0	0	0 (0)	1 20	4	1 24 (11.7)
睡眠	44	16	1 00 (8.3)	46	5	51 (7.1)
水汲み	0	3	3 (0.4)	5	12	17 (2.4)
ヤギ管理	1	1	2 (0.3)	10	1	11 (1.5)
狩猟	40	31	1 11 (9.9)	0	0	0 (0)
採集	0	8	8 (1.1)	1 06	20	1 26 (11.9)
訪問	45	1 23	2 08 (18.1)	54	30	1 24 (11.6)
その他	0	5	5 (0.7)	8	4	12 (1.6)
合計	9 9 (77.3)	2 51 (22.7)	12 00 (100.0)	10 26 (86.9)	1 34 (13.1)	12 00 (100.0)



写真 1



写真 3



写真 2

女性は、日中の 11.9% を採集に費やす。これを時間に換算すると、1 時間 26 分に相当する。また、単独で採集に行く場合より、集団で行く場合が多かった。

2-2 子どもの手伝い

子どもの遊びや手伝いは男女による差が大きい。大人の仕事のうち、男子が手伝うものは、水汲みくらいである。男子は、よくロバに乗っており、ロバを使って集落の中心にある井戸まで水汲みに行く。

一方、女子は母親や同じキャンプの女性たちの採集に参加したり、女の子たちが連れ立って採集に出掛けたりする。また、調理、子守、水汲みと、女子の方が男子より手伝いの種類とそれに費やす時間が多いといえる。

キャンプでは火をおこしたり調理の手伝い、子守をおこなう。水汲みにもしばしば出かける。男子と違い、女子がロバに乗ることは稀であり、徒歩で水を入れた容器（ポリタンク）を頭の上に乗せて（頭上運搬）帰ってくる（写真 3）。

2-3 子どもの遊び

以下に、子どもたちの遊びを順に記載する（表 2）。

毘毘

表 2 遊びの種類

遊びの種類	男子 (M) / 女子 (F)	集団 / 単独
毘毘	M	集団
弓矢遊び	M	集団
ゼネー（羽根飛ばし）	M	集団あるいは単独
アビ（棒飛ばし）	M	集団
宙返り	M	集団あるいは単独
パチンコ*	M	集団あるいは単独
ライオンごっこ*	MあるいはMにF混合	集団
胸たたき遊び**	MあるいはMにF混合	集団
「犬」（電池投げ）*	M	集団
自動車遊び	M	集団あるいは単独
ボール遊び	MあるいはMにF混合	集団
工作*	M	単独
縄跳び	F	集団
ゴム跳び	F	集団
あやとり	F, M	集団
お手玉	F	集団
人形遊び	F	単独
編み物	F	単独
ままごと	MあるいはMにF混合	集団
楽器演奏	F, M	単独あるいは集団
歌と踊り	MあるいはMにF混合	集団
ブランコ	MあるいはMにF混合	集団
シーソー	MあるいはMにF混合	集団

*秋山（2004）から引用

**菅原より私信

男子の遊びで、跳ね毘を自分で作る。獲物は鳥かマンガースなどの小動物である。

弓矢遊び

男子の遊び。弦の長さ 30～40 センチ程度の小型の弓

を自分で作って鳥やトカゲを狙う（写真4）。「ままごと」の延長で、男子と女子と一緒にブッシュへ行って遊ぶときは、男子が弓矢猟、女子は採集をおこなう（写真5）。

ゼネー（羽根飛ばし）

おもに男子が遊ぶが、女子も遊ぶ。この遊びと遊具のことをゼネーという。羽根に糸で小石をぶら下げ、その羽根を細枝に引っ掛けて打ち上げる。空に浮かんた羽根が落下してくると、再び、細枝で打ち上げるということを繰り返す（写真6）。



写真4



写真5



写真6

基本的に一人遊びだが、数組のゼネーを作って、複数の子どもが同時にそれぞれのゼネーで遊ぶこともある。アビ（棒飛ばし）

男子の遊び。50センチから1メートルのまっすぐな棒を、砂の盛り上がっているところに投げ当てて、さらに前方に飛ばす。この棒をアビといい、遊びの名称もアビである。複数でおこなうが、飛距離を競うことはなく、縦一列に並んで、先の子の後ろを順についていく。宙返り

男子の遊び。助走をつけて前方宙返りをする。一人でもおこなうが、複数でやると楽しさが増す。

パチンコ

男子の遊び。5歳ころから自分でパチンコを作り、石で鳥やトカゲを狙う。捕まえた獲物は自分で焼いて食べる（秋山2004）。

ライオンごっこ

男子だけでおこなうことが多いが、男女のグループでも遊ぶ。鬼ごっこに似ているが、鬼はライオンであり、四つん這いでライオンを真似て吠えながらうろうろする（秋山2004）。

胸たたき遊び

男女のグループで遊ぶ。2チームに分かれ、向かい合って座る。胸をたたきながら喘ぎ声を出し（野生動物のスティーンボックの真似だという）、その後、手を砂の上に置く。対面している相手とのこぶしの起き方で勝敗が決まる。勝つたびに砂に穴を掘り、穴の数が多いチームが勝ちである（菅原和孝より私信）（写真7）。

「犬」（電池投げ）

男子だけで遊ぶ場合が多いが、女子も加わることがある。単一の乾電池を14～20個ほど用い、2チームに分かれて、相手の電池（これを「犬」と呼ぶ。電池を犬に見立てている）に自分の電池を当てて倒す。先に相手の乾電池をすべて倒した方が勝ちである（秋山2004）。



写真7

自動車遊び

男子の遊び。自動車の模型を、自分で作り、作った車を一人あるいは複数で操作して遊ぶ。空き缶の底で車輪を、針金やゴム、銅線を用いて車体を作る。4～5歳から自分で作り始め、成長するにしたがって複雑で精巧なものを作るようになる。完成形は、押し棒の先にハンドルを取り付けて舵を切れるようにしたものである。

ボール遊び

男子がおもに遊ぶが、女子も女子だけであるいは男子に交じって遊ぶ。ボロ布で作ったボールあるいは、本物のボールでキャッチボールをしたり、蹴ってサッカーをして遊ぶ（写真8）。

工作

野生の根茎などをナイフで加工してコマや飛行機などを作って遊ぶ。男子は5歳ごろからナイフを使うようになり、10歳ごろに自分用のナイフを与えられる。女子がナイフを用いることはめったになく、ナイフによる工作はもっぱら男子の遊びである（秋山2004）。

縄跳び

女子の遊びだが、男子も加わることがある。二人が縄の両端を持つ大縄跳びが一般的である。

ゴム跳び

女子の遊び。日本の子どものゴム跳びとほぼ同じ。

あやとり

男子も女子もおこなう。二人で遊び、一人あやとりはしない。遊び方は日本の子どものと同じである。

お手玉

女子の遊びだが、男子もおこなう。石を使って遊ぶ。片手で石を一個放り投げ、その間に地面に並べた石を一個つかむ。これを繰り返して手の中の石を増やしていく。

人形遊び

女子の遊び。ボロ布や余り布で人形を作って遊ぶ。幼児には、大人が作って与えるが、10歳くらいになると、

自分で作って遊ぶ。

編み物

女子の遊び。10歳前後から、女子は盛んに帽子などを編むようになる。毛糸は、古くなったセーターや帽子をほどいて利用する。編み棒は、小枝やイネ科の植物の茎で作る。

ままごと

女子の遊びだが、男子も加わることがある。大人を真似て、小さな小屋を建てたり、小枝を拾ってきて、空き缶の「鍋」で調理したりする。男子や人形も参加させてロールプレイングをおこなうこともある（写真9）。

楽器演奏

男女とも3歳前後の幼児から、野生の豆の莢を乾燥させたものを振ったり、空き缶をはじいたりしてリズムミカルな音を出して遊ぶ（写真10）。

簡単な弓（楽弓）の弦を一人で弾いたり、複数で一つの弓を弾いて合奏したりする。音程の変化とリズムを楽しむ。

大人の男性は、「親指ピアノ」や箱型の空き缶で作った「ギター」や「ヴァイオリン」の楽器を演奏するが、10歳過ぎの少年や少女は、大人の楽器を借りて弾いてみることもある。



写真9



写真8



写真10



写真 11

歌と踊り

女子だけで歌って踊るダンスは、「メロン・ダンス」として有名である。野生のメロン、あるいは布を丸めて作ったボールを順番に受け渡ししながら踊る。メロンを受け取った少女は、メロンを自分の手から手へ投げたり転がしたりしながら、即興の踊りを踊る。他の少女たちは、手で拍子を取り歌をうたう。

男子だけで歌いながら踊るときもあるが、女子だけに比べて頻度は高くない。

大人のダンスは、女性が手拍子と歌、男性がダンスと役割が決まっているので、子どもたちだけで踊る場合も、男女が混じっている場合は男子がダンス、女子が歌を分担する。

ブランコ

高い枝にロープを掛けて「ブランコ」を作って遊ぶ。集団で歌をうたいながら、その歌に合わせて一人の子がブランコを漕ぐ。数分間ブランコを漕いだ後、次の子に交代する。歌は女子のメロン・ダンスとよく似ており（無歌詞）、メロンを持って踊る部分が、そのままブランコを漕ぐパートに移行しているといった印象を受ける。女子が中心だが、年少の男子も混ざることがある。

シーソー

切株の上に棒をのせ、棒にまたがってシーソーにして遊ぶ（写真 11）。

3. 考察

3-1 遊びの学習過程

年齢とともに、いかに遊びを覚えていくか、とくに、生業である狩猟や採集に結び付く活動をいかに覚えていくかということは、彼らの生存にとって非常に重要なことである。

この「学習過程」を、①大人から子どもへ、②子ども集団の中で年長者から年少者へと2タイプに分けて考え

てみる。

女子は、大人から子どもへ、採集のやり方などが伝承される。母親は、2歳程度までは子どもを背負って採集に行くが、その後、男の子はキャンプに残し、女の子は引き続き採集に連れて行く傾向がある。

したがって、女子は母親などの親族から、採集の方法を学ぶ。また、調理や子守、手芸（革細工や編み物）も、まず大人から学習する。一通り学習した後で、同年齢の女子と採集に行ったり、手芸をしたりするようになる。

ところが、男子は、狩猟や革の加工の方法、ナイフの扱い方を、大人から教わるよりも、子ども集団の中の年長者から学ぶ傾向が強い。

たとえば、弓矢は、3歳前後の幼児には大人が作って与えるが、5歳ごろから自分で作るようになる。その後、5歳から10歳くらいまでの男子は、子どもたちだけでブッシュで遊んでおり、この集団の中で、年長者から弓矢の作り方、罾の作り方、ナイフの扱い方を教わる。

このような時期を経て、16歳くらいになると、いきなり大人たちの犬ヤリ猟や騎馬猟に参加する。ただし、若者の間は、獲物を倒す狩り手ではなく、獲物の解体と運搬を受け持つ。

3-2 少ない競争の要素

サンの子どもの遊びには競争の要素が少ないことがしばしば指摘されている（Draper, 1976）。ここに挙げた22種類の遊びにおいても、勝敗が決まってい勝つことを遊びの目的にするものは、「胸たたき遊び」と「犬」（電池投げ）の2つだけである。

飛距離などで勝敗を競いそうな「アビ」（棒飛ばし）においても、棒を投げて拾って走る動作そのものを楽しんでいる。彼らは「横並び」で競い合うのではなく、「縦一列に並んで」、前の子の動作を、後ろの子が繰り返す。

このような動作のパターンは、女子の「メロン・ダンス」や「ブランコ」においても見られる。

これらの遊びの楽しさは、前の子の動作を「繰り返す」つつ、即興的な踊りや個々人のやり方で投げるという「独創性」を磨く点にある。

4. 今後の課題

以上の結果から、グイ／ガナの子どもが、生業や技術を学んでいく過程を、①大人から子どもへ、②子どもの年長者から年少者へ、さらに、③一人遊びの、3つのカ

テゴリーに分けて考えることが有効であることがわかった。今後はさらに、そのカテゴリー内での大人と子ども、あるいは子どもどうしの相互作用の特徴を抽出したい。

また、競争の少ない社会における「学習」の特徴は、ダンスやブランコ遊びに見られたような「模倣」と「独創性の開発」によるものであることが予想される。このことを、ビデオ映像の行動分析などから解明することが今後の課題である。

筆者が、1988年から1996年にわたって撮りためたビデオ映像が、約30時間分あるので、この映像資料の分析をおこないたい。

また、新たに子どもの行動をビデオなどに撮影し、「遊び」や「技術の習得」をコミュニケーションの観点から分析する。そのために、子どもの遊び場面のビデオ映像資料の解析方法を開発し、キーとなる行動パラメー

タを抽出する。来年度は、予備調査として日本の保育園などでビデオを撮り、そのデータ解析から、コミュニケーション分析の方法を検討する。そして、来年度以降、ボツワナ共和国においてサンを対象に映像記録を収集したい。

引用文献

- 秋山裕之 2004「定住地における子どもの民族誌」田中二郎、佐藤俊、菅原和孝、太田至編『遊動民—アフリカの原野に生きる』、昭和堂。
- Draper, P. 1976 Social and economic constraints on child life among the !Kung San. In Lee, R. B., & DeVore, I. (eds.) *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*. Harvard Univ. Press, Cambridge, pp.199–217.
- 今村薫 2010『砂漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』、どうぶつ社。

学習の三つの顔

——カナダ・イヌイトの学習をめぐる諸問題——

大 村 敬 一

(大阪大学大学院言語文化学研究科)

1 はじめに

狩猟採集民の学習能力の特性を検討し、その特性に基づいて現生人類の学習能力の進化史的な基盤を明らかにすることを目的とする A 02 班にあって、私が担当する調査の目的は、カナダ極北圏の狩猟採集民であるイヌイトが極北圏の生態環境で狩猟・漁労・毘猟・採集から成る生業活動を自在に展開するとともに、適切な社会生活を営むための能力を学習する過程の具体的な様相を解明することにある。この目的のために、私は生業活動と社会生活を営むために必要な「イヌイトの知識」(*Inuit Qaujimajatuqangit*) についてこれまでに行ってきた調査を継続するとともに、そうした知識が学習されてゆく過程の実相を明らかにするための調査をはじめつつある。

この小論では、この調査で明らかにするべき問題の所在を明瞭にするとともに、その問題に対する今後の調査の見通しを示すことにしたい。そのために、この小論ではまず、イヌイトによって学習されるイヌイトの知識の特徴を明らかにする。そのうえで、その特徴をふまえながら、イヌイトの知識の学習に関するこれまでの調査と研究を検討することによって、私が今後の調査によって明らかにするべき問題の所在を明瞭にする。そして最後に、その問題に対する今後の調査の見通しを示すことにしたい。

2 戦略的知識と戦術的知識：「イヌイトの知識」の二つの顔

イヌイトは「極北の科学者」の異名をもつ。環境の微妙な変化も見逃さない鋭い観察力、飽くなき好奇心、徹底した経験主義、厳密さと精確さへの執念、そして何よりも過去数世紀にわたる生業の実践を通して蓄積されてきた豊かな知識。これら知的な資質と所産に対する敬意が込められた呼称である。

今日、広く知られているように、イヌイトは極北圏の

生態環境について詳細で精確な知識をもち、狩猟の技術をはじめ、巧みな生業技術をもって極北圏の生態環境に適応してきた。こうした極北の生態環境に関する知識と生業技術、さらには、そうした環境下で社会生活を適切におくするために必要な知識は、イヌイトの人々の間で「イヌイトの知識」(*Inuit Qaujimajatuqangit*) と呼ばれている。イヌイトの知識とは、字義通りには「イヌイトが長らく知りつつあること」を意味し、「イヌイトの物事のやり方、すなわち過去と現在と未来におけるイヌイト社会の知識と経験と価値体系」(IQ Task Force 2002: 4) と定義されている。

かつて、このイヌイトの知識は近代科学よりも劣る「未開の科学」とみなされるにすぎなかった。しかし、1970年代後半から進められてきた民族誌調査によって、イヌイトの知識にはイヌイトが幾世代にもわたる環境との密接な関係を通して育んできた智慧が蓄積されていることが明らかにされ、そのイヌイトの知識が近代科学と異質でありつつも、対等な妥当性と正当性を備えていることが示されようになってきた。表 1 にあるように、定量的、分析的、還元主義的、客観的、機械論的な近代科学が、自然を人間とは分離してとらえる二元論的な世界観に基づいているのに対し、イヌイトの環境に関する伝統的知識は定性的、全体論的、直感的、主観的、経験的、精神論的で、自然と人間を分離せずに一体的な全体としてとらえる一元論的な世界観に基づいており、その世界観に沿って読解すれば、精確さや説明力の点で近代科学に勝るとも劣らないことが明らかにされたのである。

このイヌイトの一元的な世界観では、「客人としての動物 (animal as guest)」や「人間ではない人格 (non-human person) としての動物」というルート・メタファーに基づいて野生生物が擬人化され、様々な野生生物種はそれぞれ同種ごとに社会を形成して人間と同じような社会生活を営んでいるとされる (e.g. Bodenhorn 1990; 1993; Fienup-Riordan 1990a; 1990b; 大村 2002a; 2002b)。そして、人間の社会を含め、これら「人格」たちが同種ごとに形成する諸社会の間では、排他的な敵対関係や相互

表1 イヌイトの知識（伝統的な生態学的知識）と近代科学（科学的な生態学的知識）

イヌイトの知識（伝統的な生態学的知識）	近代科学（科学的な生態学的知識）
定性的	定量的
直観的	合理的
全体的でコンテキスト依存的	分析的で還元主義的
倫理的	没価値的
主観的で経験的	客観的で実証的
柔軟性	厳密で固定的
知識の形成に時間がかかる	知識の形成が早く、結論に早く至る
空間的に限定された地域での長期間の変化に詳しい	短期的ではあるが空間的には広大な地域をカバーする
精神論的な説明原理	機械論的な説明原理
逸話や物語のかたちをとることが多い	法則や原理のかたちをとることが多い
環境を対象化したり管理したりしようとはしない	環境を対象化して管理しようとする

（Berkes 1993；1999；Freeman 1985；1993；Gunn, Arlooktoo and Kaomayok 1988；Stevenson 1996 より要約）

に助け合う互酬的關係など、異種間に社会間關係が結ばれていると説明される。こうした説明はたしかに、「自然／人間」の二元論に基づく近代科学からみれば、人間と野生生物の根元的差異を混同している荒唐無稽な「神話」にしかみえない。しかし、観察される様々な現象についてイヌイトの説明と近代科学の説明を対照的に比較する研究が進むにつれ、イヌイトが社会間關係のメタファーで説明している現象が、実際にその通りであることが明らかにされたのである（cf. Collings 1997；Freeman 1985；1993；大村 2002a；2002b）。

このようにイヌイトの知識が精確さや説明力の点で近代科学と同等であるにもかかわらず、近代科学と対照的な特徴を示すのは、すでに別稿（大村 2003；2002b；2005a）で検討したように、イヌイトの知識が近代科学とは対照的なイデオロギーに基礎づけられているからである。「近代」の知をめぐる問題を分析するためにミシェル・ド・セルトー（1987）が峻別した「戦術」と「戦略」という概念に基づいて整理すると、イヌイトの知識と近代科学は「戦略」のイデオロギーと「戦術」のイデオロギーという正反対のイデオロギーに基礎づけられていることがわかる。

戦略のイデオロギーとは、周囲の環境から身を引き離して環境を一挙に見通して対象化する主体が、その対象化した環境をコントロールしようとする実践様式を評価する価値観のことである。表1にあるように、近代科学は環境を人間との関係から切り離して対象化したうえで、その環境にみられる現実の多様性を一般化したり、定量化したりすることによって環境に関する客観的な法則や原理を構築し、その法則や原理に基づいて環境の全

体を一挙に把握しようとする。その意味で、まさに近代科学は戦略のイデオロギーに基礎づけられている。そして、このように環境を対象化する戦略の延長線上に、環境を管理して操作しようとする近代的な環境開発の考え方があると言える。

他方で、イヌイトの知識を基礎づけている戦術とは、身近な例でいえば、格闘技などで多用される実践様式であり、相手を対象化することもコントロールすることもできない組んずほぐれつの状態の中で、相手の力を巧みに利用しながら「うまくやる」機略である。そして、戦術のイデオロギーとは、このように周囲の環境との密接な関係に巻き込まれながら、その中に一瞬あらわれる機会を利用して「その場しのぎ」的に「うまくやる」技術を高く評価する価値観のことである。この戦術のイデオロギーは「柔よく剛を制す」ということばによって端的に表すことができるだろう。

実際、イヌイトの社会においては、この戦術のイデオロギーに相当するような価値観を表す「イホマ」（ihuma：思慮）という理念がある。このイホマは大人がもつべき重要な資質の一つであり、多様で複雑な現象を一般的な原理に還元してしまうのではなく、現象の多様性の中に潜む機会を機に乗じて巧みに利用する才覚を指している（Briggs 1968；1970；1991；大村 1998；2003；2002b；2005a）。一人として同じ人がおらず、それぞれの経験が異なる以上、つまり経験された出来事の一つとして同じものではなく、そのコンテキストが異なる以上、経験を一般化して一律に定義することは思慮あることではないとされる。また、あらゆる事物には多様な可能性が潜在しており、その潜在的多様性を一つの定義

に還元し、一般化してしまうことも思慮あることではない。むしろ、思慮ある大人であるならば、事物の潜在的可能性を活かすべきであり、イヌイトにとって理想的な大人とは、「柔よく剛を制す」戦術を身につけた人物のことなのである。

こうした戦術のイデオロギーに基礎づけられているために、イヌイトの知識は戦略に基礎づけられた近代科学とは対照的な方向に発達してゆくことになる。そして、ちょうど近代科学にはイヌイトの知識が「未開の科学」のようにみえるように、複雑な現象の多様性を一般的な法則や原理に還元してしまう近代科学は、イヌイトの目には思慮に欠ける子供っぽいもののやり方にみえることになる。思慮ある大人らしい戦術を首尾よく行うためには、近代科学のように現象の法則や原理を明らかにしてもあまり意味がないからである。むしろ、どのようなコンテキストでその原理や法則を利用するのか、つまり、多様な状況によって微細に異なる多様な「やり方」をできるだけ多く知っていることこそが肝心である。機に乗じて「機会」を利用するためには、その機がふいに訪れた時に即興的に乗じる機敏さや当意即妙な柔軟性が要される。そういった時にものをいうのは融通のきかない固定的な法則や原理ではなく、蓄積された豊かな経験である。

結果として、イヌイトの知識では、表1にあるように主観的で経験的、直感的な性格が強調され、現象を全体論的にとらえるコンテキスト依存的な傾向が強くなり、物語や逸話のかたがが好まれることになる。また、近代の環境開発の考え方のように、環境が人間との関係から切り離され、利用、管理されるような資源として対象化されることはない。むしろ、格闘技における「わざ」の開発のように、狩猟や漁労の実践を積み重ねることによって、多様な経験を記憶の蓄積として開発することにこそ重点が置かれることになる。イヌイトは環境を改変したり、野生生物を管理したりしながら環境を開発してゆくかわりに、経験の物語を編みだし、自身の記憶と技能を磨いてゆこうとするのである。

しかし、ここで注意しておかねばならないのは、近代科学が戦略のイデオロギーによって、イヌイトの知識が戦術のイデオロギーによって基礎づけられているといっても、この二つの科学に共通性は何もないわけではないということである。

たしかに、「イホマ」の理念に基づくイヌイトの知識は戦術的な色合いが強い。しかし、だからといって、イヌイトの知識に戦略的視点が完全に欠けているわけではない。たとえば、私がかつて調査を行ったナヴィゲーションに関するイヌイトの知識では、たしかに多様なコン

テキストを細密に再現する戦術的視点が強調され、個々の状況ごとの細部を微細に再現した旅の物語が語られる(大村 2003; 2004a; 2005b; 2008; Omura 2005)。しかし、実際にナヴィゲーションが実践される場合にも、ナヴィゲーションの運用に必要なイヌイトの知識が語られる場合にも、地名や方位など、個々の状況から離れて俯瞰的にとらえられた地理空間の構造、つまり戦略的視点からでなければとらえることのできない知識が基礎になっている(大村 2004a)。実際、イヌイトの古老や熟練ハンターは、卓越風の方向から割り出される2軸4方位の絶対方位を基礎に、地名をつけられた300カ所近くの場所の空間的な相互関係を構造的に把握している(大村 2004a)。そして、筆者が参与観察を行なったナヴィゲーションの現場においては、風向きや雪紋の方向、地形の観察などによって、この絶対方位と地名によって組織化された空間の構造の中に自己を的確に位置づけるための努力を常に行なっていた。

また、戦略に基礎づけられている近代科学にも、戦術的な色合いがないわけではない。実験室や研究所など、近代科学を実践する場においても、セルトーが指摘しているように「総合的な戦略のスペクタクルと局地的な戦術の不透明な実態」(セルトー 1987: 34)が共存しているのであって、戦略的視点から環境を一挙にとらえようとする近代科学にも、その場しのぎ的ではあるがうまくやる戦術的側面がないわけではない。たしかに、近代科学が最終的な産物として提示するモデルや法則は、環境から身を引き離れた一望監視的な戦略的視点に立って世界を一挙に把握しようとする戦略的実践の産物である。しかし、こうした最終的な生産物としてのモデルや法則にたどり着くまでには、実験装置や実験手順の当為即妙な工夫、フィールドワークやインタビューでの臨機応変な対応など、そのときどきで突発的に変化する状況に柔軟に対処する戦術的実践が営まれている。近代科学の実相においても戦術と戦略の両方の実践様式が展開されているのである。しかし、そうであるにもかかわらず、最終的な産物として提示される近代科学の言説では、日常的に行なわれているすぐに役立つ戦術的実践は隠蔽され、モデルや法則など、戦略的知識だけが提示されるのである。

したがって、イヌイトの知識と近代科学は決して本質的に異なっているわけではない。この二つの科学は戦略と戦術のバランスのとれた組み合わせによって成り立っているものであって、両者の差異は戦略と戦術というそれぞれを方向付けるイデオロギーの差異によって生み出されているにすぎない。近代科学が戦略のイデオロギーに基づいて野生の環境を対象化して飼育する

科学」であるとすれば、イヌイトの知識は戦術のイデオロギーに基づいて野生の環境のただ中にあえてとどまろうとする「野生の科学」であると言えるだろう。

3 問題の所在：「イヌイトの知識」の学習の三つの顔

それでは、こうした「野生の科学」とも言えるイヌイトの知識をイヌイトはどのように学習しているのだろうか。残念ながら、イヌイトの知識が学習される過程の実態はあまり明らかになっていないとは言えない。もちろん、イヌイトの子どもの学習に焦点をあてた研究がないわけではない。ここでは、これまでの調査と研究を整理しながら、イヌイトの知識が学習される過程をめぐる問題の所在を明らかにしてゆこう。

イヌイトの子どもの学習過程に焦点をあてた調査と研究を行ったジーン・ブリッグス (Briggs 1991 ; 1998) は、思いも掛けない危険と死に常に直面するイヌイト社会においては、何よりもまず、予期できないということを常に予期する身構えを育み、そうした予期できないことに遭遇しても決して慌てることなく、そうした不期な状況に臨機応変に対処する術を身につけることが重要であり、イヌイトの子どもの学習過程でも、そうした予期できない状況に柔軟に対処する術を学習することに重点が置かれていることを指摘している。そして、そうした予期できない状況に柔軟に対処する術が学習されてゆく過程においては、熟練ハンターから子どもに教示が行われることはなく、そうした術は生業活動に実際に参加してゆく実践的な経験を通して、あるいはさまざまな遊びやゲームを通して学習されることを明らかにしている。

また、ブリッグスは、こうした学習の過程では、学習者が失敗することによって実際に危険にさらされたり、その失敗を周囲からからかわれたりすることが学習の重要な契機になっていることを指摘している。もちろん、そうした失敗によって学習者が危険にさらされたとき、熟練ハンターはその危険を放置するわけではなく、学習者が直面している危険を回避することができるよう助ける。あらかじめ失敗による危険を学習者に教え、行っではいけないことを学習者に禁じるのではなく、失敗による危険を自らの身を以て経験したり、自らの失敗をからかわれて失敗に懲りたりすることによって、何が危険であるのか、そして、その危険に直面したときに、その危険をどのように回避すればよいのかを自ずと学習するようにし向けるのである。

もちろん、イヌイトの知識が学習されてゆく過程では、このような実践を通した学習だけが行われているわけではない。かつて私は、極北の環境を自在に移動する

ために必要なナビゲーションの知識と技術について調査を行い、その知識と技術が学習される過程では、生業活動や隣村までの旅から帰った後に古老や熟練ハンター同士が語り合う生業活動や旅の物語に日常的に曝されることが重要な役割を担っていることを指摘した (大村 2004a)。

テレビを含め、様々な娯楽が導入されている今日でも、通例、夕方から夜半にかけて、ハンターたちはそれぞれ、おもしろいおもしろい互いの家庭を訪れ、お茶を飲みながら数時間にわたる談話を楽しむ。こうした訪問談話は熟練ハンターの世帯の家屋の居間で行われ、一晩に数人の熟練ハンターが入れ替わり立ち替わりやってきては談話の環に加わり、それぞれが満足するまで続けられる。また、訪問する側のハンターは一晩に数軒をはしごする。この談話では、政治的な事件や経済上の問題、それぞれの家庭でおきている問題などについて意見が交換され、最近行われた生業活動の様子や海や天候の状態などについても頻繁に情報が交換される。

たとえば、その日の生業活動が話題となる場合には、どのようなルートを通ったのかを含め、夏季には湾内のどの辺りまで流水が進入しているのか、その結果としてどの水道が通り抜けられ、どの水道が流水でふさがれているのか、風や波の様子はどうなっているのか、さらに、冬季には海水や積雪の具合はどうなのかなど、ナビゲーションにかかわる多くの情報がやりとりされる。また、スノーモービルによる隣村への訪問が話題となる場合には、当然のことながら、その隣村へのルートがどのような状態になっているのか、そのルート上にある避難所や食糧の備蓄などの状態がどうなっているのかなどについて活発に意見が交換される。こうした談話を通してハンターは相互に情報を交換しあい、常時ナビゲーションに必要な様々な情報を蓄積し、更新しているのである。

こうした訪問談話は広い居間で行われるため、談話に加わっているハンターたちの周りには、小さな子どもたちや女性、若い未熟なハンターなどが常に出入りし、おもしろいおもしろい自分の時間を過ごしながらか、ハンターたちの談話に耳を傾けている。特に話題が熟練ハンターたちの昔話しともなると、若い未熟なハンターたちは一層熱心に聞き入る。こうした日々の日課に組み込まれている談話に日常的に曝されることで、子どもたちや若い未熟なハンターはナビゲーションに必要な知識を身につけ、熟練ハンターに連れられて実地でナビゲーションの技術を習得するための準備を整えてゆくのである。

このように、イヌイトの知識の学習過程では熟練ハンターからの教示が行われることはほとんどなく、生業活

動の実践やゲームや遊びの実践を通して、あるいは生業活動や旅の語りに日常的に曝されることを通して子どもや未熟練ハンターが自主的に学習してゆくこと、そして、その過程では学習者が身を以て味わう失敗の経験が重要な役割を果たしていることは、先に検討したように、イヌイトの知識を基礎づけているイデオロギーが戦術のイデオロギーであることを考えれば、納得がゆくだろう。戦術とは予期できない状況に対して臨機応変に対処するやり方であり、その戦術を生業活動の実践なしに教示することはできないからである。

そもそも、戦術が発揮されるのは、突発的に生じる思いも掛けない出来事に直面する状況下であり、そうした予期できない状況での対処法をあらかじめマニュアル化して教示することはできず、実際に生業活動を実践する中で偶然的に生じる状況にその場その時に対処する中で身につけてゆくしかない。また、その時その場での戦術的な対処が具体的に語られる生業活動や旅の物語を聞くことを通して、子どもたちや未熟練ハンターは、突発的で不期な状況に対して打つ戦術的な「手」をあらかじめ知ったり、豊かにしたりしてゆくことができるだろう。熟練ハンターたちが交わすさまざまな語りに日常的に曝されることが、生業活動の実践に実際に参加する中での学習の準備になるのは、このためであると考えることができる。

しかし、ここで注意せねばならないのは、戦術のイデオロギーに基礎づけられているイヌイトの知識では、そのイデオロギーに従って、臨機応変で柔軟な即興の技である戦術的な知識が強調されるとは言っても、その知識が戦術的な知識だけから成っているわけではないことである。先に検討したように、イヌイトの知識は戦略的な知識と戦術的な知識のバランスのとれた組み合わせから成っており、戦術のイデオロギーに従って強調される戦術的な知識の背後には、一望監視的で上空飛翔的な視点から対象を一挙にとらえようとする戦略的な知識が隠れている。

そもそも、予期することができない突発的な状況に臨機応変に対処する戦術だけでは、生業活動を行うことも、極北の環境を自在に移動することもできない。実際、臨機応変な戦術を重視するからといって、生業活動におもむくにあたってイヌイトが何の予測も見積もりも行わないわけではない。私の参与観察の経験にある限り、野生生物の季節移動のパターンに従った予測に基づいて、その日に向かう猟場やルートの大まかな計画を立てないハンターはいないといってよい。また、獲物の行動を的確に予測し、天候の変化を機敏に読み取って天気

の予測がなければ、広大なツンドラの大地を移動する野生生物を的確に捕捉することはできないだろう。生業活動やナビゲーションに必要なイヌイトの知識には、環境から身を引き離して環境を一挙に見通して対象化する戦略的な知識が不可欠なのである。

したがって、イヌイトの知識が学習される過程を明らかにするためには、こうした戦略的な知識が学習されるメカニズムも解明されねばならないことになる。もちろん、実際に生業活動やナビゲーションが実践される場合、戦略的な知識と戦術的な知識は相互に無関係なわけではなく、相互に組み合わせられて使われているのだから、戦術的な知識と戦略的な知識のそれぞれが学習されるメカニズムだけでなく、その二つのタイプの知識を組み合わせるやり方が学習されるメカニズムも明らかにされねばならない。それでは、実際に生業活動の実践に参加したり、ゲームや遊びに参加したり、熟練ハンターや古老が交わす語りに耳を傾けたりする中で、イヌイトの子どもや未熟なハンターたちが、古老や熟練ハンターからの教示を受けることなく、戦略的な知識と戦術的な知識のそれぞれを、さらに、それら戦略的な知識と戦術的な知識を組み合わせるやり方を学習するメカニズムはどのようなになっているのだろうか。

残念ながら、これまでのイヌイトの知識の学習過程に関する調査と研究は、そのメカニズムを明らかにするところまで達しているとは言えない。たしかに、これまでの調査と研究では、イヌイトの知識の学習過程では熟練ハンターや古老からの教示がないこと、実際の生業活動や遊びの実践に参加することで学習が行われていること、古老や熟練ハンターが交わす語りに日常的に曝されることで実践を通じた学習の準備が整えられてゆくことなど、学習が行われるコンテキストは明らかにされてきた。しかし、その状況下で具体的に学習が展開されるメカニズムにまで探求の手が伸びているとは言えない。そうした学習のコンテキストにおいて、戦略的な知識と戦術的な知識、さらには、それら二つのタイプの知識を組み合わせる方法というイヌイトの知識の学習をめぐる三つの側面が、どのようなメカニズムで学習されてゆくのか、その具体的な実態を明らかにすることが、イヌイトの知識の学習過程を明らかにするために必要なことであると言えるだろう。

4 展望：学習の三つの顔を明らかにするために

この小論では、イヌイトの子どもや未熟練ハンターが極北圏の環境下で自在に移動したり、生業活動を行ったりするために学習せねばならないイヌイトの知識の特徴

を概観するとともに、そのイヌイトの知識の特徴と照らし合わせながら、その知識が学習される過程に関するこれまでの調査と研究を検討し、そうしたイヌイトの知識の学習について、今後、探求されるべき問題の所在を明らかにしてきた。そして、イヌイトの知識は、(1) 一望監視的で鳥瞰的な視点から万物を対象化して把握する戦略的な知識、(2) 予測することができない突発的な出来事に臨機応変に対処するために必要な戦術的な知識という二つのタイプの知識から成っており、イヌイトの知識にそうした二つの側面があるのであるならば、イヌイトの知識が学習される過程について考える場合にも、(1) 戦略的な知識の学習、(2) 戦術的な知識の学習、(3) 戦略的な知識と戦術的な知識を組み合わせるやり方の学習という学習の三つの側面が、これまでの調査と研究で明らかにされてきた学習のコンテキストで、すなわち、生業活動やゲーム、遊びに参加する中で、あるいは、古老や熟練ハンターが語り合う旅や生業活動の物語に曝される中で展開される具体的なメカニズムをさぐる必要があることを示した。

しかし、こうした学習の具体的なメカニズムをさぐるのは決して簡単なことではない。近代国民国家における学校教育でのように、学校という時間的にも空間的に限定された場で一般化された知識が組織的に教示されるのであれば、一望監視的で上空飛翔的な視点から万物を対象化して一般化する戦略的な知識がマニュアルのようなかたちを通して学習されてゆく過程を追うことができるかもしれない。しかし、すでにこれまでの調査と研究で明らかにされてきたように、イヌイトの知識が学習される過程は生業活動や遊びの実践、あるいは古老や熟練ハンターの談話を聞くことなど、日常生活の中に埋め込まれており、何時、何処でその学習が行われているのかを特定することすらできない⁽¹⁾。もちろん、イヌイトの知識は学校教育での教科書のようにマニュアル化されているわけでも、古老や熟練ハンターから一般化された知識のかたちで子どもや未熟練ハンターに伝えられるわけでもなく、何がどのように学習されているかを見きわめることすら難しい。まして、予期できない状況に臨機応変に対処するための戦術的な知識にいたっては、マニュアル化どころか、一般化することもできないため、機転とでも言えるような戦術的な知識を身につける過程を追跡すること自体が困難である。

このようにイヌイトの知識の学習過程の具体的なメカニズムを解明することが難しいとは言っても、これまでの調査と研究から推定できることがないわけではない。おそらく、イヌイトの知識の学習過程では、一般的な知識やマニュアルのかたちをとった教示の過程が見られ

ず、生業活動や遊びの実践することによって学習が行われ、その実践を通じた学習の準備として古老や熟練ハンターの具体的な旅や生業活動の物語に曝されることが重要な役割を果たしているのであれば、イヌイトの子どもや未熟練ハンターは、一般化された知識やマニュアルのかたちで戦略的な知識を教示されて学習することからはじめるのではなく、むしろ逆に、生業活動や遊びの一回ごとの具体的な実践を直接に経験したり、古老や熟練ハンターが語る旅や生業活動の物語を聞いたりすることによって、具体的な事例を一つ一つ自らの記憶に徐々に積み上げ、そうして記憶に蓄積されてゆく無数の事例を一般化することによって戦略的な知識を自ら導き出していると推定することができるだろう⁽²⁾。一般化された知識を教示されて学習することからはじまり、その一般化された知識を具体的な場に応用することが求められる近代国民国家での学校教育とは逆の過程で、イヌイトの知識の学習過程は展開されている可能性があるのである。

また、あるいは、こうした学習の過程を明らかにするにあたっては、生業活動や遊びを実践する中で子どもや未熟練ハンターが陥ってしまう失敗に注目することが有効な方法になるかもしれない。ブリッグスが指摘したように、イヌイトの学習過程では、子どもや未熟練ハンターたちが失敗を犯し、その失敗によって引き起こされる危険に自ら曝されたり、その失敗をからかわれたりすることが学習の重要な契機になっているからである。おそらく、失敗によって曝される危険から子どもや未熟練ハンターたちを古老や熟練ハンターが助けるやり方に注目することで、学習されるイヌイトの知識の要となる過程が明らかになるだろう。あるいは、そうした失敗には、臨機応変な戦術的な知識を学習する「こつ」のヒントが隠れているかもしれない。少なくとも、そうした失敗によって、実践に埋め込まれて言語化されることも身振りで教示されることもないためになかなか顕在化しづらい学習過程の一部が、観察可能なかたちで浮き彫りになる可能性があるだろう。

そして、先に検討したように、イヌイトの知識が戦術のイデオロギーに導かれて近代科学とは対照的な特徴を示すことになると、戦略的な知識と戦術的な知識のバランスのとれた組み合わせのうえに成り立っているという点で近代科学と共通の基盤に立っているのであれば、イヌイトの知識の学習過程のメカニズムを明らかにすることは、イヌイトの知識のみならず、近代科学をも可能にしている現生人類に普遍的な学習過程のメカニズムを解明することにも通じてゆくにちがいない。正反対のイデオロギーに導かれて対照的な特徴を示すようになっていとはいえ、近代科学とイヌイトの知識を支える共通

の基盤、戦略的な知識と戦術的な知識をバランスよく組み合わせながら学習するために必要な条件とは何か。この条件を問うことで、イデオロギーの差異の基底にあって現生人類に普遍的な学習の能力にさぐりをいれることができるかもしれない。

たしかにイヌイトの知識の学習過程の調査ははじまったばかりであり、今はまだ、現生人類の学習能力の進化的基盤という A 02 班が攻め落とすべき本丸の姿は手の届かない彼方にかすんでいる。しかし、遠く天守を仰ぎながら、外堀を埋めるかのように現在進めている調査、つまり、イヌイトの知識の学習が展開されるメカニズムの探求は、その本丸に迫るために絶対に必要な作業であると信じている。

注

- (1) こうした日常実践に埋め込まれた学習を解明するにあたっては、学習が日常実践に遍在しており、実践と学習を分離することはできないことを指摘したジーン・レイヴ (e.g. レイヴ 1995; Chaiklin & Lave 1996) の議論が大きな助けになるに違いない。
- (2) こうした記憶においては、メルロ＝ポンティ (1967) の言うところの身体図式として身体が組織化されることが重要な役割を果たしており、いわゆる「身体で覚える」と言われるような戦術的な機略の学習には身体が組織化が重要なファクターとして関与している可能性があるだろう。身体が組織化による記憶については別稿 (大村 2004b; Omura 2005) で検討したので参照願いたい。

文献

Bodenhorn, B.

1989 *The Animals Come to Me, They Know I Share : Inuipiaq Kinship, Changing Economic Relations and Enduring World Views on Alaska's North Slope*. Ph. D thesis, Cambridge University.

1990 "I Am Not the Great Hunter, My Wife Is" *Etudes/Inuit /Studies* 14(2) : 55-74.

Berkes, F.

1993 Traditional Ecological Knowledge in Perspective. In Julian T. Inglis (ed.), *Traditional Ecological Knowledge : Concepts and Cases*. Ottawa : International Program on Traditional Ecological Knowledge, International Development Research Center, Canadian Museum of Nature. pp.1-10.

1999 *Sacred Ecology : Traditional Ecological Knowledge and Resource Management*. Philadelphia : Taylor and Francis.

Briggs, J. L.

1968 *Utkuhikhalingmiut Eskimo Emotional Expression*. Ottawa : Department of Indian Affairs and Northern Development, Northern Science Research Group.

1970 *Never in Anger : Portrait of an Eskimo Family*. Cam-

bridge : Harvard University Press.

1991 Expecting the Unexpected : Canadian Inuit Training for an Experimental Lifestyle, *Ethos* (Journal of the Society for Psychological Anthropology) 19(3) : 259-287.

1998 *Inuit Morality Play : The Emotional Education of a Three-Year-Old*. Yale University Press & ISER Books, Memorial University.

セルトー, M. (山田登世子訳)

1987 『日常実践のポイエティック』東京 : 国文社。

Chaiklin, S. & J. Lave

1996 *Understanding Practice : Perspectives on Activity and Context*. Cambridge University Press.

Collings, P.

1997 Subsistence Hunting and Wildlife Management in the Central Canadian Arctic. *Arctic Anthropology* 34(1) : 41-56.

Fienup-Riordan, A.

1990a *Eskimo Essays*. New Brunswick : Rutgers University Press.

1990b Introduction - Eskimo Iconography and Symbolism. *Etudes/Inuit/Studies* 14(1-2) : 7-22.

Freeman, Milton M. R.

1985 Appeal to Tradition : Different Perspectives on Arctic Wildlife Management. In J. Brosted, J. Dahl, A. Gray, H. C. Gullov, G. Henriksen, J. B. Jorgensen and I. Kleivan (eds.), *Native Power : The Quest for Autonomy and Nationhood of Indigenous Peoples*. Bergen, Oslo, Stavanger, Tromso : Universitetsforlaget as. pp.265-281.

1993 Traditional Land Users as a Legitimate Source of Environmental Expertise. In Nancy Williams and Graham Baines (eds.), *Traditional Ecological Knowledge : Wisdom for Sustainable Development*. Canberra : Center for Resource and Environmental Studies, Australian National University. pp.153-161.

Gunn, Anne, Goo Arlooktoo and David Kaomayok

1988 The Contribution of the Ecological Knowledge of Inuit to Wildlife Management in the Northwest Territories. In M. M. R. Freeman and Ludwig N. Carbyn (eds.), *Traditional Knowledge and Renewable Resource Management in Northern Regions*. Edmonton : Boreal Institute for Northern Studies. pp.22-30.

IQ Task Force

2002 *The First Annual Report of the Inuit Qaujimajatuqangit (IQ) Task Force*. Iqaluit : CLEY.

レイヴ, J.

1995 『日常生活の認知行動』(無藤, 山下, 中野, 中村訳) 新曜社。

メルロ＝ポンティ, M.

1967 『知覚の現象学』(竹内芳郎他訳) みすず書房。

大村敬一

1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ : 〈イヌイトのやり方〉の〈戦術〉」『民族学研究』

- 63(2) : 160–170。
- 2002a 「〈伝統的な生態学的知識〉という名の神話を超えて：交差点としての民族誌の提言」『国立民族学博物館研究報告』26(4) : 25–120。
- 2002b 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争：共同管理におけるイデオロギーの相克」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』人文書院, pp.149–167。
- 2003 「近代科学に抗する科学：イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』29 : 11–42。
- 2004a 「旅の経験を重ねる：極北に生きるカナダ・イヌイトの知識と実践」『野生のナヴィゲーション』（野中健一編）東京：古今書院, pp.55–90。
- 2004b 「時間・記憶・資源化：狩猟の現場から「身体」と「資源」を捉え直すための研究計画」『資源に関する小論文』（文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」）pp.318–323。
- 2005a 「野生の科学と近代科学：先住民の知識」『文化人類学研究：先住民の世界』（本多俊和、葛野浩昭、大村敬一編）東京：放送大学教育振興会, pp.115–139。
- 2005b 「差異の反復：カナダ・イヌイトの実践知にみる記憶と身体」『民族学研究』70(2) : 247–270。
- 2008 「かかわり合うことの悦び：カナダ・イヌイトの環境の知り方とつきあい方」『環境民俗学：人と自然のつきあいかた』（山泰幸・川田牧人・古川彰編）昭和堂, pp.34–57。
- Omura, K.
- 2005 Repetition of Different Things : The Mechanism of Memory in Traditional Ecological Knowledge of the Canadian Inuit. In Kazuyoshi Sugawara(ed.), *Construction and Distribution of Body Resources : Correlations between Ecological, Symbolic and Medical Systems*. Tokyo : Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp.79–107.
- 2007 From Knowledge to Poetics : The Sophia of Anti-essentialistic Essentialism in Inuit Traditional Environmental Knowledge. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8, pp.27–50.
- Stevenson, M.
- 1996 Indigenous Knowledge in Environmental Assessment. *Arctic* 49(3) : 278–291.

Socialization via singing and dancing activities among the San of North-Central Namibia

Akira Takada

(Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

1. Caregiver-child interactions among the San

The San of southern Africa have been the subject of extensive research due to their foraging lifestyle. Since humans have lived by foraging since prehistoric times, the lifestyle of the San can be assumed to be of considerable antiquity. In addition, studies on the San lifestyle have been regarded as providing vital clues for understanding the fundamental nature of human caregiving, child behavior, and human development (Konner, 1977, 2005). Accordingly, some features of San childhood have been considered representative of the hunter-gatherer lifestyle.

The San actually comprise several clusters of people, the best known among them being the Ju|'hoan (Barnard, 1992: 39). The Ju|'hoan mother–young child bond has been found to be long-lasting and extremely close, with a much greater degree of mother–infant physical contact than that between their American and English counterparts (Konner, 1977). Moreover, Konner (1977: 297–298) observed frequent physical contact between the Ju|'hoan—not only between mother and child but also between other adults and young children. Although children were closely supervised, they were also given considerable leeway despite their continuous physical proximity to adults.

Traditionally, children were not weaned until they became 3 or 4 years old or until their mothers became pregnant again (Draper, 1976: 214–215; Konner, 1977). This late weaning is assumed to be interrelated with the long interbirth interval among the Ju|'hoan. After the long period of nursing, children began to develop a strong attachment for child groups consisting of multi-aged children. Older children in the group took over many caretaking functions, thus largely obviating the need for parental vigilance after the child had attained the age of 3 or 4 years (Konner, 1977:

290). These children had ample time to play, through which they became familiar with the natural environment. The characteristics are thought to be inseparable from the nomadic lifestyle of the Ju|'hoan, as it requires many years to achieve competence as a hunter-gatherer (Draper, 1976: 209–214).

The abovementioned studies were conducted in the 1960s and 1970s; since that time, virtually all of the San groups have experienced drastic social changes. Thus, it would be interesting to explore how these changes have affected their caregiver–child interactions. Moreover, recent research has emphasized the presence of significant cultural diversity among the various San groups (Barnard, 1992).

This article is based on field research conducted among the !Xun San in north-central Namibia, who are neighbors of the Ju|'hoan and have close associations with agro-pastoral peoples. The !Xun and Ju|'hoan exhibit several sociocultural and lifestyle similarities, which have formed the basis for a “regional structural comparison” (Barnard, 1992) between the two societies (for more details of the ethnographic background of these two groups, see Takada (2007, 2008)).

2. Method

Beginning in 1998, I conducted field research among the !Xun based in Ekoka, a village established for the San by missionaries of the Evangelical Lutheran Ovambo/Kavango Church (ELOC). During the study period that commenced in 1998, Ekoka had a population of 169 !Xun.

This study is based on focal observations of caregiver-child interactions that occurred in natural settings during my field research in Ekoka. The data were mostly obtained using two methods. First, in August 2004, I used a checklist to record interactions involving children from infancy to the

end of their fourth year. These data pertained to a total of 17 children: three 0-year-olds, four 1-year-olds, three 2-year-olds, three 3-year-olds, and four 4-year-olds. I performed continuous observations of each focal child using a 1–0 recording protocol with 30-second intervals. I analyzed the following focal behaviors: touching, i.e., another person being in physical contact with the child; suckling, i.e., the child's suckling on the mother's breast; and *child group interactions*, i.e., the child's behavior while participating in the activities of a group of children, without the supervision of adults. All the variables were calculated in terms of the percentage of bouts wherein the focal behavior was displayed from among the total number of observed bouts. Each child was observed for 8 hours, comprising a total number of 960 bouts, which were distributed across 10 daylight hours. Each observation session lasted for 48 minutes, followed by a 12-minute rest period.

Second, in August 2008, I recorded the singing and dancing activities of the !Xun child groups using a video camera. All of the recordings were made in natural surroundings. In addition to taking field notes when the activities occurred, I transcribed parts of the videotapes with the aid of my informants. In order to enable a musicological analysis of the data, I also got some of the audio-visual recordings transcribed in the form of musical scores using music notation software (*Finale 2009*).

3. Contemporary caregiver-child interactions among the !Xun

The tendency of !Xun mothers to touch their children decreased as the child grew older. In the first year after birth (children aged 0 years), infants had physical contact with their mothers in 62% of all the bouts observed during the daylight hours. In the case of children aged 1, 2, 3, and 4 years, touching declined to 28%, 20%, 7%, and 4% of the observed bouts, respectively.

In his earlier study, Konner (1977: 292–297) had reported that the rate of mother-child physical contact tended to gradually decline as the child grew older, amounting to about 30% of the daylight hours by the middle of the child's second year. My data show a similar trend, although the amount of touching by !Xun mothers is slightly lesser than that by Jul'hoan mothers.

The amount of touching by other caregivers did not show a clear relationship with the development of the child.

In the case of children who were less than 1 year old, touching by other caregivers was observed in 29% of all the bouts, whereas in the case of children aged 1, 2, 3, and 4 years, caregiver touching was observed in 43%, 38%, 25%, and 42% of bouts, respectively. According to Konner (1976: 222–228), in the first year after birth, Jul'hoan infants were in physical contact with people other than their mothers for approximately 10–30% of all daylight hours. This trend is similar to that indicated by my data for the !Xun. However, it should be noted that apart from the focal child's mother, other children who resided with the focal child acted as caregivers to a considerable extent among the !Xun. Draper (1976: 209–214) reported that Jul'hoan children were not required to participate in providing subsistence or caring for younger children. In contrast, the !Xun children played a significant role in these activities.

Among the !Xun, suckling was observed in 9%, 7%, and 1% of all bouts involving 0-, 1-, and 2-year-old children, respectively. In all cases, the mother breastfed her child. Similar to Jul'hoan mothers, !Xun mothers nursed their infants briefly, usually for a few minutes at a time and at frequent short intervals. Konner (1977) observed that approximately three-fourths of Jul'hoan children were nursed until they were 2–3 years old (Konner, 1977: 292–293). However, the present data indicate that !Xun children are weaned from breastfeeding earlier than their Jul'hoan counterparts. Among the present-day !Xun, mothers and other caregivers start feeding their children items other than breast milk when the children are less than 1 year old. Thereafter, in the second year after birth, the children undergo a dietary transition from breastfeeding to solid baby food. Suckling ceases almost completely toward the beginning of the third year, regardless of the mother's parturient or non-parturient status.

Previous studies have indicated that one of the reasons for late weaning among the Jul'hoan is that solid foods suitable for babies are largely unavailable or limited due to their foraging subsistence pattern. In contrast, the !Xun live in close associations with Owambo agro-pastoralists, who have various types of infant food. In addition, I observed a case in which a mother applied a bitter grass paste on her nipples in order to facilitate the weaning of her 10-month-old baby. The Owambo have a similar custom. Therefore, it is plausible that the earlier weaning among the !Xun has been facilitated by the development of a sedentary lifestyle, accompanied by close contact with the Owambo.

Konner (1977: 290) pointed out that when the close mother-child relationship declined, as the children grew older, Ju|'hoan children began to switch from a strong attachment to the mother to an attachment to a multi-aged child group. A similar trend was also observed among !Xun children.

Child-group interactions increased in direct proportion to the age of the child. In the 0-year-old age group, child-group interactions were rarely observed, comprising only 2% of all bouts. However, in the case of 1-year olds, child-group interactions were observed in 21% of all bouts. The percentage of child-group interactions increased to 41% in the case of 2-year-olds, 58% in the case of 3-year-olds, and 63% in the case of 4-year-olds. Thus, older children spent most of the daylight hours with other children.

It has been established that Ju|'hoan child groups rarely engage in foraging activities or daily chores (Konner, 1977: 290). In these respects, childcare activities performed by !Xun child groups differ considerably from those performed by their Ju|'hoan counterparts. Due to their earlier weaning, !Xun toddlers aged 1-2 years often participate in multi-aged child groups. Older children habitually take care of these youngsters. In the remainder of this article, I will discuss how the young !Xun children become involved in these multi-aged child groups.

4. Singing and dancing activities among !Xun children

In this section, I will explore the role of singing and dancing activities that are enthusiastically performed by !

Xun child groups. For the !Xun, singing is inseparable from dancing. In the !Xun language, the words “ge'e” and “txae” denote “song” and “dance,” respectively. Singing and dancing activities comprise a large portion of the child-group interactions and provide a major source of pleasure for !Xun children. However, younger children often needed some assistance from the older children to join in the activity. I will demonstrate some examples of this, based on a video clip recorded in Ekoka.

4.1. *Oa kolo onyanga*

In the following incident, a 26-month-old girl G was sitting on the ground next to D, a 3-year-old boy. F, an 11-year-old girl who is a G's mother's younger sister, enjoined G, “G, come and dance. You come and dance.” Following these invitations, G moved toward the singing and dancing circle formed by the older children. Soon the girls began the Owambo song called *Oa kolo onyanga*, which literally translates as “you make an onion” in Owambo. The phrase actually means “you make a mistake.” This song originally refers to Mr Mwdipo Hamutenya, previously an executive of the South West Africa People's Organization (SWAPO), the ruling party of Namibia, who had enjoyed the strong support of a great majority of people in the area. Mr Mwdipo Hamutenya has recently founded his own political party, and the SWAPO supporters regard this as a bad move, i.e., “a mistake.” Note that although the !Xun children of Ekoka primarily use the !Xun language in their daily communication, most of the songs that they performed originated from the Owambo.



Figure 1 The lyric and music score of *Oa kolo onyanga*

line	C (13:3)	F (11:0)
1		<i>oa kolo onyanga</i> you make a mistake
2	<i>oa kolo onyanga mwidipo oa kolo nyanga</i> you make a mistake, Mwidipo, you make a mistake	
3	<i>oa kolo onyanga mwidipo</i> you make a mistake, Mwidipo	
4	<i>oa kolo onyanga mwidipo</i> you make a mistake, Mwidipo	
5	<i>o: mwidipo oa kolo onyanga mwidipo oa kolo onyanga</i> Oh, Mwidipo. You make a mistake, Mwidipo, you make a mistake	
6	<i>oa kolo onyanga mwidipo oa kolo onyanga</i> You make a mistake, Mwidipo, you make a mistake	
7	<i>o: mwidipo oa kolo onyanga mwidipo oa kolo onyanga</i> Oh, Mwidipo. You make a mistake, Mwidipo, you make a mistake	
8	<i>oa kolo onyanga mwidipo</i> You make a mistake, Mwidipo	

Figure 2 Singing/dancing activity (2): *Oa kolo onyanga*



Figure 2 Singing/ dancing activity(2) : *Oa kolo onyanga*

Figure 1 provides the musical score of the song, *Oa kolo onyanga*, that was chanted at that time. C, G's mother's younger sister, who is 13 years old, repeated a phrase ("*oa kolo onyanga mwidipo*") while simultaneously tapping rhythm on a water container. The transcription of lyrics and utterances is given in Figure 2.

When C started singing and drumming, F and another girl began clapping, while two other girls began a rhythmic dance at line 1. Thereafter, at the next phrase, G started clapping (line 2) and then stepping according to the rhythmic dance steps (line 3).

The children then proceeded to the next phase of the dance. This consisted mainly of the children making funny poses, accompanied by the musical phrase "*oa kolo onyanga mwidipo oa kolo onyanga*." While playing this song, the children alternately repeated the stepping and posing phases. At the beginning of the posing phase, at line 5, G was still clapping and stepping (upper photo). Moments later, however, G followed suit and began making similar poses at line 6 (lower photo).

In these interactions, the older children's utterances

served as triggers for G to initiate dancing with them. G then imitated the older children's actions, although she could not imitate them exactly. All of the older children knew the dance script and were therefore able to sing and dance in unison without difficulty, brilliantly improvising their steps and poses. Even though nobody gave them precise verbal instructions, the younger children were eager to imitate the actions of their elders. The older children often regarded this imitation as a part of the dance script, even though these actions were not perfectly synchronized.

4.2. Dance for a marriage

The following incidents showcase a different type of imitation observed in child-group interactions. I once attended a Christian-style wedding. This custom has been accepted in the area as a result of many years of missionary work. However, it is not easy for the !Xun people in Ekoka village to arrange for all the necessities for the ceremony and the subsequent wedding celebrations. In fact, the couple who undertook the wedding ceremony had already been living together for many years and even had several children

together, although their relationship had not been registered by the church. Therefore, they decided to have a wedding ceremony at the church in the nearby town of Okongo. After the ceremony, the bride and bridegroom returned to Ekoka in my vehicle. On our arrival, a crowd of people immediately surrounded the bride and groom and began to perform a rhythmic dance, accompanied by a song of celebration. In addition, they repeatedly chanted the phrases “*e he : i*” and “*ararararararara*,” while a woman played a harmonica. These practices originate from the Owambo style of wedding celebration.

Three days later, I was confronted with an impressive scene. A group of !Xun children were imitating the wedding dance near my camp at Ekoka. The focal child G, who was 25 months old at the time, was dressed up in a white dress and wore a crown of flowers; she also held a bouquet of flowers, and her face had been made up by some of the older children, including her classificatory aunt (her mother’s younger sister). They then began to sing and dance in imitation of the wedding celebrations.

Figure 3 shows the transcription of the lyrics and the musical score. As was clearly indicated by her costume, G was allotted the role of the bride, which usually calls for fewer movements during the wedding celebrations. Right from the onset of the singing and dancing activity, G stood at the center of the dance circle, allowing the older children to groom her as the bride. She then walked forward and stopped in front of the video camera. In accordance with the dance rhythm, the older children would repeatedly move toward G and then turn around, while simultaneously singing,

clapping, and dancing together (upper photo). G, meanwhile, observed the older children and then glanced at her bouquet (lower photo). The song consisted of several polyphonic phrases such as “*ararararararara*,” “*e he e he : i*,” and “*tchi kandoa ma kain*” (translated as “that thing is good”), and this gave rise to a very harmonious performance. Thus, the dance was characterized by a division of roles. In order to participate in the activity, not all the participants needed to be fully acquainted with the temporal structure of the song and dance. The older children allotted appropriate roles to the younger children, and all were allowed to take part in the activity.

5. Participation in a shared rhythm

These examples represent participation frameworks wherein a 2-year-old child was involved in singing and dancing activities. The participation frameworks of these examples are different with regard to (1) the configuration of the direction and extent of the participants’ attention, (2) the complexity of the activity and the skills required to engage in it, and (3) the semiotic resources used to establish the multiple boundaries of the activity. In *Oa kolo onyanga*, the older children invited and encouraged the focal child to start dancing, which she did by imitating the older children’s actions. The older children regarded these imitations as part of their common dance script. In *Dance for a marriage*, the older children allotted the role of the bride to the focal child. This enabled her to participate in the complex activity at the very center of the dance circle, while the older chil-

Figure 3 The lyric and music score of imitative dance for marriage

dren danced back and forth around the focal child.

The structural features of singing and dancing activities generate divergent participation frameworks that transcend those of ordinary conversations. First, each singing and dancing activity follows certain script, which ensures the progress of the activity and makes the temporal structure of the activity projectable. This helps young children to perceive and to become involved in the sequential organization of the activity. Second, each singing and dancing activity usually comprises multi-modal and multi-party interactions, which results in the complex organization of such activities. This complexity provides young children with a variety of clues for taking part in an activity, even if they do not fully understand its entire structure. Third, singing and dancing activities render space meaningful, i.e., insignificant space is transformed into meaningful *place* through contingent mutual accommodation among the participants. In addition, singing and dancing activities are sensitive to the environment. Children make use of the spaces and materials that are available in the here and now, in accordance with the progression of the activity. This also facilitates playful improvisation, which is often incorporated into the dance climax.

The abovementioned examples also bear some implications for studies on socialization. Caregiver–child interactions among the San foragers are known to contrast with those among agrarian societies. However, we can observe rapid social changes in the caregiver–child interactions among the San. For example, although the San are known to have an extremely close mother–child bond—one that lasts for about 3 or 4 years—the present situation of the !Xun allows even 2-year-old children to participate in a multi-aged child group. In addition, most of the songs chanted by the !Xun children observed in this study had originated among the Owambo agro-pastoralists. Even in this situation, the !Xun continue to maintain their tradition of multi-aged child groups, which are usually outside the supervision of adults, regardless of whether they are agro-pastoralists or foragers. Older children can not only initiate activities among the

child group but also decide the manner of their performance, particularly in the case of singing and dancing activities. Consequently, the !Xun children have incorporated these new aspects into their own way of playing. The children's culture is thus characterized by flexibility and plasticity in the face of a changing environment. The active imitation observed in the children's culture is key to the regeneration and creation of their social organization.

References

- Barnard, A. 1992. *Hunters and herders of Southern Africa: A comparative ethnography of the Khoisan peoples*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Draper, P. 1976. Social and economic constraints on child life among the !Kung. In R. B. Lee & I. DeVore (eds.) *Kalahari hunter-gatherers: Studies of the !Kung San and their neighbors*, pp.199–217. Harvard University Press, MA.
- Konner, M. J. 1976. Maternal care, infant behavior and development among the !Kung. In R. B. Lee & I. DeVore (eds.) *Kalahari hunter-gatherers: Studies of the !Kung San and their neighbors*, pp.218–245. Harvard University Press, MA.
- Konner, M. J. 1977. Infancy among the Kalahari Desert San. In P. H. Leiderman, S. R. Tulkin, & A. Rosenfeld (eds.) *Culture and infancy: Variations in the human experience*, pp.287–328. Academic Press, New York.
- Konner, M. J. 2005. Hunter-gatherer infancy and childhood: The !Kung and others. In B. S. Hewlett & M. E. Lamb (eds.) *Hunter-gatherer childhoods: Evolutionary, developmental, and cultural perspectives*, pp.19–64. Aldine Transaction Publishers, New Brunswick, NJ.
- Takada, A. 2007. Changing locality and ethnic cohesion among the San in Ohangwena, Namibia. In Y. Fujioka & M. Iida (eds.) *ASAFAS Special Paper, No. 9, Globalisation and locality in Southern Africa: Views from local communities*, pp.75–90. Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, Kyoto.
- Takada, A. 2008. Kinship and naming among the Ekoka !Xun. In S. Ermisch (ed.) *Research in Khoisan studies, No.22, Khoisan languages and linguistics: Proceedings of the 2nd international symposium, January 8–12, 2006, Riez/Lez/Kleinwalsertal*, pp.303–322. Rüdiger Köppe Verlag Köln, Cologne.

霊長類の遊びと人類の進化

早 木 仁 成

(神戸学院大学人文学部)

はじめに

遊びは、研究対象とするにはきわめて厄介な存在である。それにはいくつかの理由がある。第一に、遊びを定義することはきわめて難しい。誰もが遊んだ経験があり、直観的には遊びの存在を容易に認めることができる。ところが、それを客観的に定義するとなるときわめて厄介で、遊びと遊びでないものの境界はしばしば曖昧なのである。フランスの哲学者ジャック・アンリオ(1974)によれば、遊びとは行動の形式に関わるものではなく、行為者の主体的な態度に関わるものである。つまり、行為主体である遊び手が「遊びだ」と思えば、何でも遊びになる可能性がある。そうであるなら、行動の形式から遊びを定義することは不可能である。しかし、物言わぬ動物や赤ん坊の遊びを客観的に研究するためには、実際に観察可能な行動をもとにして分析する以外に方法はない。

第二に、人間の遊びを念頭におけば、遊びは多様で、その種類はきわめて多い。その多岐にわたる遊び全体を貫く共通の特徴があるのだろうか。定義のあいまいさもあって、遊びはしばしば明確な目的をもった行動群の補集合、すなわちよくわからない行動をため込んだごみ箱のように扱われてきた。ごみ箱の中身には、捨てられたものであること以外に共通の特徴はない。

第三に、機能の問題がある。遊びは何の役にも立たないように見える行動である。つまり、直接的な機能がみあたらない。それにもかかわらず、多くの教育者や心理学者は遊びに多くの機能を提示している。役に立たないはずのものが、役に立つはずだと考えられているのである。遊びが鳥類やほ乳類などに広くみられるという事実は、それぞれの動物の進化の中で遊びが一定の役割を果たしてきたことの証しでもある。遊びにエネルギーコストや捕食の危険といったコストがかかるとすれば、それを上回る利益、つまり何らかの機能があつたはずだ。遊びには、その遊びが生じた時点での直接的な機

能が見当たらないのであるから、生物学的機能は遅れてやってくる(遅延機能)というのが納得できそうな解である(Fagen, 1981)。遊びが多く種の未成熟個体に特徴的であることも、この考えを支持している。しかし、子どもたちは遊び以外にもさまざまなことをするので、遊びだけを取り出してその機能を科学的に検証することはきわめて困難である。

このように遊びは厄介な存在ではあるが、人間がきわめてよく遊ぶ動物であることは間違いない。ここでは、人間以外の霊長類の遊びを紹介しながら、とくに類人猿にみられる遊びとホモ・サピエンスの遊びとの共通性と相違点を探り、遊びの連続性と不連続性を明らかにする。そうすることで、遊びが人類の進化の中でどのような役割を果たしたのかを検討し、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスとの学習能力の相違と遊びとの関連について考えてみたい。

霊長類の遊び

霊長類の遊びは、その形態的な特徴から、運動遊び(locomotor play, locomotor-rotational play, exercise play)、物を用いた遊び(object play)、激しく取っ組み合う闘争遊び(play-fighting, rough and tumble play)、ごっこ遊びに代表される想像的な遊び(pretend play, fantasy play, imaginative play, symbolic play)などに分けることができる。他にも、未成熟個体による擬似性行動や子守り行動を遊びとみなす研究者もいる。

運動遊びは多くの哺乳類に広くみられる(Burghadt, 2005)。霊長類の子どもは、移動中に突然駆け出したり、とび跳ねたり、一回転したりする。幼児は木に登ったり降りたりを繰り返し、枝に片腕でぶら下がって、腕を軸にして回転したりもする。このような遊びは一人で行うことが多いが、社会的な遊びの中にも出現することもある。このような行動の繰り返しが子供の身体能力の発達に大きく役立つことは、容易に想像できる。

物を用いた遊びは、物の操作(object manipulation)

の一種であるが、それが遊びなのかどうか判断がつかないことも多い。たとえば、ニホンザルの子どもは落ち葉や枯れ枝、小石や、人間が捨てた空き缶や空の袋などを短時間持ち運ぶ。ちょっと目についたから拾ったという程度の行為なのだが、遊びと呼ぶべきなのか悩ましい。嵐山などでは広く「石遊び」が見られるが（Huffman, 1984）、これも遊びなのかについては議論がある（西江,



写真1 草をくわえて遊ぶニホンザル



写真2 レスリングをするニホンザル



写真3 追いかっこをするニホンザル

2002)。日常的に道具使用をおこなうチンパンジーでは、赤ん坊が母親にもらった釣り棒（シロアリやオオアリを釣るための、葉を取り除いた細い小枝や茎）を持ち歩くのを目にする。こういった行動は、遊びというよりも探索行動や、未熟な道具使用と呼ぶ方がよいのかもしれない。一方で、ニホンザルでは物を保持することが社会的な遊びを引き起こすこともよくある（写真1、島田, 2009）。また、チンパンジーでは小石や果実を投げ上げてはキャッチすることを繰り返すというような、いかにも物を用いた遊びらしい遊びも観察される（Goodall, 1986）。

霊長類の社会的な遊びの代表は、レスリングや追いかけっこなどの闘争遊びである。野猿公園などでニホンザルの子どもをしばらく眺めていると、いつの間にか子ザルたちが集まり、枝にぶら下がって絡み合ったり、取っ組み合いのレスリングをしたり（写真2）、広場を走り回って追いかけっこをしたりする光景に出会うだろう（写真3）。年長の子ザルたちの遊びはかなり乱暴で激しく動き回るが、それでも遊んでいる者たちはいかにも楽しそうである。

野生のチンパンジーの社会的な遊びは、ニホンザルに比べると身体が大きいこともあって、動きが緩やかな印象を受けるが、基本はやはりレスリングや追いかけっこなどの闘争遊びである。取っ組み合いをしているチンパンジーにはしばしば口を大きく開けた遊び顔（play face）と呼ばれる表情が見られ（写真4）、組み伏せられた方からは特徴的なあえぎ声（play pant）が聞こえることもある。チンパンジーの追いかけっこは、ニホンザルのように素早く走るのではなく、歩くようなスピードであることが多い。追う者も逃げる者も、追いつくか逃げられずに追いつくか、地面を平手で叩いたりでんぐり返しをしたりすることもある。木の周りなどを2頭でぐるぐると回る



写真4 レスリングをするチンパンジー



写真5 木の周りを2頭でぐるぐると回る遊び

追いかっこでは、逃げる側がいつの間にか追う側になり、追う側がいつの間にか逃げる側になってしまう。この遊びは、両者が同時に逃げる側と追う側の両方の役割を担うという、きわめて興味深い遊びである（写真5）。このような遊びはゴリラにも見られるが、ニホンザルには見られない。

チンパンジーに特徴的に見られる遊びに、2頭が手（や足）を握り合って指を絡ませて遊ぶ「指遊び」（finger wrestling）がある（写真6）。この遊びはしばしばくすぐり合いへと発展する。たいていの霊長類は大人になると遊ばなくなるが、チンパンジーは人間と同様に大人になっても比較的よく遊ぶ。大人の遊びは、通常指遊びのような比較的穏やかな遊びであるが、ときには相手を組み伏せるようなレスリングへとエスカレートすることもある（写真7）。

運動遊びや物遊び、闘争遊びなどは、ヒトの幼児にも類似の遊びがしばしば見られるので、ヒトとヒト以外の霊長類との間には明らかな連続性がある。しかし、想像的な遊びは、言語習得実験などのために研究室で育てられた類人猿の事例（パターンソン、1984；サベッジ＝ランボー、1993）を除けば、ヒト以外の野生霊長類にはほと



写真6 手を握り合って指を絡ませる遊び



写真7 大きな大人の雄（右）もレスリングに興じることがある。

んど見られない。私は1981年にタンザニアのマハレ国立公園で、野生チンパンジーが想像的な遊びをするのを観察している（Hayaki, 1985）。それは、次のようなものであった。

アジは当時8歳と推定される雄である。早くに母親を亡くし、孤児として育った。当時からきわめて人に慣れており、身体を接触するほどに近寄っても平気であった。9月28日の昼前、アジは3頭の大人の雄から5～6m離れた藪の中に一人で寝ころんでいた。アジは最初手元にある草を片手でいじっていたが、突然、近くの枯れ枝を自分の身体に巻きつけて、その枯れ枝と格闘し始めた。枯れ枝は50cm程の長さで、小枝がたくさんついていた。アジはその枯れ枝を押さえつけたり、叩いたり、咬みついたり、転がしたり、マウンティングをする格好で枯れ枝にスラストしたり、まるで他のチンパンジーとレスリングをしているかのように、枯れ枝と遊んでいた。遊びが進むと、アジは興奮した様子でプレイパントと呼ばれる遊びに特徴的な音声を出し始めた。彼は激しくプレイパントを発しながら、大人の雄たちが移動を

開始するまで6分間、枯れ枝とレスリングを続けた。

この私の観察事例のほかに、明らかに想像的な遊びであると思われる報告はわずかしかない。ランガムとピーターソン（1998）はウガンダのキバレの森でカカマという名の、アジと同じ8歳の雄のチンパンジーの事例を報告している。彼は小さな木片を数時間にわたって持ち歩き、その間に昼寝用のベッドを作ってその木片をベッドの中に入れたという。まるで人形遊びをしているかのような事例であるが、ランガムらによれば、その4ヵ月後にもカカマが同様のことをするのを調査助手たちが観察しているという。実は、私もマハレで子どもの雌が直径10 cm ほどの平べったい小石を長時間持ち歩くのを見たことがある（未発表）。さらに、やや特殊なケースかもしれないが、大人のチンパンジーたちが肉食をした後に残りものの毛皮を持ち歩く子どもの姿を時々見かける。食料としての価値がなくなった毛皮を子供たちは長時間持ち歩くのである。

その他に、中村（2009）はギニアのボッソウで、10歳の雄のチンパンジーが自分の左足をターゲットにして、咬みついたり、手で地面に押し付けたり、叩いたりして遊ぶのを報告している。10分ほどプレイパントをしながら遊んでいたという。この事例では、遊びの対象は外界の物体ではなく自分自身の身体の一部であるが、その様子は枝と遊ぶアジの姿とよく似ている。

きわめて報告事例が少ないので一般化には慎重であるべきかもしれないが、私には、物をその物とは異なる何か別のものにみなす能力が野生チンパンジーにあるように思われる。それは、彼らに道具を製作する能力があることと無関係ではないだろう。たとえば、有名なシロアリ釣りを考えてみよう。彼らは、身の回りにあるさまざまな植物の中からいくつかの特定の種類の植物を適切に選んで枝や茎、葉を切り取り、不要な部分を切り取る加工をして釣り棒を作る。その作業には、その選ばれた植物種の枝や茎の中に枝や茎とは異なる物（＝道具）を見出す能力が必要だろう。こうしてみると、ヒトの想像的な遊びの萌芽が野生チンパンジーにあるとってよいのではないだろうか。

遊びであることのコミュニケーション

さて、前に述べたように、遊びが遊ぶ主体の態度にかかわるものであり、行動の形式ではないのだとすれば、社会的な遊びはどのようにして成立するのであろうか。ひとり遊びなら、遊んでいる本人が遊びだと思っていれば、それは遊びだと納得することもできる（ただし、言葉のない霊長類の場合は確かめる術はない）。しかし、

誰かと一緒に遊ぶ社会的な遊びの場合には、遊んでいる者たちは今自分たちがしていることは遊びなのだということをお互いに了解していなければ成立しない。この問題を最初に提起したのは、人類学者のグレゴリー・ベイトソンである（ベイトソン、1986）。

ベイトソンによれば、遊びとは、特定の行動を示すのではなく、行動のコンテキストを示す言葉である。動物の行動は通常直接的にそのコンテキストを指し示している。たとえば、突進し、叩く、蹴る、咬む、追う、逃げるといった行動は敵対的なコンテキストを直接的に示しているし、毛づくろいをするという行動は親和的なコンテキストを指し示している。一方、哺乳類に広くみられる闘争遊びにおいても、叩く、蹴る、咬む、追う、逃げるといった、通常敵対的な喧嘩のコンテキストで用いられる行動要素が繰り返し出現する。これらの行動は本来敵対的な意図を相手に伝えるはずなのに、遊びの場合にはそうならない。したがって、乱暴に遊んでいる者たちは、何らかの方法で自分たちが今おこなっている喧嘩のような行動は「喧嘩ではない」ということを相手に伝える必要がある。そうでなければ本当に喧嘩になってしまう。つまり、「これは遊びだ」というメッセージの交換が必要なのである。このようなコミュニケーションをベイトソンはコミュニケーションのためのコミュニケーションという意味でメタ・コミュニケーションと呼んだ。

「これは遊びだ」というメッセージは、霊長類の闘争遊びの場合には、いくつかの方法で伝えられている。もっとも明瞭なものは、遊びのときだけに見られる特別な行動、遊び顔や遊び声である。これらの表情や音声をともなう行動は遊びであると了解できるので、遊びのためのシグナル（play signals あるいは play markers）とってよい。ただし、遊んでいるときにはいつもそのような特別なシグナルが生じるかというと、そうでもない。

メタ・コミュニケーションという点では、遊びの中で生じる行動がさまざまに変形しているということのほうが重要だろう。たとえば、わざと千鳥足でふらふらと歩いたり、大げさな身振りで相手を叩いたり、蹴ったりする。これらは、元の行動に修飾が加えられ、強さやタイミング、リズムが変えられていることを示している。叩く、蹴る、咬む、追う、逃げるといった本来攻撃的な行動も、闘争遊びの中では大きく変形している。叩いたり蹴ったりする動作は喧嘩の時よりもずっと大げさで誇張されているし、咬む行動も遊びの中では相手を傷つけずに咬むふりをしているだけである（つまり口をしっかりと閉じることはない）。セルフハンディキャッピングと呼ばれる強者が弱者に対して力を抑制するという現象も、行動の変形と見ることができる。遊びの中の行動が喧嘩

のコンテキストからの借り物であるとしても、実際の行動は喧嘩のときの行動から大きく変形しているのである。このような行動の変形が、自分たちが今行っていることは「喧嘩ではなく、遊びなのだ」ということを常時伝えているのである。

「まね」と「ふり」

闘争遊びをしている霊長類たちは、その遊びの中で喧嘩の時の行動を借用しているが、もちろん喧嘩をしているわけではない。喧嘩の「まね」をしているのでもないし、喧嘩の「ふり」をしているのでもない。相手に咬まれないようにしながら相手に咬みつくという志向性はあるが、おそらく彼らは自分たちがやっていることが表面的にでも喧嘩とかかわりがあるなどとはまったく感じていないだろう。彼らは、相手の動作や行動に同期的に回答しながら、闘争遊びと私たちが呼ぶ相互行為を繰り返しているのである。

闘争遊びは「闘争ごっこ」や「戦争ごっこ」ではない。ごっこ遊びでは、遊んでいる者たちはその遊びの中で、「敵を倒し」たり、「悪者を懲らしめ」たりすることができるが、闘争遊びにはそのような勝敗のようなものはない。いや、むしろ勝敗を避けているといってもよい。なぜなら、勝敗が決まれば遊びは終わってしまうのだから。

人間の子供たちの遊びでは、ある時期からごっこ遊びのような想像的な遊びが爆発的に増えるが、人間以外の霊長類では類人猿にその萌芽が見えるだけである。ただし、ごっこ遊びを可能にする「まねる」能力や「ふりをする」能力が類人猿にないというわけではない。

「猿真似」という言葉があるように、サルはまねをすることが得意である。たとえば、サルは数100種類の動植物を食べるが、子どもは親や仲間が食べているのを見て、食べ物の種類や食べられる部位、食べ方などを学習していると思われる。このような社会的学習のメカニズムについては、比較心理学者たちの間でさまざまな議論がなされてきた。ラッソン(2004)によれば、霊長類の社会的学習のメカニズムとして、プライミングと模倣(真の模倣)が考えられるという。プライミングとは、他者の特定の行動を観察することで、観察者の記憶からその行動に関する記憶が呼び出され、それが当該学習における問題解決の鍵となるというものである。プライミングには、従来別のメカニズムとされてきた刺激強調(他者がおこなう行為やその場所が観察者の注意を惹きつけて、他者と同じ行動をとりやすくなる)、伝染(他者の情緒的反応が観察者に類似の反応を引き起こす)、

エミュレーション(目的模倣。他者の行動の目標や成果に観察者の注意をひきつける)、反応促進(他者の学習された行動が観察者に類似の行動を引き起こす)といった現象が含まれる。プライミングは学習そのものを引き起こすのではなく、学習の方向を決めるのだという。一方、模倣の場合には、学習されるものは単に方向づけや成果だけではなく、試行錯誤的な実践なしに行動の形式がコピーされる。つまり、観察者は他者の行動の目標と手段の両方を理解していなければならないことになる。

比較心理学者たちによれば、サルの「猿真似」は「真の模倣」ではないという(トマセロ, 2006)。真の模倣の場合には、他者や動物の身体の動きをまねるだけでなく、動きの背景にある意図(目的と手段の両方)を理解していなければならない。そのような真の模倣はニホンザルのような一般のサルには見られず、チンパンジーなどに稀に見られるだけだという。たしかに、野生チンパンジーを観察していてこれぞ模倣という場面に出くわすことはあまりない。他者と同じ行動をしていても、それが真の模倣であるかどうかを確かめることがきわめて困難だからである。しかし、チンパンジーはよく仲間のしぐさを熱心に、そして無遠慮に覗き込む。珍しいものを食べている場合や、道具を使用しているときなどにもよくみられる。観察者が気づかないだけで、後で模倣をしていることもよくあるのかもしれない。模倣については、観察が少ないから稀だとはいえないように思われる。ドゥ・ヴァール(2010)は、比較心理学者たちによる類人猿の模倣実験の成績が悪いのは、類人猿にとってはモデルとしにくい人間の行動を模倣することを強いているためだと批判して、飼育下の類人猿が類人猿の行動を模倣する例を多数あげている。

他者の行為をまねるという現象には、多くの学習メカニズムがかかわっている。真の模倣を得意とする我々ヒトでさえ、模倣以外のメカニズムを利用して他者の行為と類似の行為をすることはしばしばある。よくわからずに他者の行為をまねることで、その真の意図に気づくことさえよくあることだ。近くの他者と同じ行為をする、つまり同調するというレベルでは、魚類の群れの中のそれぞれの個体の動きなどを想像すれば、その進化史的な起源はるか昔にさかのぼることができるだろう。真の模倣という高度な学習メカニズムも、そのような進化史的基盤の上に成立したに違いない。

「ふり」となると、屋外での観察によって見つけることはさらに難しい。「まね」ならモデルとの行動的な類似性を見つければよいが、「ふり」の場合にはその心的状態を推し量らなければならないからである。西田

(1981) は離乳期の子どものチンパンジーが母親の気を惹くためにわざわざ人間の観察者に近づき、攻撃されたようなふりをして大げさに悲鳴をあげて母親に抱かれるという行動を報告している。このとき、子どもはパニックに陥ったように大げさに泣き叫んでいるが、実際には母親の様子を確かめる余裕があり、パニックになった「ふり」をしているのだ。ドゥ・ヴァール (1982) が飼育下のチンパンジー集団で観察した事例はよく知られている。優位な雄に足を咬まれた雄のチンパンジーが長い間足を引きずって歩いていたのだが、その後よく注意して観察していると、その雄は自分を咬んだ雄が近くにいるときだけ足を引きずり、近くにいないときには普通に歩いていたという。つまり、怪我が十分に治癒していない「ふり」をしていたというのである。このような行動は、対象個体の社会関係やその背景を熟知したうえで注意深く観察しなければ発見できない。サベージ＝ランボーとマクドナルド (2004) はシンボル使用を学習した類人猿の「ふり」に関する多くの事例をあげている。

「ふり」をすることができるということは、物をその物とは異なる別の物とみなすことができるだけでなく、ふりをしている者にとってふりをしている自分は本当の自分とは別物であるということを知り、また、ふりをしている自分の姿を見た他者が自分について誤った理解をするということを知っていなければならないように思われる。ところが、ヒトの幼児は2歳ぐらいから「ふり」が頻繁に出現するごっこ遊びに没頭するにもかかわらず、虚構性を明示的に自覚したり、誤信念を理解するようになるのは5歳頃になってからだという (加用, 1998; ホワイットン, 2004)。つまり、「ふり」をしているからといって、「ふり」という行為に内在する現実と非現実の二重性を自覚しているとは限らないようなのである。大型類人猿にみられる「ふり」行為はまだ萌芽的なものであり、彼らが「ふり」の虚構性を自覚しながら「ふり」をしているとはかぎらないようである。

遊びと人類の進化

人類の600～700万年にわたる歴史からみれば、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの交替劇は、ほんの最近の出来事にすぎない。最初期の人類であるサヘラントロプスやアルディピテクスは森林で生活していたらしいが、アウストラロピテクスの時代にはより乾燥した場所に進出したようである。彼らは直立二足歩行を行っていたが、脳容量はチンパンジーやゴリラとほぼ同じ程度であり、知的能力が急拡大したとは考えにくい。したがって、ホモ属出現以前の人類は、「直立二足歩行をする

大型類人猿」というイメージでそれほど間違っていないと思われる。もちろん、彼らも子ども時代には野生チンパンジーと同様に闘争遊びに興じ、ときには想像的な遊びもしたことだろう。萌芽的ではあっても模倣や「ふり」をする能力をもち、いくらかの道具製作もしていたに違いない。しかし、400～500万年もの間、彼らは現在的大型類人猿たちとそれほど大きく変わらない生活を送っていたと思われる。

知能や学習能力の進化という点では、ホモ属出現以降の200万年の間にどのようなプロセスでそれが進行したのかを明らかにすることがきわめて重要である。ミズン (2006) は、初期ホミニド (ホモ属出現以前の人類) のコミュニケーション体系を全体的、多様式的、操作的、音楽的 (Holistic multi-modal manipulative musical) なものであったと想定し、初期人類 (ホモ・エルガスターやエレクトスなど) の時代にミメシス的な (mimetic) もの、つまり「まね」をするを取り入れたとしている。ミメシスには模写や模倣が含まれるだけでなく、意図的な表象の創案をとまなっているという。ミズンによれば、このようなコミュニケーション体系はネアンデルタール人に引き継がれ、高次の全体的・操作的・多様式的・音楽的・ミメシスのコミュニケーション体系へ発展した。一方、ホモ・サピエンスはこのようなコミュニケーション体系の全体フレーズを分節化し、感情表出に特化した音楽的なコミュニケーションと情報伝達に特化した言語によるコミュニケーションに分化させたというのである。

ところで、「遊び」は鳥類や哺乳類に広くみられることから、そのはるか昔に出現し、進化の中で一定の役割を果たしてきたはずである。哺乳類の中でも霊長類はよく遊ぶし、霊長類の中でも類人猿はよく遊ぶ。アウストラロピテクスやホモ・エレクトス、そしてもちろんネアンデルタール人もよく遊んだに違いない。遊びが交替劇に何らかの役割を果たしたとすれば、それは遊びの一般的な機能ではなく、それまでのさまざまな進化が蓄積したホモ・サピエンスという生き物に特異的に働きかけた特別の機能であったに違いない。

大型類人猿の遊びとホモ・サピエンスの遊びの間にみられる大きな溝は、ごっこ遊びの爆発的發展にあった。ヒトの幼児は、「まね」をし「ふり」をするだけでなく、その「まね」や「ふり」を他者と共有することによって遊びの範囲を飛躍的に増大させたのである。それが意味するものは、ホモ属の進化の中で「まね」や「ふり」をする能力およびそれを理解する能力が大きく発展したということであろう。一方、現代人の幼児は2歳ごろからごっこ遊びに没頭できるにもかかわらず、現実と非現実

を区別する虚構性を明示的に自覚できるのは5歳頃になってからである。この数年間にわたって幼児が虚構性の自覚がないままにごっこ遊びに熱中するという点に、知能の進化プロセスを考える上でのヒントがあるように思われる。つまり、言語のような象徴操作能力が十分に進化する前に「まね」や「ふり」を用いたミメシス的能力が進化した可能性が高いということである。

麻生（1998）によれば、ごっこ遊びの中の「ふり」行為はコミュニケーションとしてのふりから動作の表象としてのふり、記号的行為としてのふりを経て、虚構性を自覚した象徴行為としてのふりへと段階的に発達するという。最初の2種類のふりは野生チンパンジーの遊びの中にも見られるようである。たとえば、木のまわりをぐるぐる回る遊びにはコミュニケーションとしてのふりの要素が入っていそうである。ぐるぐる回りはきわめて形式性が強く、追う方も逃げる方もすぐに追いつき追いつかれるようなゆっくりとしたスピードで木の周りを回る。そこでは、両者は追う「ふり」、逃げる「ふり」をしながら、互いに相手とのかかわりあい（コミュニケーション）を楽しんでいるように見える。また、アジの想像的な遊びは動作の表象としてのふりに分類できそうである。アジは明らかに枝とのレスリングという動作を楽しんでいた。一方、残りの2種類のふりは野生チンパンジーには見られないといってよいだろう。記号的行為としてのふりは、ミズン（2006）のいうミメシスのコミュニケーションに近い。最後の象徴行為としてのふりは、虚構性を自覚しながらふりを楽しむというホモ・サピエンスに独特のふりと見ることができる。

ミズン（2006）は、ホモ・サピエンスの創造性の源を言語が進化したことにともなう認知的流動性（ミズン、1998）の獲得においている。認知的流動性とは、社会的知能や博物学的知能、技術的知能といった個々の知能の考え方や知識の蓄えを一つにまとめ、それぞれの知能に特化した心では不可能な新しい種類の思考を生み出す能力をいう。つまり、異なる系列の知識は通常独自に洗練されてゆき、それらが融合することはないのだが、想像的な知識が生み出される時にはそれらの異なる系列の知識が組み合わせられ統合されるということである。私は、この問題についてはもう少し異なる側面から遊びとの関連性を指摘しておきたい。

遊びは、ベイトソンが言うように行動そのものではなく一つのコンテキストである。そのコンテキストの中で繰り広げられる行動は、しばしば他のさまざまなコンテキストからの借りものであり、異なるコンテキストを指し示すはずの行動が多少変形しながらも遊びの中で結合され融合する。遊びの中では、さまざまな行動が遊びと

いうコンテキスト（参照枠）をとおして解釈しなおされるのである。まねやふりをともなうごっこ遊びでは、借用される現実のコンテキストが格段に増え、遊びの自由度が飛躍的に高まるだろう。

ミズンのいう個々の知能は、何らかの問題解決の場に立たされた者が参照すべきコンテキストに置き換えることができる。たとえば、個体間の軋轢を解消しようとする者にとって参照するべきは彼らの社会的なコンテキストであり、そこではそのコンテキストが指し示す社会的知識が利用されるのである。認知的流動性とは、さまざまなコンテキストを結合し、統合することによって、当該のコンテキストとは異なるコンテキストにおける知識や解決法を利用できるようにすることだろう。

遊びの中で見られるさまざまなコンテキストから借用された行動の結合と融合は、認知的流動性の実践と結果的には同じ効果をもつかもしれない。遊びがしばしば自由に創造的であるとされるのはそのためであろう。しかし、遊んでいる者たちは、何か問題解決の目的をもって遊んでいるわけではない。遊びにみられる異なるコンテキストの結合は、遊び手が楽しむためになされるのであり、その結合によって現実世界での新しい問題解決法が発見されるといったことはかならずしも望めない。たまたま遊びの中で現実世界でのうまい解決法が実践されたとしても、遊び手たちはそのことに気づきもしないはずだ。遊びの創造性に驚くのは大人たちであって、遊んでいる子どもたちではないのである。

創造的知能が発揮されるためには、異なるコンテキストを結合するだけでなく、おそらくそれらを統合することが必要である。いわば、コンテキストの上からそのコンテキストを眺めるといったことができなければならない。ヒト以外の霊長類やヒトの幼児たちにとって、遊びは遊びという現実であって、現実から遊離した虚構ではない。遊びをその遊びというコンテキストの上から眺めることによって初めてその虚構性に気づくことができるのである。

もし、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの交替劇の主要因が両者の学習能力の違いにあり、それが創造的な知能の差であるとするなら、ネアンデルタール人はホモ・サピエンスの幼児と同じくごっこの虚構性を明示的に自覚することができない段階、パントマイムのような記号的表象の段階に留まっていたと想定することができるかもしれない。そして、ホモ・サピエンスは遊びの虚構性を自覚しながらも遊び続ける奇妙な種といえるかもしれない。（ホモ・サピエンスの大人たちは「ただの遊びさ」などと多少自嘲気味に言いながら、さまざまなことを楽しんでいる。）

定義も機能も曖昧な遊びという厄介な現象は、創造的知能の進化を考える上でさまざまなヒントを与えてくれる。交替劇を理解するためには、さらに狩猟採集社会という人類進化の舞台となった環境の中で遊びがどのように発達するのかを探ることが必要であろう。これまでの子どもに関する研究は近代化された社会の中でのものに大きく偏っており、近代化が子どもの発達にどのような影響を与えているのかはよくわかっていない。亀井(2010)はアフリカの狩猟採集民バカの子どもの豊かな遊びを網羅的に紹介し、子どもたちが遊びを自律的に創造する能力に注目している。もしホモ・サピエンスだけが創造的知能を進化させることができたのだとすれば、狩猟採集社会の中に子どもの創造性を促進する仕掛けが埋め込まれているかもしれない。

参考文献

- アンリオ, J. (1974)「遊び—遊ぶ主体の現象学へ—」, 佐藤信夫訳, 白水社
- 麻生武 (1998)「なぜ大人は子どもと遊ぶのか」(麻生武, 綿巻徹編「遊びという謎」第2章), ミネルヴァ書房。
- ベイトソン, G. (1986)「精神の生態学」, 佐藤良明訳, 思索社
- Burghardt, G. M. (2005) *The Genesis of Animal Play: Testing the Limits*. The MIT Press, Massachusetts.
- ドゥ・ヴァール, F. (1984)「政治をするサル —チンパンジーの権力と性」, 西田利貞訳, どうぶつ社。
- ドゥ・ヴァール, F. (2010)「共感の時代へ—動物行動学が教えてくれること」, 柴田裕之訳伊國屋書店。
- Fagen, R. M. (1981) *Animal Play Behavior*. Oxford University Press, New York.
- Goodall, J. (1986) *The Chimpanzees of Gombe: Patterns of Behavior*. Harvard University Press, Cambridge.
- Hayaki, H. (1985) Social play of juvenile and adolescent chimpanzees in the Mahale Mountains National Park, Tanzania. *Primates*, 26: 343–360.
- Huffman, M. A. (1984) Stone-play of *Macaca fuscata* in Arashi-

- yama B troop: Transmission of a non-adaptive behavior. *J. of Human Evolution*, 13(8): 725–735.
- 亀井伸孝 (2010)「森の小さな〈ハンター〉たち —狩猟採集民の子どもの民族誌」(アジア・アフリカ言語文化叢書49), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 加用文男 (1998)「遊びに生きる子どもの多重世界」(麻生武, 綿巻徹編「遊びという謎」第2章), ミネルヴァ書房。
- ミズン, S. (1998)「心の先史時代」, 松浦俊輔・牧野美佐緒訳, 青土社。
- ミズン, S. (2006)「歌うネアンデルタール —音楽と言語からみるヒトの進化」, 熊谷淳子訳, 早川書房。
- 中村美知夫 (2009)「チンパンジー ことばのない彼らが語ること」, 中公新書
- 西田利貞 (1981)「野生チンパンジー観察記」, 中公新書。
- 西江仁徳 (2002)「嵐山のニホンザルはなぜ「石遊び」をするのか?—「石遊び」行動の近接要因を探る—」, 霊長類研究 18(2): 225–232。
- パターンソン, F. & リンデン, E. (1984)「ココ, お話しよう」(都守淳夫訳), どうぶつ社。
- ランガム, R. & ピーターソン, D. (1998)「男の凶暴性はどこからきたか」, 山下篤子訳, 三田出版会
- ラッソン, A. E. (2004)「他者の専門的技術の利用」(ホワイトウン&バーン編「マキャベリの知性と心の理論の進化論Ⅱ」(友永, 小田, 平田, 藤田監訳) ナカニシヤ出版。
- サベッジ=ランボー, S. (1993)「カンジー言葉を持った天才ザル」(加地永都子訳), NHK 出版。
- サベッジ=ランボー, S. & マクドナルド, K. (2004)「シンボルを使用する類人猿の欺きと社会的操作」(バーン&ホワイトウン編「マキャベリの知性と心の理論の進化論」(藤田, 山下, 友永監訳) ナカニシヤ出版。
- 島田将喜 (2009)「ニホンザルの遊びの民族誌」(亀井伸孝編「遊びの人類学」), 昭和堂。
- トマセロ, M. (2006)「心とことばの起源を探る」(大堀・中澤・西村・本多訳), 勁草書房。
- ホワイトウン, A. (2004)「マキャベリの読心者」(ホワイトウン&バーン編「マキャベリの知性と心の理論の進化論Ⅱ」(友永, 小田, 平田, 藤田監訳) ナカニシヤ出版。

バカ・ピグミーの狩猟採集活動における 子どもの役割

林 耕 次

(神戸学院大学人間文化学研究科)
(ポストドクトラルフェロー)

はじめに

アフリカ熱帯雨林地域に暮らすピグミー系狩猟採集民バカの日常生活において、季節に応じて行われている狩猟採集活動の様子を通じ、子どもがどのような役割を担っているのかを検討する。すなわち、定住化が進み、学校教育が普及するなどの状況下において、「狩猟採集民らしい」活動・行動の分析を通じた知識や技術の伝達、あるいは学習に関する実践の機会について探ることを試みる。

1. 調査地の概要

1-1. 調査地の概要

熱帯アフリカ中央部、コンゴ盆地の西部に生きるピグミー系狩猟採集民バカは、20世紀半ばより焼畑農耕を受容し定住化が進んだ「ピグミー」として知られている。農耕が現在のように日常化する以前は、隣接に居住するバンツー系農耕民との間で相互依存的な「共生関係」を結び、獣肉や蜂蜜など狩猟採集の産物と、バナナやキャッサバなど焼畑作物の交換により生計が成り立っていた。しかし、現在では両者の関係において、バカの人びとは自らの畑にかかる労働のほかに農耕民の焼畑開墾やプランテーション維持に必要な労働力を日常的に提供している。その報酬として農耕民は、現金のほか、焼畑作物の一部や、自家製の酒などを労働報酬として支給するという形に変化している（林 2000）。こうした状況ではあるものの、季節に応じて狩猟や採集、漁撈を目的とした森での滞在を前提とした活動も依然として行われている。そこでは、定住集落での日常とは異なる「別の」生業活動が観察される（Hayashi 2008）。子どもの行動をみてもそれは同様である。定住集落では学校に通い、また、定住集落や焼畑で手伝う様子を観察されるが、森での暮らしのなかでは、そうした定住集落での様子とは異なる子どもによる生業活動というものが存在している。

本稿では、1998年以来、約10回におよぶ現地調査によるいくつかの観察事例を通じて、子どもたちによる狩猟採集活動を通じた生業活動への取り組み、あるいは関わりかたについて検討する。

1-2. 子どもによる生業活動

筆者は2005年以降の現地調査で、成人を対象とした個体追跡をたびたび行ってきた。これらは、定住集落と森のキャンプを舞台に、異なる環境・季節でバカ・ピグミーの行動分析を比較検討する試みである。本稿では、過去に行った個体追跡資料の分析方法を手がかりとして、子どもたちの活動を分類する。

狩猟活動は、子どもの場合でも成人同様に男性による活動である。子どもによる狩猟への取り組みは、「遊び」の要素が伺える一方で、実際に「弓矢猟」「跳ね罠猟」の成果がみられる。採集活動においては、多様な関わりが挙げられる。「ヤムイモの採集」「堅果の採集」「キノコや食用昆虫の採集」に直接関わるほか、森で狩猟・採集したこれらの産物を「運搬」する要因としても子どもの果たす役割は大きい。また漁撈活動は、狩猟や採集活動以上に「遊び」の要素が強いという印象がある。成人の男女同様、男性は「釣り」、女性は「掻い出し漁」に楽しみながら勤しむ姿がみられる。その他、定住集落内でも観察されるが、狩猟採集、漁撈以外の活動で、いわゆる「家事」に該当する活動として、「薪運び」「水汲み」「調理（補助）」などが挙げられる。

2. 子どもの活動内容と「学習の場」についての試論

2-1. 狩猟

定住集落で頻繁に見かけることができるのは、5歳～10歳程度の子どもたちによる、弓矢猟である。簡単な森の素材を自ら加工して、草葉の陰に潜む野ねずみを狩猟対象とする。成人男性のあいだでは行われないう「狩猟活動」である弓矢猟は、子どもたちにとっては食料獲得の生業活動というより「遊び」のひとつとしての要素が

強いと思われる。しかし、狩猟の結果得た獲物（野ねずみ）は、その後、自ら解体・調理をして、おやつとして、あるいは食事の素材として食用とされる。

10歳以上の年長者のあいだでは、ボウガンを手に行っているのをみたことがある。樹上性のサルや鳥などを狩猟の対象とするようであるが、これまでにボウガンによる狩猟の成功例は観察したことがない。

成人男性のあいだで最も頻繁に行われる狩猟活動は、ワイヤーを用いた跳ね罠である。子どもも大人に混ざって森に自らの罠を仕掛けることがあるが、実際に獲物が捕れるような立派な罠を作るのは7～8歳以降になってからだろう。それより年少の子どもたちによる模倣の「遊び」として、キャンプの周りでワイヤーを用いない小さな跳ね罠を作る様子がたびたび観察された。こうした模倣を繰り返すことにより、徐々に本格的な罠作りの技術を取得していくものだと考えられる。

また、狩猟活動の一環として、森を歩く際に成人の男性は槍を携帯することが多い。しかし、子どもたちは槍を持たない。一人前の男性として認められる証として、自らの槍を所持するものであるという話を聞いたことがある。銃猟もバカのあいだでは一般的な狩猟方法の一つであるが、危険を伴う銃の扱いに子どもが関わるということはない。しかし、15歳程度の青年のなかには、親しい農耕民から銃を借りて委託猟を行うものがある。サルや森林性のカモシカであるダイカー類を仕留めるのである。槍猟や銃猟では、自らその道具を手にしなくとも、年長者に帯同して森を歩き、その行動や技術を学んでいくものと考えられる。これは、子どもに限らず成人の場合でも同様のことがいえ、狩猟の知識と経験を積むことで、社会的にも認められていく存在になるのである。

2-2. 採集

とくに道具を必要としない採集活動では、子どもたちが関わる場面が多くみられる。森での採集活動で、多くの時間が費やされるヤマイモの採集では、先端を尖らせた木の棒さえあれば、余程の固い地層ではない限り大人と同じように作業に加わる。しかし、単純な作業といっても、重労働であるヤマイモの採集に年少の子どもたちが長時間関わることは稀である。比較的浅い地中に埋まっている、ある種のヤマイモをはじめとする食用根茎類は、それほど重労働ではないために分量の多少に関わらず採集してくる様子がみられる。これに類似する活動として、定住集落の周辺、あるいは焼畑の一角で、サツマイモをおやつ代わりに採集（収穫）してくる様子が小さな子どもの間でも見受けられる。時には短い山刀（鉦）

を手にして、土を掘り起こすのである。

森での採集活動で、ヤマイモ採集と並んで頻繁、かつ多くの時間を費やされるのが堅果の採集である。季節やキャンプの立地条件によって堅果の種類はいくつかあるが、いずれも果実の種子部分を割り、中のナッツ部分を食用とする。地面に落ちた果実を採集する作業は容易であり、小さな子どもたちも参加する。ただし、種子を割る作業は、ある種のコツが必要とされる。刃物を手元で扱う作業であり、小さい子どもは行うことがほとんどない。

文字通りの採集活動として、ヤマイモ採集や堅果採集のように、採集時、あるいは採集後の作業を多く伴わない活動に、子どもは大きく関わっているといえよう。キノコや食用の昆虫（蛾の幼虫など）採集では、森を歩いているときに偶発的に見つけると、それを持ち帰る。ただし、それらが食用であることを自ら認識している年齢、あるいは個体差については検討の余地があるだろう。

2-3. 漁撈

狩猟活動同様に、子どもの間でも性差がはっきりしているのが漁撈活動である。

男性が行う漁撈活動は「釣り」と「刺し網漁」が一般的である。子どもたちは釣り針と釣り糸さえ入手すると、竿（適当な灌木）とおもり（小石）を用意して小川に赴く。まずは川の土手で土を掘り起こし、魚の餌となるミミズを集める。その後、釣り場のポイントを変えながら小川で釣りをを行う。対象となるものは小魚が多い。川辺で蟹などを捕まえることもある。対して、女性の漁撈はおもに「掻い出し漁」といわれる小川を堰き止めて行われる協働のうえに成り立つ漁である。倒木や川辺の土を切り（掘り）出したもので水の流れを止める作業は重労働である。そのため、子どもたちだけで行うというのは稀で、大人に混ざって手伝いを行うという意味合いが強い。堰き止めた後に、下流側で点在する水たまりの水を掻い出して、そこに干上がった小魚や小エビ、蟹などを採集する際に子どもたちも積極的に関わる。年長者であれば、干上がった川辺の土手を山刀で掘り起こしたり、穴場に手をつっ込んだりしながら、中に潜むナマズなどの捕獲に勤しむこともある。

いずれの「釣り」「掻い出し漁」ともに、数名で連れ立って行う活動であり、娯楽性を伴う活動であることが伺える。男性の狩猟活動同様に、「生業」と「遊び」の二面性をもつ行動として注目できる。

2-4. 家事

上記した狩猟、採集、漁撈以外の活動として、家事の一部として捉えられる「薪運び」「水汲み」「調理（補助）」には、定住集落や森のキャンプの両方で子どもたちも日常的に関わっている。いずれも年少者の場合は、親の手伝いとして補助的な役割という意味外が強いが、年長者ともなると、薪取りや水汲みを担うことが一家の中での重要な役割である場合もある。

調理については、子どもが自ら積極的に行う場面として、先に記したような野ねずみのような小動物を捕まえた際に、内臓を取り出し、熾火で毛を焼いたのちにおやつ、あるいは晩の食事のおかずとして調理にたずさわる場合がある。一般的な食事の際のメインとなる調理（※薪の火をおこし、主食である作物やヤムイモをゆでる。あるいは副食となる料理を主に受け持つなど）に直接的に関わることは稀であるが、副次的な役割や補佐は日常的にみられる行動風景である。その一つの例として、定住集落においても森でのキャンプ生活においても顕著にみられる光景として、配膳した食物を他の家やキャンプに運ぶ役割を子どもが担っていることが多い。こうした行動も、家事、あるいは調理の一部と捉えるのであれば、子どもの果たす役割は大きいといえるであろう。

2-5. その他の活動

食事の配膳に、子どもがその役割を担うことが顕著であることは述べたが、物資の「運搬」、例えば食事時のほかに、森でとれた野生動物や採集した産物、水や薪などを含めて子どもが少なからず関わっている事例はよく見受けられる。このように、ある生業活動の連続として、一部の行為に関わる場面は多い。両義的な意味において「生業活動」と「遊び」、あるいは「社会的な役割」として子どもが果たす役割は多彩である。育児行為に関しても、「おままごと」的な遊びを子ども（とくに女性）のあいだでみられる一方で、実際的な意味合いとして乳児や幼児の世話を担うことが年少以上の子どものあいだで、頻繁にみられる。

3. 考察

狩猟、採集、漁撈活動を中心に、概説ながら生業における子どもの行動や役割について述べてきた。以上は、実際に筆者が観察した事例に基づいた記述であるが、体系的にまとめられたものであるとはいえない。バカ・ピグミーの遊びや子どもの生業への関わり方については、同 A 02 班の班員でもある亀井氏による研究、あるいは論文や著書に詳しい（亀井 2010）。本稿では、とりわ

け森での生業活動における子どもの関わり方や役割について重きを置いたが、定住集落における子どもの活動や役割分担についても今後、詳細に記す必要があると感じている。他方で、学校教育の影響により、「狩猟採集民的」な知識や技術の伝達、あるいは学びの場がどのような状況にあるのかについては、引き続き注目していきたい。

4. 2010 年度の予備調査報告と今後の研究計画

これまでの研究実績を踏まえた上で、2011 年 2 月 24 日から 3 月 10 日まで、筆者は A 02 班の研究代表者である寺嶋教授とカメルーン共和国に滞在し、そのうち 3 月 2 日から 7 日までのあいだ東部州にバカ・ピグミーの集落を訪問した。2011 年度以降の現地本調査を見込んだ予備調査として、現地での社会情勢や学校教育の現状なども踏まえてのフィールドワークである。おもに訪れた Mindourou（ミンドウル）界隈と Lomie（ロミエ）界隈は、筆者がこれまでに訪れてた調査地とは離れた地域であり、隣接するバントゥー系農耕民の影響や、微妙な自然環境の違い、あるいは、市場経済との関わり方や学校教育への取り組み方で大きな違いが見られた。予備調査における記録は以下の通りである。

4-1. Mindourou

ミッション（キリスト教）の影響が強く、その援助を受けた学校が点在するほか、「森の学校」と名付けられたバカ・ピグミーの子どもたちを対象とした学校もある。著者は 2010 年 9 月に、周辺の集落を訪れているが、大別して 4 つの地区に分かれたなかで、今回訪れたのは、ミンドウルから最も近いバカの集落 Tuni と、Kobi という交差点に向かう道路の中間点にある Ndongongo であった。前者は家が 5 軒ほどのこじんまりとした集落である。当日は金曜日の夕方であったために、子どもたちは数キロ離れた Etom という集落の脇にある「森の学校」から戻っていたようであった。また、Ndongongo は、昨年 9 月に訪れた際には、森に約 1 キロメートル歩いた場所に設置されたキャンプ地にまとまって人々は滞在していた。周辺の焼畑の開墾とあわせて、森での狩猟採集活動を行うのに都合がよいからという理由であった。今回の訪問時には、前回とは異なり道路沿いの集落に落ち着いており、周辺の焼畑の世話をしているとのことであった。この集落からは学校のある場所までは遠く、子どもたちは日常的に学校に通っているという印象は薄い。

Kobi の交差点から東に 1 キロほど向かったところに、

バントゥー系農耕民の集落がある。集落の奥には二つの立派な教室が建っており、バントゥー系農耕民とバカ・ピグミーの子どもたちの学校がある。ここには、教育を受けたバカの教師もあり、授業風景の観察を今後行うことを計画している。

4-2. Lomie

東部州でも中核をなす街であるロミエから、約 100 キロ南下した最南端の街 Ngoila の先に位置する集落 Maban と、ロミエの近郊に位置する Susok, Ajela, Payo の集落を訪れた。Maban は、比較的大きな町である Ngoila に近いものの、一見すると街の暮らしとはかけ離れた雰囲気が漂っている。これは、十数年前まで、Ngoila を隔てる川の橋が建設されていなかったことにも起因するかもしれない。近年の社会的経済的変化の影響を受けた集落の事例としては興味深い。ロミエから 2 キロほど離れた Susok は、幹線道路に面した立地であるが、2 カ所に比較的まとまった集落が形成されていた。集落の裏手には焼畑が広がり、訪れた時期はちょうど二次林を伐開し、これから火入れをする間際であった。街に近いバカの集落とはいえ、季節に応じては森に狩猟、採集、漁撈のために入るという話を聞いた。学校教育も影響していると思われる地域において、定住集落の暮らしと森の暮らしがどのように関わっているのか興味深い。Susok から数キロ南下した集落 Payo では、バカの集落内に学年別に 3 つの教室を伴う整備された学校を視察した。訪れた当日は休日ということもあって、実際の授業の様子は見学できなかったものの、都市部に隣接したバカ集落における学校教育の実例を探る舞台とし

て適切である印象を受けた。同じく、ロミエの街中に形成されているバカの集落 Ajela も集落内に学校（教室）が立地している。ここではミッション系のほか、国内外の NGO も強く関わっているとのことであり、周辺集落の比較研究が想定できる。

以上のように、これまで筆者が行ってきた研究における観察事例と、予備調査を踏まえた新たな調査地における「生業における子ども」の役割、あるいはそれらが学校教育の影響によってどのような状況にあるのかを探っていくことを、今後の現地調査の課題としたい。他方で、これまでの研究成果の中で、子どもに関わるデータの抽出と分析についてはすすめていくことも急務である。

引用文献

- 林 耕次, 2000. 「カメルーン南東部バカ (Baka) の狩猟採集活動—その実態と今日的意義—」『人間と文化』14, 神戸学院大学人文学会, 27-38 頁.
- Hayashi, K. 2008. "Hunting activities in forest camps among the Baka hunter-gatherers in southeastern Cameroon." *African Study Monographs*, Vol.29 No.2, pp.73-92.
- 亀井伸孝 2010『森の小さな〈ハンター〉たち：狩猟採集民の子どもの民族誌』京都大学学術出版会.

参考

- 2009 年 9 月にフランス・モンペリエで行われた国際シンポジウム (*Transmission between generations*), XXIst Colloquium of the French Society of Human Ecology, 24-25 September 2009. Delegation du CNRS, 1919 route de Mende, Montpellier, France の発表タイトルと英文要旨 (英語での口頭発表)

Knowledge and Skill on Hunting Activity among the Baka Hunter-gatherers in Cameroon : An examination of their transmission

Koji HAYASHI (Kyoto University)

In this presentation I will take on a subject of the daily practices of the Baka hunter-gatherers in the tropical rainforest of Cameroon as a way to introduce the current state of intergenerational transmission of knowledge and skill in hunting and slaughtering activities. This will help to understand a number of issues and changes concerning social conditions, natural environment, and awareness of the Baka people surrounding these hunting activities. From the 1950s onwards, the Baka have become increasingly settled. Subsequent increased educational opportunities brought about by progress in human rights and reduced hunting frequency due to conservation efforts has prompted apprehension at the gradual limiting of opportunities to transmit their knowledge and skill on traditional hunting to the next generation. Additionally, there is also a need to consider changes in the Baka's attitudes towards, and the relationship with, wild animals that have made with them following the market economy. The Baka have managed to remember and transmit distinct knowledge and skill for each element of a process that involves capturing wild animals for use as food in their livelihood sphere for slaughtering, preparing, and eating each of them.

Ways of knowing and ways of learning : A sketch of proposed research at Yuendumu, central Australia

Yasmine Musharbash

(University of Sydney, Australia)

Abstract : Undertaking research in central Australia poses its own specific challenges, some of which I will outline in this paper. In it, I introduce my research location, research context and methodology, and the core question I aim to address : culturally specific ways of knowing and ways of learning and what they entail. I present a brief case study illuminating the inherently different nature of *some* ways of knowing between an Indigenous and a non-Indigenous Australian person, and take this as launching pad from which to explore some of the theoretical and ethnographic challenges ahead.

My paper has two parts : In the first, I introduce my research history and the location of my research. In the second part I explore the questions I would like to investigate over the next four years. I illustrate their relevance, and the challenges they pose theoretically, ethnographically and methodologically with a case study from my most recent fieldtrip.

Being a product of Free University Berlin (where I studied from my undergraduate years through to a research based MA degree) and the Australian National University, where I gained my PhD under the supervision of Professor Nicolas Peterson—it is fair to say that my anthropology is firmly grounded in the British tradition of social anthropology with a strong leaning towards phenomenology. I continue within this tradition in my teaching and research as a lecturer at the University of Sydney. I have undertaken research with three distinct populations in Australia : Torres Strait Islanders, non-Indigenous Australians and Aboriginal people from across central Australia. My most sustained research contact has been with Warlpiri-speakers at the central Australian Aboriginal settlement of Yuendumu, where I have been conducting research annually since 1994.

The theoretical focus of my work spans, broadly speaking, across four domains. The first of these, the cluster of sociality, spatiality, temporality, lies at the core of my research. Sociality, or the ways in which humans relate to other humans, expressed through distinct ways of being in and view-

ing the world lies at the core of all my work and spatiality and temporality are the main axes from which I explore such ontologies. Under this large umbrella, I have undertaken distinct research into inter-generational relations, socialisation, childhood and youth, which—naturally—will flow into the current project. A long time interest of mine has been cross-cultural comparison and cross-cultural interaction, which, in central Australia is part of everyday life through the quotidian dramas of Indigenous/non-Indigenous social interaction, the ensuing relations and socio-cultural transformations. Lastly, I have a deep interest in the anthropology of the emotions and constructions of personhood.

Yuendumu, the community where I began my research career in 1994, and the place to which I return annually is located in the southern region of Australia's Northern Territory ; about 300 kilometers northwest of Alice Springs, the closest township. It is home to Warlpiri speakers, called Warlpiri people or—this is their own word for themselves—Yapa. Warlpiri people used to be nomadic hunter-gatherers, whose homeland spanned the central Australian Tanami desert. In the 1940 s, following some contact with pastoralists in the region, a gold rush in the Tanami a decade or so earlier, the 1928 Coniston massacre during which up to 100 Warlpiri people were killed in a punitive raid, and a recent drought, the federal government through the Department of Aboriginal Affairs established a number of government ration stations in which Warlpiri people (and other Aboriginal

people from neighbouring lands) were sedentised (the other main settlements were Hooker Creek, now called Lajamanu and Warrabri, now called Alekerange). Some Warlpiri people came voluntarily, others were brought in by patrol officers.

Yuendumu was founded in 1946, or 65 years ago, meaning the oldest people still alive today grew up in the desert before sedentisation, but the majority was born and raised during settlement times. These, local people divide into two distinct periods, 'early days' and 'after or now'. The period of "early days" had many characteristics of institutionalisation: Yuendumu, as many other settlements at the time had an all-powerful superintendent. Part of the administration was given to the Baptist Mission, which looked after the school, clinic and communal kitchen. Things changed in 1969 when security entitlements began to be paid to individuals, and in 1978 the first elected council took over settlement administration. After this, grassroots organisations began to sprout up, such as

- the Yuendumu Women's Centre, which started Night Patrol at Yuendumu, as well as the Old People's and Child Care centres,
- Warlpiri Media which produced Manyu Wana—A Sesame Street like programme in Warlpiri, as well as many other resources for Yuendumu School, by now bilingual, and later on produced Bush Mechanics and Aboriginal Rules, and
- the internationally renowned Warlukurlangu Artists Association.

Still, the situation at Yuendumu paralleled that of many fourth world peoples across the globe and mortality rates, alcohol misuse, unemployment and illiteracy continued to rise; something that currently in Australia is discussed as a by-product of the liberal climate of the "self-determination era". The so-called "NT Intervention" (or: Northern Territory Emergency Response) was launched by the previous conservative government in 2007 and continued under the last two labour government and is in effect at Yuendumu. It encompasses a raft of policy implementation (many operating under suspension of the Racial Discrimination Act), from quarantining 50% of people's welfare entitlements to intense government surveillance of everyday life and attempts to change "behaviours and practices". Following Prime Minister Kevin Rudd's official "Apology" to the sto-

len generation and a there made promise to the next generation, young children constitute a particular target. As the current Prime Minister, Julia Gillard, said in the third PM's "Closing the Gap Speech" just last week:

We can be most confident of meeting two of the six targets.

To halve the gap in mortality rates for Indigenous children under five by 2018.

To ensure access to early childhood education for all Indigenous four years olds in remote communities by 2013.

We should be confident these two targets are on track. (<http://www.pm.gov.au/press-office/work-will-go-speech-house-representatives>, accessed 24 February 2011)

In terms of my proposed research this means that there is an intersection between Warlpiri early childhood socialisation and state-funded early childhood care. To date, the Yuendumu Childcare Centre has managed to navigate with delicate balance the thin line dividing non-Indigenous licensing requirements and Indigenous wishes as to how children should be cared for and looked after. The non-Indigenous coordinator and the Indigenous carers, with whom I will collaborate closely, to date have managed to create what they consider a "best of both worlds" environment at the childcare centre, it remains to be seen whether the current climate of surveillance and interference will permit such actions much longer.

In sum, what we find at Yuendumu today is a highly fluctuating population of 400-800 Indigenous residents, a resident population of about 100 non-Indigenous residents (service providers), a never-ending flow of non-resident non-indigenous policy advisors, administrators, public servants coming through daily, resulting in a high level of government involvement in/surveillance of day-to-day decisions, actions, and practices and lastly, high rates of feuding and inter-Indigenous violence.

The Yuendumu nexus of learning, teaching & knowledge

The current situation at Yuendumu, coupled with my engagement in this exciting inter-disciplinary project on learning allow me to pursue a number of my research interests

concurrently : It is just not possible anymore to research childhood socialisation in the camps of Yuendumu alone—the childcare centre and the state need to be included in any such investigation, or, put differently Indigenous/non-Indigenous relations and their impact and influence on childhood socialisation need to be considered simultaneously. I have attempted something similar in another domain in my PhD research, where I looked at Warlpiri ways of dwelling, or constructing and living in domestic space and the impact on vernacular practices by the provision of Western-style housing. In my book, *Yuendumu Everyday* (Musharbash 2008), I examine this intersection of different social practices in historical perspective and the effects it has on contemporary Warlpiri everyday life. In this current project, rather than focussing on camps and houses, I want to investigate ways of teaching⁽¹⁾, ways of learning, the kinds of knowledges thus produced and how they intersect both in the camps of the settlement and at Yuendumu Childcare centre. The following case study elucidates what I mean by kinds of knowledges :

At Yuendumu, at night, people arrange themselves into rows, called *yunta*. *Yunta* provide protection at night when asleep, they create a feeling of safety and shelter, they are a long standing social practice of sleeping but also a place of socialising, story telling, and of learning before falling asleep. Last December, during my research scoping trip, a non-Indigenous friend of mine, Tasha, a young woman working with Aboriginal people in Alice Springs, came to visit me at Yuendumu. As I always “live in camp” when at Yuendumu, she stayed there, too, and at night was part of our *yunta*. She lay on one side of me, and one of my ‘adopted’ Warlpiri grandsons, 11-year old Marley, on the other. She asked, loud enough for all in the *yunta* to hear “hey, which way are our heads facing?” and after I told her, Marley, in Warlpiri said to me “she is really *myall*, isn’t she?” ‘*Myall*’ is a word used all across Australia, the most polite translation of which is ‘stranger’. Its former alleged usage was as a term for Aboriginal people who came in “from the bush” and were found by those who had come in earlier to lack knowledge about dress-codes, food stuffs and new ways of living. Today, at Yuendumu, ‘*myall*’ is often used as a term to describe someone who knows nothing, is ignorant, or stupid.

Marley, of course, knew which way his and our heads were

facing, he knows the cardinal directions at Yuendumu and surrounds (and as I found out in January, he knows them also in Sydney where he came to visit me) at all times. He is growing up in a place and a society that neo-Whorfians describe as having ‘absolute’ rather than a ‘relative’ spatial cognition. People with absolute spatial cognition use cardinal directions to conceptualise where they themselves and anything else in space is located. As Bateson and Mead (1942 : 6) put it for the Balinese (whose intricate spatial system is explored in more depth in Wassmann and Dasen 1998 ; for a comparative example from Aboriginal Australia cf. Levinson 1997) :

The words for the cardinal points are among the first that a child learns and are used even for the geography of the body. A Balinese will tell you that there is a fly ‘on the “west” side of your face’.

The fly, of course, will be on the “east” side of your face if you turn 180 degrees. On the other hand, the relative system, as practiced by speakers, for example, of Indo-European languages uses left and right, back and front—taking one’s own body as the primary point from which to experience space. This has been well established by Piaget (for example, see Piaget 1951 ; 1956), and in terms of language use and everyday perception by Lakoff and Johnson (1980). Naturally, there are combined systems and variations, such as found among certain Mayan speakers (cf. for example Danziger 1996). Wassmann describes the concerns of neo-Whorfians thus :

There are many reasons to think that spatial conceptualization is central to human cognition. Spatial understanding is perhaps the first major intellectual task facing a child. Above all, spatial thinking informs our conceptualizations of many other domains, such as time (‘before tomorrow’), social structure (‘low class’, ‘distant relatives’), music (‘flat notes’), mathematics (‘high numbers’) and emotions (‘high’, ‘depressed’) (Levinson 1992 : 8). Spatial conceptualization also appears to be of interest when examining cultural relativity, since spatial conceptualization is clearly highly constrained by the nature of the physical world ‘out there’, as well as by the nature of human psycho-biology with its visual system and upright nature. (Wassmann 1994 : 646)

While the debate in the main seems to circle around which one is first: cognition or language?—my interest lies elsewhere: what kind of personhood and social relations, or what kind of sociality, is produced by learning, knowing and later in life conveying and passing on a certain system and not another. Put differently, how is the self perceived if it is *not* the centre of the cosmos, as it is in relative spatial systems. What are the similarities and differences in ideas of the person and how persons relate to each other and their world between one system of knowledge and another?

Spatial cognition, naturally, is only one aspect of this question, the immediate next one is located on the temporal plane. Here, my colleague Victoria Burbank's recent work with Australian Aboriginal people at Numbulwar (northeast of Yuendumu, in southern Arnhem Land) is of immediate relevance. Her paper "From Bedtime to on time" (Burbank 2006) compares Western and Aboriginal practices of putting children to bed and how they engender radically different attitudes towards time, attitudes which become jarring in the interactions between the state and Aboriginal children and adults when it comes to being on time at school and work, committing certain numbers of hours to school and work and so forth.

This radical difference is mirrored in Marley's and Tasha's different perceptions of space: while Marley always knows where, say east, is, this is something Tasha has to enquire about or work out with the help of the sun, shadows, stars or a compass. Marley, who like most Warlpiri people I know, regularly mixes up left and right, finds Tasha's lack of knowledge about cardinal directions puzzlingly stupid. There are things Marley, an 11 year old Indigenous boy knows, implicitly, in an embodied way. This kind of knowledge, this kind of being in the world is not granted to Tasha who was brought up differently, who knows things differently and who knows different things. Different ways of teaching, and learning, and different knowledge systems lead to different ways of being in the world, different ways of relating to the world and different ways of thinking about the world. The resultant difference in social practices and attitudes between Indigenous and non-Indigenous peoples in Australia, at this point in time, is seen as responsible, at least in part, and often implicitly, for the gap in health, education and socio-economic status between the two populations.

Undertaking research in the camps of Yuendumu and at Yuendumu Childcare Centre, in the current political climate, I hope, will allow me to investigate not only Warlpiri ways of teaching and learning but also the intersection between those and Western ways of teaching and learning. My primary focus is on what and how children learn. My anthropological aim is to theorise from that about socio-culturally specific Warlpiri ideas of the person and the way the person relates to others and their world—and how they are changing in a rapidly changing world.

Schematic Overview of Proposed Research

In the following, I provide a schematic overview of the research background to sketch the ethnographic context, conceptual framework, methodological challenges and potential insights.

Speaking in the most general terms, socialisation can be seen as the process by which a child is turned into a socio-culturally specific kind of person. Socialisation stands for the totality of processes by which a child learns and is taught—including, most crucially for my research—implicit and embodied aspects of these processes. Put differently, socialisation is not a process that takes place on the verbal/language level exclusively, nor are many aspects of it consciously undertaken. Anthropological research into socialisation thus must pay careful attention to aspects of socialisation which are not verbalised or even thought about. I have begun to look at some of these, and the ways in which the Warlpiri person is coached into being by socialisation (and in a parallel process out of being in the case of senile persons) in previous research (Musharbash In Press). There, I focussed on the Warlpiri domain and drew on much historical research. In the current climate, as a first step, different socialisation processes as they are practiced at Yuendumu need to be taken into account: Indigenous and non-Indigenous ones. These can be analysed on a number of levels.

While a focus on the processes of socialisation, the kind of teaching and learning that takes place (as well as how it might change over time) is important (Figure 1), so is a focus on the kind of person produced by different kinds of socialisation, or Yapa (Warlpiri) and Kardiya (non-Indigenous Australian) personhood (Figure 2).

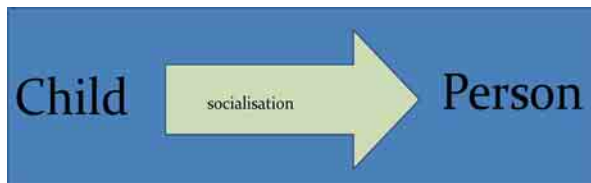


Figure 1 Socialisation transforms child into socio-culturally specific person

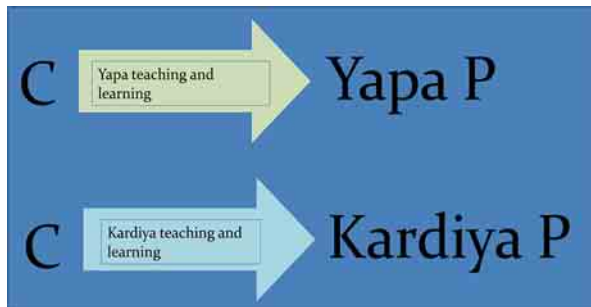


Figure 2 Child turning into Yapa person or Kardiya person depending upon socialisation process

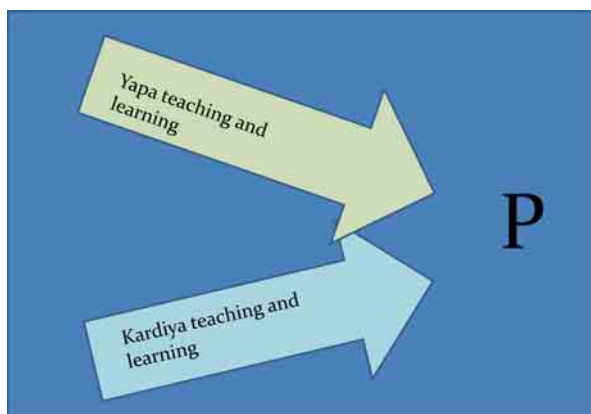


Figure 3 Intersection of processes of socialisation

These realities can be examined on another set of levels, by focussing on the child, on the processes, or on the person, and comparatively on all levels. In the current politico-historical climate, lastly, the intersection of processes and of personhood need to take a primary place in an investigation of teaching and learning at Yuendumu (Figure 3).

Clearly, the proposed research is a huge undertaking. I propose to undertake it in steps, and will begin with a focus on how spatial and temporal concepts are learnt and understood by children at Yuendumu, both at home and at the childcare centre. Methodologically, I will rely heavily upon participant observation, again, in both research locales: around the settlement and camps of Yuendumu and in the childcare centre. This initial participant observations will be augmented by interviews and focus group discussions with the childcare

coordinator, childcare workers, and parents. After analysis of this first data I will consider the next steps. My hope is that over a four or five year cycle of annual research I will be able to provide ethnographic insights into the individual steps of the schematic as I have outlined it here, and thus contribute to the larger project.

Note

- (1) For the purposes of this paper 'teaching' is defined in its broadest possible sense to include all actions and processes during childhood socialization which impart some kind of knowledge to the child. These include verbal and non-verbal practices, can be reflexive or emulative, and so forth.

References

- Bateson, Gregory, and Margret Mead
1942 *Balinese Character: A Photographic Analysis*. New York: New York Academy of Sciences.
- Burbank, Victoria
2006 From Bedtime to On Time: Why Many Aboriginal People Don't Especially Like Participating in Western Institutions. *Anthropological Forum* 16(1): 3–20.
- Danziger, Eve
1996 Parts and Their Counterparts: Spatial and Social Relationships in Mopan Maya. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 2(1): 67–82.
- Lakoff, George, and Mark Johnson
1980 *Metaphors we live by*. University of Chicago Press: Chicago.
- Levinson, Stephen C.
1992 Primer for the Field Investigation of Spatial Description and Conception. *Pragmatics* 2: 5–47.
1997 Language and Cognition: The Cognitive Consequences of Spatial Description in Guugu Yimithirr. *Journal of Linguistic Anthropology* 7(1): 98–131.
- Musharbash, Yasmine
2008 *Yuendumu Everyday. Contemporary Life in Remote Aboriginal Australia*. Canberra: Aboriginal Studies Press.
- In Press Warungka: Becoming and Un-becoming a Warlpiri Person. In *Growing Up in Central Australia: New Anthropological Studies of Aboriginal Childhood and Adolescence*. U. Eickelkamp, ed. New York: Berghahn.
- Piaget, Jean
1951 *The Child's Conception of the World*. London: Routledge & Kegan Paul.
1956 *The Child's Conception of Space*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Wassmann, Jurg
1994 The Yupno as Post-Newtonian Scientists: The Question of What is 'Natural' in Spatial Description. *Man* 29(3): 645–666.

Wassmann, Jurg, and Pierre R. Dasen

1998 Balinese Spatial Orientation : Some Empirical Evidence
of Moderate Linguistic Relativity. *The Journal of the
Royal Anthropological Institute* 4(4) : 689–711.

新学術領域研究「交替劇」A-02 班

第 1 回班会議

2010 年 8 月 2 日（月）、午後 2 時 30 分から 5 時 30 分
神戸学院大学 3 号館 4 階、大学院演習室（2）

参加者：

寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）、窪田幸子（神戸大学大学院・国際文化学研究科）、今村薫（名古屋学院大学・経済学部）、大村敬一（大阪大学大学院・言語文化研究科）、亀井伸孝（大阪国際大学・人間科学部）、高田明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）、早木仁成（神戸学院大学・人文学部）

資料：

- (1) ヒアリング PPT
- (2) A 02 班 PPT
- (3) 総括班第 1 回会議報告
- (4) 第 64 回人類学会学術大会ミニシンポ要旨
- (5) その他

議題：

1. 「交替劇」全体のテーマと計画について
2. 今後の全体会議と班会議のスケジュール
3. 各自の今年度の具体的研究内容
4. 他のグループとの連携
5. その他

会議内容：

1. 「交替劇」全体のテーマと計画について
上記の要領で「交替劇」A 02 班第 1 回目の研究会を招集し、研究の主旨の説明と意見の交換を行なった。まず、「交替劇」プロジェクトにおける当班の全体的・最終的な役割と具体的目標、その方法などに関して、文科省におけるヒアリング（5 月 26 日）用に作成したプレゼンテーションをもとに寺嶋から説明を行なった。当班の目標は狩猟採集民を主対象として、その学習行動の特性を把握することであり、とくに創造的学習・創造性の出現のありかたを子どもの遊びや成長の過程において把握することである。また、さまざまな知識・技能の習得（模倣学習・観察学習）と新しい知識・技能の獲得（個体学習）の様態についても、きめ細かい現地調査によっ

て明らかにしていく必要があることが確認された。

2. 今後の全体会議と班会議のスケジュール

第 1 回の総括班会議（7 月 16 日、於東京）での決定を受けて、今年度の研究大会のスケジュールを報告した。また、当班の班会議と共同研究会について議論し、以下のように日程の決定をした。

【全体研究大会】（総括班主宰：公開）

第 1 回研究大会 2010 年 10 月 23 日、24 日（於 東京）

第 2 回研究大会 2011 年 2 月 19 日、20 日（於 神戸）

[当班が開催事務局となる]

【班会議】（原則非公開）

第 2 回班会議 2010 年 12 月 12 日（土）（於 神戸大学）

第 3 回班会議 2011 年 2 月（於 神戸学院大学）

【研究集会】（原則公開）

第 1 回共同研究会 2010 年 12 月 12 日（土）（於 神戸大学）

第 2 回共同研究会 2011 年 2 月（於 神戸学院大学）

なお、第 2 回共同研究会、および第 2 回研究大会においては、海外の研究協力者（Yasmine Musharbash, Barry Hewlett 氏など）を招聘することも決定した。

3. 各自の今年度の具体的研究内容

各自の今年度の調査計画と個別具体的な目標について、それぞれ用意したハンドアウトに沿って説明があった。現地調査については、窪田（オーストラリア、Yasmine Musharbash と共同調査）、大村（カナダ）、高田（ボツワナ、ナミビア、ヨーロッパ、北米）、寺嶋（カメルーン）から説明があった。その他は、国内をベースとした研究を行なう。また、寺嶋と市川は、9 月 22 日～24 日、フランス、モンペリエの CNRS にて開催される「コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議」に出席し、関連した発表をすることを報告した。

4. 他のグループとの連携

とくに、A 01 班（考古学分野）と B 02 班（脳機能分

野)との連携が課題になる。どのような連携が可能か、当班としてはどのようなアプローチをするか検討した。A 01 班(考古学分野)とは、石器の作成をめぐる研究が必要だが、現在では石器製作は行なわれてはいない。したがって、それにかわる道具製作に関する情報を集積することにした。B 02 班(脳機能分野)との連携では、心理学的創造性テストを利用した連携が考えられる。その具体的モデルの検討を心理学分野の班員にお願いすることにした。

5. その他

- 1) 秋に公募研究の募集が始まるので、関連研究者にその旨を連絡することとした。
- 2) 第2回研究大会が、2011年2月19日・20日、神戸にて開催、当班が開催事務局となるとの総括班会議での決定を受けて、使用会場や準備の進め方などについて意見を交換した。

3) 当班の研究の推進と種々の事務処理のために、今年度後期から研究協力者(PD)一人を神戸学院にて雇用することを決定した。

4) 第64回人類学会学術大会(10月1日～3日、於 北海道伊達紋別市)にて「交替劇」についてのミニシンポジウムを行なうことが総括班で決定された。その要旨の説明を行ない、班員・関係者の参加を要請した。

5) 12月から「ヒトにおける遊びと学習の進化的展望プロジェクト」共同研究会を発足させるが、その具体的進め方について議論し、外部の講師も招いたうえで総合的な観点からの研究を進めることにした。その場合の招聘候補者を検討することにした。

以上

(文責 寺嶋秀明)

新学術領域研究「交替劇」A-02 班

第 2 回班会議・共同研究会

2010 年 12 月 11 日 (土)
神戸大学

【第 2 回 班会議】 11:00-12:00

参加者：寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部），小山正（神戸学院大学・人文学部），山上榮子（神戸学院大学・人文学部），窪田幸子（神戸大学大学院・国際文化学研究科），大村敬一（大阪大学大学院・言語文化研究科），亀井伸孝（大阪国際大学・人間科学部），早木仁成（神戸学院大学・人文学部），林 耕次（神戸学院大学・人文学部 ポストドクトラルフェロー），杉山由季（大阪大学大学院・人間科学研究科 大学院生），以上 9 名

議題：

0. 新メンバーの紹介（研究協力者・林 耕次）
1. 研究の進捗状況報告：これまでの経過と年度末までの予定，予算消化状況
2. 第 3 回 A 02 班会議・共同研究会（2011 年 2 月 18 日）について
会場：神戸学院大学ボーアイキャンパス
発表者：箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授），Bonnie Hewlett（ワシントン州立大学・客員教授），Adam Howell Boyette（ワシントン州立大学・大学院生）ほか，海外協力者 2 名（Barry S. Hewlett, Yasmine Musharash）が参加予定。
3. 第 2 回全体会議（2011 年 2 月 19 日，20 日）について
会場：神戸学院大学ボーアイキャンパス
発表者：寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部），高田明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科），Barry S. Hewlett（ワシントン州立大学・人類学部・教授），Yasmine Musharash（シドニー大学・政治科学社会学部・講師）
準備の依頼：レジュメ作成，ポスター作成，写真パネル作成等。
4. 2010 年度末の報告書について
体裁・コンセプト，原稿締切日の確認
5. 年度末スケジュール
臨時班会議の開催（3 月末 or 4 月早々？）；2011 年度の計画について
※赤澤先生より機関誌『交替劇』（仮称）創刊のお知らせ

【第 2 回 共同研究会】 13:30-17:30

「ヒトにおける遊びと学習の進化的展望プロジェクト」13 時～17 時

参加者：班会議参加者 9 名ほか，正高信男（京都大学 霊長類学研究所），西秋良宏（東京大学総合研究博物館・A 01 班），久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所・A 01 班）+ オブザーバー 2 名（大阪大学・大学院生）

研究会プログラム：

1. 研究会の趣旨説明（寺嶋秀明・神戸学院大学）
2. （研究発表①）「学習」と「創造性」をめぐる人類学的研究の諸問題
状況認知論と「身体化された心」理論と生態心理学から「文化化」問題を再考する
大村敬一（大阪大学大学院 言語文化研究科・A 02 班研究分担者）
発表の概要：大村氏の問題関心である「イヌイトの知識（IQ: *Inuit Qaujimajatuqangit*）」を発端として，イヌイトの「知識」が「生き方」に反映されるプロセス，あるいはメカニズムについて，「文化の学習」（＝「文化化」）や学習による「創造性」をキーワードとしながら，おもに文化人類学の立場より，これまで扱われてきた理論に言及しながら考察した。実践の場においては，「記憶」と「身体化された知識」の表象として，「遊び」または「戯れ」に至るというテーゼ（仮説）を提示した。
3. （研究発表②）発達障害の strength と，その適応的意義：実証の可能性を交替劇に問う
正高信男（京都大学 霊長類研究所）
発表の概要：現代社会においては，発達障害をもつということは負の側面から捉えられる傾向にあるが，他方で様々な分野での感受性，関心の高さがつよい者であることをこれまでに正高氏が行った実験結果の映像を交えながら提示した。その上で，発達障害をもつ者が，狩猟民のような社会では，淘汰されない存在として独自の道を切り開きながら，独自のライフスタイル

と生計の道を切り開く vitality にあふれた者ではなかったのかという仮説を示した。

4. 総括

正高氏への質疑応答の際に引き続き、総合討論では、「狩猟採集民」「新人」「旧人」「サル」といった異なるレベルからの「創造性」、あるいは「模倣」についての発言が目立った。例えば、旧人による石器の加工を例に、「模倣」といっても、技術の産物である模倣と、心理学的に解釈できる行動や行為の模倣であるという指摘がなされた。その上で、正高氏の発表で紹介された、発達障害にみられるような自然なものへの感受性・関心の高さが、(現代の)狩猟採集民などにも共通するものではないかという推測が検討された。他方、「創造性」については、大村氏による発表でも指摘されたような、「遊び」や「遊び」を伴う行動が、現代の狩猟採集民のなかでもみられるある種の共通した事象としてみられる旨のコメントがあり、活発な議論が交わされた。現代の狩猟採集民にみられる「模様」や「創造性」の観察を通して、こうした関心が「学習の進化」という文脈で、今後どのように展開されていくのかに期待したい。

以上

文責・林 耕次(神戸学院大学 PD・研究協力者)

【発表要旨①】

「学習」と「創造性」をめぐる 人類学的研究の諸問題 状況認知論と「身体化された心」理論と 生態心理学から「文化化」問題を 再考する

大 村 敬 一

(大阪大学大学院 言語文化研究科)

文化の学習とはどのようなことで、その学習における創造性とはどのようなことなのか。

文化人類学では、しばしば「文化化」とも呼ばれてきた文化の学習の過程が大きな問題になってきた。1980年代以前の文化人類学では、文化は個人によって後天的に学習されるべき知識であるとされ、そうした知識としての文化が個人に一方的に内化される過程としてばかり「文化化」の過程を考えてきたため、個人が文化を変化させてゆく創造的な過程が見過ごされてしまい、ある社会に属する諸個人は同じ文化を均質にプログラムされた自動人形のように描かれるようになってしまったか

らである。「文化化」の過程で人々にプログラムされる社会の本質であるかのように文化を描いてしまう本質主義の問題である。

こうした本質主義が批判されるなか、認知人類学者のジーン・レイヴはピエール・ブルデューの実践の理論を導入しながら、自らのフィールドワークの成果に基づいて「文化化」の過程を再検討し、文化の学習はあらゆる日常の実践に遍在しており、その日常の実践＝学習の過程では、社会的な実践によって社会に参加してゆく個人は、文化を学習すると同時に創造的に変えていることを明らかにした。そして、そうした創造的な社会的実践＝学習の過程を分析するための理論的な枠組みを提示した。

この発表では、このレイヴの理論的な枠組みにティム・インゴールドの「身体化された心(心化された身体)」における学習理論を重ね合わせ、さらに、発表者がカナダ極北圏の狩猟採集民のイヌイトの間で行った調査の成果をジェームズ・ギブソンの生態心理学のアフォーダンスの考え方、モーリス・メルロ＝ポンティの身体図式の議論、大森荘蔵の記憶論、広松渉の表情論、フランツ・ボアズの「身体運動の習慣(モーター・ハビット)」論と様式変容論に結びつけた考察に基づいて検討し、次のような理論的な枠組みを仮説として提示した。

- (1) 日常的な社会・文化的実践＝学習の過程はすべて創造的である。
- (2) 実践＝学習過程の分析の枠組みは次の三つのレベルから構成される。
 - (A) 環境のレベル：記号体系(表象の体系)としての文化が、政治・経済的な社会制度と生態系にいかに関わり込まれ、生態＝社会＝文化環境の意味(価値)を生み出しているのか？
 - (B) 身体化された心のレベル：身体化された心に関わり記憶が組み込まれるのか？
 - (C) 弁証法的関係のレベル：身体化された心は、生態＝社会＝文化環境との関係の中でいかに動機づけられ、環境をいかに資源として利用しながら、いかに行為しつつ、学習を通して記憶をいかに更新し、いかに自らを変えたとともに、いかに環境を変えているのか？
- (3) 正当化された信念としての知識は環境レベルの問題であり、身体化された心が習得するのは記憶である。
- (4) 記憶の基本的な構成単位は、「～すると～することができた」という相互行為の型が身体図式の流れとして編成された身体のかたちである。
- (5) 相互行為の型を示す身体図式の流れを最小のユニッ

トとする記憶体は、多層のレベルからなる構造体として、神経ネットワークと身体形質として身体そのものに埋め込まれる。この意味で身体とは記憶体である。

- (6) 記憶のユニットである身体図式の流れには、知・情・意という三つの顔があり、認知と感情と意志は同時に起動する。
- (7) 学習とは、記憶体としての身体と環境を共に変化させて調整し、身体と環境を直接にカップリングさせることで、「巨きな単一の振動装置系」として現存する環境に自らの身体を組み込んで身体を延長することである。この過程が共感と呼ばれる。
- (8) 表象とは、記憶のユニットである身体図式の流れを起動する装置であり、記憶のユニットとは論理階型を異にする存在である。
- (9) 表象は、環境の物理的な制約のないところで身体図式の流れを仮想的に組み合わせる戦略的なやり方を可能にする。これは身体図式の流れの組み合わせの自由度を上げ、実験的な手法を可能にする。
- (10) 社会・文化の変革は、身体図式の流れ、つまり技法を仮想的かつ意識的に組み合わせることによって生じる。
- (11) 身体図式の流れを仮想的に組み合わせる戦略的なやり方を可能にする表象は社会・文化の変革の可能性を増大させる。
- (12) 現生人類の学習の特徴は、表象の介在によって変革の可能性を増大させるところにあり、環境適応の幅を大きく増大させる可能性がある。
- (13) この表象によって現生人類は想起や妄想との戯れや遊びという贅沢を手に入れた。
- (14) 遊びは、表象という論理階型の多層性を利用する現生人類の能力の上に成り立つという意味で実験と同列だが、革新は遊びで起きるとは限らない。

【発表要旨②】

発達障害の strength と、その適応的意義：実証の可能性を交替劇に問う

正 高 信 男
(京都大学 霊長類研究所)

発達障害をもつということは、社会性の欠落とおうおうにして考えられている。しかしそれは他人にたよることがなく、独力で道をきりひらき、独自のライフスタ

イルと生計の道をきりひらく vitality にあふれている者ではなかったのか。現状に満足することなく、たえず変化を求め、あたらしいことに好奇の眼をむける進取の精神の持ち主であったかもしれないという説は、従来の障害をその負の面ばかりに着目する発想にはない前向きさがあり、否定できない魅力が存在する。

それが現代人が隆盛をさわめるなかで、少数派と化して社会の片隅においやられてきてしまったのであるとするならば、その少数派の特性を実証的に研究することによって、私たちはまさに、障害の見方を根本的に変換することになるとおもわれ、その意義はけっして小さくないと想定されるのである。

発達障害の問題が社会の注目をあつめるようになって久しい。こうした障害は、脳のごくわずかな機能障害によってもたらされることが明かとなってきた。脳はさまざまな情報処理を行っている。その局所的な機能不全とネットワークに支障の生ずることが、生活のさまざまな困難にさまざまな形で反映されてくることが判明してきている。脳のどこにどのような問題が生じているかによって、その困難の質は大きく左右されることも解明されてきた。

また、その障害のほとんどは遺伝的なものであることも明らかとなってきている。文部科学省の 2004 年の調査結果によると、全国の小・中学校において、通常学級に在籍している子どもの 6.3% (約 67 万 9000 人) が何らかの形でこのような障害を抱えているとされている。これは言うまでもなく、たいへんな数字である。どうしてこのようなことが、起こったのだろうか？

生物学の常識に従うならば、およそ障害という概念に従うかぎり、その発症率は 2 万人にひとりとか、1 万 6000 人にひとりであるのが当然である。障害とは元来、生存する上で不利を被る以上、自然淘汰の対象によりなりやすいからにはほかならない。つまり障害を持っているために、子孫を残す上で不利であるからである。ひるがえって発達障害で、発症率が「異様に」高いという事実は、この一連の障害を被っていても、今まではなんら淘汰の対象にとりたててなることはなかったことを示唆している。つまり生きていく上で、不利を被ることはなかったし、たいていは障害でも何でもなかったということになる。

軽度であれ何であれ、およそ障害と名づけられたものが本当は障害でなかったというのは、全くの矛盾である。そして私たちは、この事実に冷静に着目することから、(1) なぜ淘汰されない障害が存在し、かつ (2) なぜ今になってそれが障害として問題視されなくてはならなくなったのかを、考えなくてはならないのである。そ

して、そこでひとつの解釈として人類学で仮説として提唱されてきたのが、「今日では障害として、短所としてかたづけられてしまっている特性も以前は、適応的な特性であった」とする考え方である。

端的に、「キレ」やすい子ども、学校で「落ち着きのない」子どもがその典型として、海外では論じられてきている。今日では、学校でクラスメイトとの協調性に欠け、授業についていけない「落ちこぼれ」であるかもしれないが、人類がかつて経験した狩猟生活では果たして、どうだったか？

他人にたよることがなく、独力で道をきりひらき、独自のライフスタイルと生計の道をきりひらく vitality にあふれている者ではなかったのか。現状に満足することなく、たえず変化を求め、あたらしいことに好奇の眼をむける進取の精神の持ち主であったかもしれないという説は、従来の障害をその負の面ばかりに着目する発想にはない前向きさがあり、否定できない魅力が存在する。

それが現代人が隆盛をきわめるなかで、少数派と化して社会の片隅においやられてきてしまったのであるとするならば、その少数派の特性を実証的に研究することによって、私たちはまさに、「交替劇」を心理的側面においてつまびらかにすることに成功することになるのではないかと考えられるのである。しかも、上述の仮説はあくまで仮説にとどまり、支持するデータを得ることなく今日にいたっているのである。本発表では、こうした発想のもと発達障害の子どものなかに、狩猟人としての特性を実験的に発見しようとする仮説を提示した。

【参考・研究会の様子（撮影：林 耕次）】



（大村氏による発表の様子）



（正高氏による発表の様子）



（質疑応答の様子）



（研究会には、A 01 班の西秋先生なども参加された。）

新学術領域研究「交替劇」A-02 班

第 3 回班会議・研究会

2011 年 2 月 18 日 (金)

神戸学院大学・ポーアイキャンパス A 号館 4F 第 2 中会議室

【班会議】10:30-12:30

参加者：寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部），小山正（神戸学院大学・人文学部），山上榮子（神戸学院大学・人文学部），窪田幸子（神戸大学大学院・国際文化学研究科），今村 薫（名古屋学院大学・経済学部），早木仁成（神戸学院大学・人文学部），高田 明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科），亀井伸孝（大阪国際大学・人間科学部），林 耕次（神戸学院大学・人文学部 PD），赤澤 威（高知工科大学・「交替劇」代表），島田将喜（帝京科学大学・生命環境学部）金子守恵（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）。

以上，12 名。

10:30-11:30 班会議：2 月 19-20 日の「交替劇」大会について，来年度の計画，他

11:30-12:30 ミニ研究会：

島田 将喜（帝京科学大学・生命環境学部）

「霊長類のコモの遊びと『交替劇』」

金子 守恵（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

「エチオピア西南部 オモ系農耕民 土器づくりの女性職人

：身体技法，技法の継承と創造性」

【研究会】13:30-18:00

参加者：午前中の連絡会議参加者 12 名。その他，Barry S. Hewlett, Bonnie Hewlett, Adam Howell Boyette (Department of Anthropology, Washington State University), Yasmine Musharbash (School of Social and Political Sciences, the University of Sydney), 箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授），竹内 潔（富山大学・人文学部），園田浩司（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科），彭宇潔（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）。

以上，20 名。

13:30-14:30 外国人研究者の自己紹介

14:30-15:45 研究発表①

Adam Howell Boyette (Ph. D Candidate, Washington State University)

The Nature of Play Among Aka Forest Forager and Ngandu Farmer Children of the Central African Republic

16:00-17:15 研究発表②

箕浦康子（お茶の水女子大学 名誉教授）

「道具，身体，脳～子どもの遊びと感覚統合との関連～」

Tools, Body and Brain: In Reference to Children's Play and Sensory Integration

17:15-18:00 総合討論

【発表要旨①】

The Nature of Play Among Aka Forest Forager and Ngandu Farmer Children of the Central African Republic

Adam Howell Boyette

(Ph. D Candidate, Washington State University)

Play is a ubiquitous activity among the young of most mammalian species, and is clearly a central feature of the lives of human children. It has therefore been hypothesized that play is an adaptation, having increased the chance of survival of those individuals who played over evolutionary time. Play is complex and variation is among its core features. The adaptive nature of specific types of play is not always clear, though evidence suggests that with greater sociality and greater cognitive abilities there is greater complexity to play. There is little research on children's play across human cultures, though enough exists to say there are universal play types and there is variation between cultures and between sexes within and across cultures. This study is the first systematic, observational study of children's play across child-

hood (years 4 through 18) in two cultures. The Aka are a mobile, foraging people whose culture emphasizes egalitarianism, sharing, and autonomy, whereas the Ngandu have an economy based on farming and commerce, and emphasize hierarchy, materiality, and obedience in their cultural values. Play was coded as social, solitary, or as emulation of true productive activities. Individual activities were further categorized into 11 types of play and 12 types of emulated activities. Ngandu children spend significantly more time in play than Aka children across childhood, though both play less frequently with age. Play types such as object play, exploration play, and chase play show similar patterns across cultures and sexes, and decrease linearly with age (universals), whereas rough and tumble play is more frequent in boys than girls in both cultures (sex-specific). In general, Ngandu children are found to have greater variance in time spent in different types of play, and greater sex differences (culturally-determined). Cultural, sex, and age patterns in children's play are explained in reference to human biological and cultural evolution, and the implications for social learning and cultural transmission are considered.

【発表要旨②】

Tools, Body and Brain ~In Reference to Children's Play and Sensory Integration~

Yasuko Minoura

(Professor emeritus, Ochanomizu University)

This presentation consists of two parts. In the first part Ayres' theory of sensory integration on the mental and physical development through children's play is introduced as a possible hint to explore appearance of motor and cognitive capability to produce Mousterian stone tools by Homo Sapiens Neandertalensis. The four stages of sensory integration from birth to around age seven are discussed along with treatment to let children, who suffer from the underdevelopment of sensory integration, learn how to use their body. The second part focuses upon human hands as key body parts for tool-using and -making behavior and indicates how precision grip differs from power grip in terms of activation of motor neurons. The presentation suggests that the Hand Test, a projective test developed in the field of clinical psychology, may be employed to collect data about how children use their hands in hunting-gathering societies in order to estimate how Neandertalensis use their hands.

The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers (Montpellier, FRANCE ; September 22-24, 2010)

(『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議』 フランス・モンペリエ 2010年9月22-24日)

報告書

【参加・発表した『交替劇』A 02 班関係者】

寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）

市川光雄（京都大学・名誉教授）

Barry S. Hewlett（ワシントン州立大学・人文学部）

林 耕次（神戸学院大学・ポストドクトラルフェロー

※当時は京都大学所属）

2010年9月にフランス南部の中心都市のひとつであるモンペリエで、初めの開催となった『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議』では、『交替劇』A 02 班（「狩猟採集民の調査に基づくヒトの学習行動の特性の実証的研究」）に関わる4名が参加し、各自発表に臨んだ。

ICCBHG とは

『コンゴ盆地の狩猟採集民国際会議（The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers）』は英語の頭文字をとって、ICCBHG という略称で呼ばれた。参加したのは、文字通りアフリカ中央部のコンゴ盆地に生きる狩猟採集民を専門にしている人類学者のほか、考古学や遺伝学、自然科学など関連諸分野の研究者であった。今回、初めての開催となった ICCBHG は、それまで4年おきに定期開催されていた『狩猟採集社会会議（The Conference on Hunting and Gathering Societies ; CHAGS）』に代わるものとして位置づけられていると言ってよいだろう。CHAGS は、1998年の大阪・国立民族学博物館での開催、2002年英国エディンバラでの開催以降、諸々の事情により開催が停滞している。移りゆく狩猟採集民社会の動向について、世界中の研究者が一堂に集まって最新の情報や研究成果を直接共有する機会を望む声は以前から高まっていた。とくに、コンゴ盆地における狩猟採集民をめぐる近年の状況は大きく変貌している。そうした背景を含みつつ、この ICCBHG では、各フィールドで現地調査を続ける若手の研究者を中心とした多地域・多方面の分野からの研究発表が相次いだ。

会議の様子

記念すべき第一回目の大会となるモンペリエでの大会では、主催者のひとりである Edmond Dounias 博士（モンペリエ・フランス国立科学研究センター；CNRS）がオーガナイザーとなって開催された。Dounias 博士の他、米国・ワシントン州立大学の Barry S. Hewlett 教授、富山大学人文学部の竹内潔准教授が運営の中心となった。参加者のうち、地元フランスを含む欧州の研究者、アメリカの Hewlett 教授の研究グループを中心とした研究者、京都大学を中心とした日本からの研究者も多数（11名）参加した。会議では、アメリカと日本からの研究者に配慮して、原則、英語が使用言語とされた。フランス語を母語として発表する場合でも、口頭かディスプレイのいずれかには必ず英語を使うことが義務とされた。また、三日間におよぶ長丁場の会議であったが、事前に発表内容のアブストラクトと発表のスライドがネット上に公開されたことは参加者にとって便利だったと思われる。

モンペリエでの大会は、9月22日から24日まで開催された。口頭発表では、S. Bahuchet 博士（フランス国立科学研究センター、フランス国立民族自然史博物館）による基調講演につづき、11のセッションで合計47の発表があった。また、ポスター発表では、6つのテーマに分かれ10の発表があった。発表内容では、いわゆる「ピグミー」と総称されるコンゴ盆地の狩猟採集民を対象としたものが大半を占めたが、テーマは近年の動向を交えた社会的文化的変容に関するものが多い傾向にあった。なお、アフリカ・カメルーン共和国からは世界的な NGO 組織である WWF（世界自然保護基金；World Wide Fund for Nature）の現地関係者も数名参加していたが、自然保護活動をめぐる自らの正当性を訴える発表・発言が印象的であった。

『交替劇』に関連した発表

会議では、『交替劇』A 02 班の関係者も発表に臨んだ。発表者と題目は以下の通りである。

・寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）

The Children of Hunter-Gatherers, the Way of Learning and the Evolution of *Homo sapiens* (Poster)

・市川光雄（京都大学・名誉教授）

Historical Ecology and Contemporary Problems in the Congo Basin Forests

・Barry S. Hewlett（ワシントン州立大学・人文学部）

1) Recreational Drug Use as Potential Protection Against pathogens : Smokers among Central African Foragers have Fewer Worms than Non-Smokers

2) Social and Structural Characteristics of Breasueeding among the Aka and Bofi Foragers and Ngandu and Bofi Farmers : A Bio-Cultural Approach

（※いずれも共同研究者として連名）

・林 耕次（神戸学院大学・ポストドクトラルフェロー
※当時は京都大学所属）

Daily activities among the Baka Hunter-gatherers of Cameroon : From Individual Observations at the Forest Camp and the Settlement

『交替劇』寺嶋は、ピグミー系狩猟採集民の子どもを含めた世界各地の狩猟採集民の子どもを対象に、『交替劇』プロジェクトのテーマに即したポスター発表を行った。自身が提供するデータの他、A 02 班の班員である窪田、今村、大村、亀井各氏の資料を盛り込んだものである。

他方で、『交替劇』プロジェクトに関連した、「子ども」「遊び」「学習」をキーワードとした発表も散見した。そのいくつかを以下に紹介する。

・Cooperation and Child Growth among Aka Foragers

Meehan, Courtney L. and Helfrecht, Courtney (Washington State University)

コンゴ共和国のアカ・ピグミーを対象とした子育ての協調と子どもの成長に関する発表。育児期間において、どのような人が関わるかによって子どもの成長や発達、健康等に及ぼす影響について検証した。

・The Prominence of Other Children in Culture Learning During Aka Forager Early through Late Childhood

Boyette, Adam Howell (Washington State University)

年齢や性別の異なる子どもたちが互いに干渉することで、文化的社会的な知識と経験を日常の生活から習得していくことを、同じく、コンゴ共和国のアカ・ピグミーを対象とした調査資料から提示した。

・Aka Foragers as a Baseline for a Hunting-Gathering Model of Adolescence

Hewlett, Bonnie (Washington State University)

これまで狩猟採集民の子どもに関する研究が、おもに幼年期の子どもと母親の関係に注目されてきたことを受けて、アカ・ピグミーの10歳から20歳までの年齢層に着目し、青年期の行動分析を通して検証した。

以上に紹介した三つの研究発表は、いずれも Barry S. Hewlett 博士の所属する米国・ワシントン州立大学からの参加者によるものであった。コンゴ盆地における狩猟採集民の子どもを対象とした研究の先駆者として知られる Hewlett 博士のもとで、同一の地域・民族を対象とした多岐にわたる研究内容の展開が示された。

日本の研究者による発表では、市川光雄氏による歴史生態学を土台とした発表をはじめ、異なるピグミー系のグループ、調査地域における人類学を基盤としたアプローチを中心に、生業、社会関係、コミュニケーション、健康科学などの多様なテーマが扱われ、層の厚さがアピールされた。

ベテランの研究者にとっては、懐かしい友人に再会する場であり、若い研究者にとっては、将来に引き継がれるであろう貴重な人脈を築く場でもあった。今後とも、このような会議が定期的に開催されることを期待したい。

（参考）The International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers (ICCBHG) の公式ホームページ : <http://www.cefe.cnrs.fr/ibc/Conference/ICCBHG.htm>

以上、文責・林 耕次（神戸学院大学・研究協力者）

【参考・ICCBHGの様子（撮影：林 耕次）】



（会場前の看板。モンパリエのフランス国立科学研究センター（CNRS）内ホールで開催された。）



（初日終了後の懇親会で。左より B. S. Hewlett 教授，L. L. Cavalli-Sforza 博士，市川光雄氏。）



（寺嶋によるポスター発表の様子。）



（久しぶりの再会。寺嶋と狩猟採集民研究の泰斗である J. Woodburn 博士。）



（口頭発表に臨む林。右手は、座長を務めた会議主催者 E. Dounias 博士。※撮影は共同発表者の山内太郎北海道大学准教授。）